

第19回冬季デフリンピック競技大会 日本選手団参加報告書



公益財団法人 日本障がい者スポーツ協会
一般財団法人 全日本ろうあ連盟

秋篠宮皇嗣同妃両殿下ご接見



日本選手団・花島主将による挨拶



集合写真

日本からイタリアへ



選手団が元気に出発

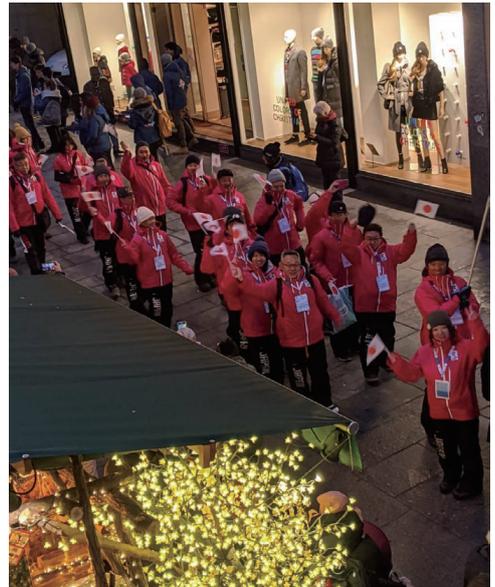


在ミラノ日本国総領事館・雨宮雄治総領事より激励の挨拶をいただきました



みんなでスローガン「きらめいて、雪と氷の風となれ 情熱 Japan」

開会式



ICSD 陳会長のあいさつ

アルペンスキー競技



スノーボード競技アルペンスノーボード種目



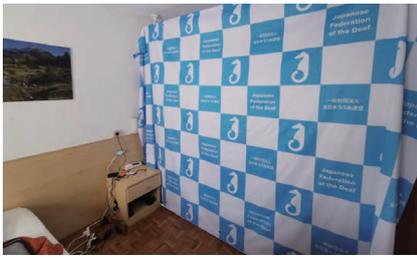
スノーボード競技スノーボードフリースタイル種目



カーリング競技



本部



閉会式



入賞者等に係る文部科学大臣表彰式



萩生田光一文部科学大臣より挨拶



集合写真

(提供:スポーツ庁)

目 次

1. 日本選手団参加報告書の発刊について（お礼）	1
2. 第19回冬季デフリンピック競技大会及び日本選手団の概要	2
3. 日本選手団名簿	3
4. 成績一覧	
①入賞者一覧	5
②国別メダル獲得成績一覧	6
③各競技成績一覧	7
5. 日本選手団団員報告	
①本部役員・スタッフ	9
②アルペンスキー競技チーム	29
③アルペンスノーボード競技チーム	33
④スノーボードフリースタイル競技チーム	39
⑤カーリング競技男子チーム	46
今大会における受傷、またその対応について	54
6. 資料	
①日本選手団編成にかかる指針	55
②派遣スケジュール	57
③候補選手推薦用紙	58
④候補スタッフ推薦用紙	59
⑤会員確認書	60
⑥誓約書	60
⑦承諾書	60
⑧オリエンテーション	61
⑨出発案内冊子	65
⑩必携マニュアル	68
⑪ソーシャルメディアガイドライン	84
⑫デフリンピック開催地一覧	88

第19回冬季デフリンピック競技大会 日本選手団報告書の発刊について（お礼）

一般財団法人全日本ろうあ連盟理事長
デフリンピック派遣委員会委員長
石野富志三郎

第19回冬季デフリンピックがイタリアのヴァルテッリーナ・ヴァルキアヴェンナ地方にて2019年12月12日から21日まで10日間にわたり開催され、日本からは選手・スタッフ合わせて47名を派遣いたしました。出発前には秋篠宮皇嗣同妃両殿下、眞子内親王殿下および佳子内親王殿下との御接見で温かい励ましのお言葉を賜り、選手1人1人が日の丸を背負って世界の舞台に立つ責任を改めて認識し、より一層気を引き締めました。

今回の大会では、競技会場が離れた2ヶ所に分かれたことや、スノーボード競技の一部種目で急遽会場変更があったことなど、選手にとって良い環境とはいえない状況ではありましたが、その中でも選手達は日本代表という誇りのもとに、各自持てる力を全て発揮していました。前大会（ロシア・2015年3月）の成績を超えるべく6個獲得を目標とし、チーム一丸となって大会に臨みましたが、残念ながらメダル獲得はならず入賞6名にとどまりました。この成績を教訓にし、4年後の大会に向けて引き続き競技団体とともに選手強化を支援して参ります。

選手達はデフスポーツ大会の最高峰であるデフリンピック出場を目指し、日々練習に取り組んでいます。仕事や学校と両立しながら鍛錬していくには周りの理解や環境が非常に大切となります。しかし、デフスポーツに対する国内での認知度はパラリンピックに比べるとまだまだ低く、この状況を変えていくことでデフスポーツが発展し、トップアスリーの育成、そしてメダル獲得へと大きくつながっていくことになるでしょう。

現在、デフリンピック・デフスポーツの認知度の向上を図るべく、「障がい者スポーツ・パラリンピック推進議員連盟デフリンピック推進ワーキングチーム」が立ち上がるなど、少しずつ支援の輪が広がっています。連盟としても、引き続き世界で活躍できる次世代の選手の育成、また夏季・冬季ともにデフスポーツの競技環境の整備が進むよう引き続き取り組みを続け、デフスポーツに対する気運を盛り上げ、2025年夏季デフリンピック競技大会の日本招致を実現させる所存です。

ご支援を賜りました文部科学省をはじめ、宮内庁、スポーツ庁、外務省、公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 日本パラリンピック委員会、全国手話通訳問題研究会、国立障害者リハビリテーションセンター、メディカルサポートの皆様、関係各団体、そして選手やスタッフを快く派遣して下さった各学校・各企業等、選手・スタッフを日頃から陰で支えて下さった各競技団体のスタッフたち、日本選手団を各方面で支えていただいた皆様方にこの場をお借りし厚くお礼申し上げます。今後とも変わらぬご支援・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

第19回冬季デフリンピック競技大会（イタリア）について（報告）

- 1 大会名称 第19回冬季デフリンピック競技大会
- 2 開催期間 2019年12月12日（木）～12月21日（土）
渡航日程 2019年12月8日（日）～12月23日（月）（結団式・解団式なし）
- 3 開催国・都市 イタリア／ヴァルテッリーナ・ヴァルキアヴェンナ地方
開会式…ソンドリオ、閉会式…キアヴェンナ
アルペンスキー・アルペンスノーボード…サンタカテリーナ
スノーボードフリースタイル…サンタカテリーナ、キエーザ・イン・ヴァルマレンコ
カーリング…マデージモ
- 4 運営主体 国際ろう者スポーツ委員会
(International Committee of Sports for the Deaf)
第19回冬季デフリンピック競技大会組織委員会
(the 19th Winter Deaflympics Organizing Committee)
- 5 参加国・地域数 34カ国
- 6 参加人数 選手：493名（男子：367名、女子：126名）
（国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）発表）
役員スタッフ：681人（組織委員会発表）
- 7 実施競技 アルペンスキー、クロスカントリースキー、スノーボード、カーリング、アイスホッケー、チェス ※アンダーラインは日本選手が参加の競技
- 8 日本代表選手団選手・役員の派遣人数
選手 15名、役員 14名、本部役員 18名 合計 47名
団 長 小椋 武夫（全日本ろうあ連盟理事・スポーツ委員会委員長）
総監督 栗野 達人（全日本ろうあ連盟スポーツ委員会国際事業部長）
総 務 倉野 直紀（全日本ろうあ連盟理事・スポーツ委員会事務局長）

第19回冬季デフリンピック競技大会 日本選手団

通し	No	競技	スタッフ 選手	肩書き及び 出場希望競技種目	名前	ふりがな	ろう 聞こえる	性別	年齢	住所	所属団体	勤務先
1	1	アルペンスキー	スタッフ	監督	田中 照也	たなか てるや	ろう	男	46	東京都江戸川区	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構東京都聴覚障害者連盟	ネオアクシス株式会社
2	2	アルペンスキー	スタッフ	コーチ	上野 英孝	うえの ひでたか	聞こえる	男	41	北海道上磯郡		知内町教育委員会
3	3	アルペンスキー	スタッフ	トレーナー	川崎 純	かわさき じゅん	聞こえる	男	48	大阪府茨木市		四條畷学園大学
4	4	アルペンスキー	選手	滑降 スーパー大回転 スーパーコンビ 大回転 回転	中村 晃大	なかむら こうだい	ろう	男	28	長野県北安曇郡	社会福祉法人長野県聴覚障害者協会	松川村役場
5	5	アルペンスキー	選手	スーパー大回転 スーパーコンビ 大回転 回転	北城 大地	きたじょう だいち	ろう	男	26	青森県弘前市	一般社団法人青森県ろうあ協会	弘前航空電子株式会社
6	6	アルペンスキー	選手	大回転 回転	吉田 絢音	よしだ あやね	ろう	女	25	東京都世田谷区	一般社団法人神奈川県聴覚障害者連盟	横浜市役所
7	1	アルペンスノーボード	スタッフ	監督	笠井 彰子	かさい あきこ	ろう	女	44	愛知県豊川市	一般社団法人愛知県聴覚障害者協会	笑おう舎
8	2	アルペンスノーボード	スタッフ	コーチ	野藤 優貴	のふじ ゆうき	聞こえる	男	32	神奈川県鎌倉市		有限会社バイオニアモス
9	3	アルペンスノーボード	スタッフ	AT	津賀 裕喜	つが ゆうき	聞こえる	男	30	千葉県佐倉市		帝京平成大学
10	4	アルペンスノーボード	スタッフ	手話通訳	高桐 尊史	たかぎり たけし	ろう	男	60	東京都世田谷区	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構東京都聴覚障害者連盟	
11	5	アルペンスノーボード	選手	パラレル大回転 パラレル回転	岡村 大晃	おかむら たかあき	ろう	男	18	東京都八王子市	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構東京都聴覚障害者連盟 東京都立中央ろう学校 高等部3年生	
12	1	スノーボードフリースタイル	スタッフ	コーチ	小島 敬雄	こじま たかお	聞こえる	男	40	神奈川県平塚市		株式会社アオ
13	2	スノーボードフリースタイル	スタッフ	コーチ	南雲 利仁	なぐも としひと	聞こえる	男	44	新潟県南魚沼郡		
14	3	スノーボードフリースタイル	スタッフ	トレーナー	大橋 一麻	おおはし かずま	聞こえる	男	29	長野県下高井郡		全日本ウィンタースポーツ専門学校
15	4	スノーボードフリースタイル	スタッフ 兼 選手	監督 クロス スロープスタイル ビッグエア	奥田 和夫	おくだ かずお	ろう	男	50	山梨県中巨摩郡	一般社団法人山梨県聴覚障害者協会	パナソニック株式会社
16	5	スノーボードフリースタイル	選手	クロス スロープスタイル ビッグエア	花島 大輔	はなしま だいすけ	ろう	男	44	神奈川県横浜市中区	一般社団法人神奈川県聴覚障害者連盟	キャノン株式会社
17	6	スノーボードフリースタイル	選手	クロス スロープスタイル ビッグエア	小野田 瑛次	おのだ えいじ	ろう	男	30	大阪府茨木市	公益社団法人大阪聴覚障害者協会	株式会社ダイキン サンライズ摂津
18	7	スノーボードフリースタイル	選手	クロス	岡本 信彦	おかもと のぶひこ	ろう	男	41	東京都杉並区	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構東京都聴覚障害者連盟	株式会社LAVA Internadional
19	8	スノーボードフリースタイル	選手	クロス スロープスタイル ビッグエア	花島 良子	はなしま りょうこ	ろう	女	40	神奈川県横浜市中区	一般社団法人神奈川県聴覚障害者連盟	株式会社オー・エル・エム
20	9	スノーボードフリースタイル	選手	クロス スロープスタイル ビッグエア	奥田 恵理子	おくだ えりこ	ろう	女	44	山梨県中巨摩郡	一般社団法人山梨県聴覚障害者協会	キャノンファインテックニスカ株式会社
21	1	カーリング	スタッフ	監督	竹川 寿美子	たけかわ すみこ	ろう	女	49	東京都千代田区	公益社団法人東京聴覚障害者総合支援機構東京都聴覚障害者連盟	国家公務員共済組合連合会 虎の門病院分院
22	2	カーリング	スタッフ	コーチ	石田 順一	いしだ じゅんいち	聞こえる	男	67	青森県青森市		株式会社イシダスポーツ

通し	No	競技	スタッフ 選手	肩書き及び 出場希望競技種目	名前	ふりがな	ろう 聞こえる	性別	年齢	住所	所属団体	勤務先
23	3	カーリング	スタッフ	トレーナー	宮原 麻衣子	みやはら まいこ	聞こえる	女	50	東京都豊島区		埼玉医科大学病院
24	4	カーリング	スタッフ	手話通訳	砂田 武志	すなだ たけし	ろう	男	58	東京都大田区	公益社団法人東京 聴覚障害者総合支 援機構東京都聴覚 障害者連盟	
25	5	カーリング	選手	男子団体戦	荒谷 淳一	あらかや じゅんいち	ろう	男	64	青森県上北郡	一般社団法人青森 県ろうあ協会	有限会社乙供塗装 店
26	6	カーリング	選手	男子団体戦	荒谷 飛翔	あらかや ひしょう	ろう	男	27	愛知県西尾市	一般社団法人愛知 県聴覚障害者協会	株式会社デンソー 西尾製作所
27	7	カーリング	選手	男子団体戦	米田 義光	よねた よしみつ	ろう	男	52	青森県青森市	一般社団法人青森 県ろうあ協会	社会福祉法人青森 市社会福祉協議会
28	8	カーリング	選手	男子団体戦	中村 鉄哉	なかむら てつや	ろう	男	61	青森県八戸市	一般社団法人青森 県ろうあ協会	アンデス電気株式 会社
29	9	カーリング	選手	男子団体戦	松橋 要	まつはし かなむ	ろう	男	35	東京都練馬区	公益社団法人東京 聴覚障害者総合支 援機構東京都聴覚 障害者連盟	株式会社日立ソ リューションズ・ クリエイト
30	1	本部	スタッフ	団長	小椋 武夫	おぐら たけお	ろう	男	67	山梨県西八千 代郡	一般社団法人山梨 県聴覚障害者協会	
31	2	本部	スタッフ	総監督	栗野 達人	あわの たつひと	ろう	男	63	東京都渋谷区	公益社団法人東京 聴覚障害者総合支 援機構東京都聴覚 障害者連盟	
32	3	本部	スタッフ	総務	倉野 直紀	くら の なおき	ろう	男	46	三重県多気郡	一般社団法人三重 県聴覚障害者協会	三重県聴覚障害者 支援センター
33	4	本部	スタッフ	総務	中西 潤	なかにし じゅん	ろう	男	39	埼玉県熊谷市	一般社団法人埼玉 県聴覚障害者協会	
34	5	本部	スタッフ	手話通訳	森本 行雄	もりもと ゆきお	聞こえる	男	64	東京都足立区		社会福祉法人東京 愛育苑 金町学園
35	6	本部	スタッフ	手話通訳	黒石 恵理子	くろいし えりこ	聞こえる	女	41	静岡県静岡市 駿河区		駿河区役所 駿河 福祉事務所
36	7	本部	スタッフ	手話通訳	竹腰 由香里	たけこし ゆかり	聞こえる	女	39	大阪府池田市		株式会社エルアイ 武田
37	8	本部	スタッフ	広報	狩野 功	かりの いさお	ろう	男	50	埼玉県新座市	一般社団法人埼玉 県聴覚障害者協会	株式会社本田技術 研究所
38	9	本部	スタッフ	広報	加瀬 大介	かせ だいすけ	聞こえる	男	43	東京都板橋区		キャピタル・パー トナース証券株式 会社
39	10	本部	スタッフ	事務局	梅澤 仁士	うめざわ ひとし	聞こえる	男	40	埼玉県和光市	一般財団法人全日 本ろうあ連盟	一般財団法人全日 本ろうあ連盟
40	11	本部	スタッフ	事務局	加茂下 和子	かもした かずこ	聞こえる	女	48	東京都西東京 市	一般財団法人全日 本ろうあ連盟	一般財団法人全日 本ろうあ連盟
41	12	本部	スタッフ	医師	清水 雅樹	しみず まさき	聞こえる	男	43	群馬県前橋市		あさくらスポーツ リハビリテーショ ンクリニック
42	13	本部	スタッフ	医師	楠目 信三	くすめ しんぞう	聞こえる	男	63	東京都江戸川 区		箱根リハビリテー ション病院
43	14	本部	スタッフ	看護師	篠崎 菜穂子	しのざき なほこ	聞こえる	女	56	埼玉県所沢市		国立障害者リハビ リテーションセン ター病院
44	15	本部	スタッフ	A T	砂川 あゆ未	すながわ あゆみ	聞こえる	女	30	神奈川県川崎 市幸区		アリエス接骨院 恵比寿
45	16	本部	スタッフ	輸送	林 孝雄	はやし たかお	聞こえる	男	70	神奈川県横浜 市栄区		株式会社グローリア ツアーズ
46	17	本部	スタッフ	輸送	内田 美春	うちだ みはる	聞こえる	女	54	東京都荒川区		公益財団法人東京 オリンピック・パ ラリンピック競技 大会組織委員会
47	18	本部	スタッフ	輸送	佐藤 順	さとう のぶ	聞こえる	女	45	フランス		株式会社グローリア ツアーズ

成績一覽

日本選手団 入賞者一覧

入賞

競技	種目	選手名	順位	記録	エントリー数
アルペンスキー	複合	中村晃大	8位	1'48.55	23
	大回転		8位	2'17.39	45
	回転		8位	1'37.52	40
アルペン スノーボード	パラレル大回転	岡村大晃	5位	1'17.91	16
	パラレル回転		5位	1'10.17	16
スノーボード フリースタイル	スロープスタイル	小野田瑛次	5位	75.66	14
		奥田一夫	8位	50.66	
		花島良子	4位	57.33	7
		奥田恵理子	7位	27.00	
	ビッグエア	小野田瑛次	6位	38.66	7
	ビックエア	花島良子	6位	42.33	6

※記録—アルペンスキー・アルペンスノーボードはタイム
スノーボードフリースタイルはベストスコア

国別参加選手数・メダル獲得ランキング

順位	国名	選手数		選手総数	金	銀	銅	計
		男	女					
1	ロシア	53	25	78	17	18	14	49
2	イタリア	14	2	16	5	0	2	7
3	ウクライナ	19	15	34	4	4	3	11
4	アメリカ	39	3	42	3	1	2	6
5	チェコ	6	2	8	2	4	1	7
6	中国	20	17	37	2	0	2	4
7	イスラエル	1	0	1	1	0	0	1
8	カザフスタン	33	7	40	1	0	0	1
9	フランス	2	0	2	0	3	2	5
10	フィンランド	26	1	27	0	2	1	3
11	オーストリア	5	4	9	0	1	4	5
12	ポーランド	15	6	21	0	1	1	2
13	カナダ	28	6	34	0	1	0	1
14	ドイツ	10	0	10	0	1	0	1
15	クロアチア	6	6	12	0	0	3	3
16	韓国	9	7	16	0	0	1	1
⋮								
	日本	12	3	15	0	0	0	0

競技別成績

【アルペンスキー】

NO.	選手名	種目	成績	出場 選手数	記録		
					1 本目	2 本目	合計タイム
1	中村 晃大	滑降 (男子)	10 位	25	1'14.06		1'14.06
		複合 (男子)	8 位	24	1'09.94	38.61	1'48.55
		スーパー大回転 (男子)	9 位	34	1'14.86		1'14.86
		大回転 (男子)	8 位	45	1'04.72	1'12.67	2'17.39
		回転 (男子)	8 位	40	48.42	49.10	1'37.52
2	北城 大地	スーパー大回転 (男子)	21 位	34	1'19.16		1'19.16
		大回転 (男子)	15 位	45	1'09.94	1'14.90	2'24.84
		回転 (男子)	16 位	40	52.65	52.44	1'45.09
3	吉田 絢音	大回転 (女子)	棄権	17			
		回転 (女子)	棄権	16			

【アルペンスノーボード】

NO.	選手名	種目	成績	出場 選手数	記録 (タイム)		
					青 (旗門)	赤 (旗門)	合計タイム
1	岡村 大晃	パラレル大回転 (男子)	5 位	16	38.72	39.19	1'17.91
		パラレル回転 (男子)	5 位	16	34.52	35.65	1'10.17

※1～4位はタイムなし

【スノーボードフリースタイル】

NO.	選手名	種目	成績	出場 選手数	ベストスコア	
1	奥田 和夫	クロス	9 位	27	44.99	2 回戦進出
		スロープスタイル	8 位	14	50.66	
		ビッグエア	棄権	12		
2	花島 大輔	クロス	12 位	27	46.06	2 回戦進出
		スロープスタイル	11 位	14	21.66	
		ビッグエア	棄権	12		
3	小野田 瑛次	クロス	19 位	27	48.41	予選敗退
		スロープスタイル	5 位	14	75.66	
		ビッグエア	6 位	7	38.66	
4	岡本 信彦	クロス	18 位	27	47.69	予選敗退
5	花島 良子	クロス	10 位	13	53.48	予選敗退
		スロープスタイル	4 位	7	57.33	
		ビッグエア	6 位	6	42.33	
6	奥田 恵理子	クロス	11 位	13	57.62	予選敗退
		スロープスタイル	7 位	7	27.00	
		ビッグエア	棄権	6		

タイムではなくスコア制となる。

クロス：グループ予選の後トーナメントとなる。

スロープスタイル：3回すべて、良いスコアで順位が決まる。

ビッグエア：3回すべて、良いスコアで順位が決まる。

【カーリング】 (男子)

チーム名	日本	ポーランド	ロシア	ハンガリー	フィンランド	韓国	カナダ	ウクライナ	スイス	アメリカ	イタリア	中国	勝ち	負け	ポイント	D.M. 1	D.M. 2	順位	DSC
日本	●	●	●	●	●	●	●	○	○	●	○	●	2	9	4	1	0	10	108.7
ポーランド	○	●	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	6	5	12	2	1	4	97.4
ロシア	○	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9	2	18	0	0	2	87.2
ハンガリー	○	●	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	6	5	12	1	1	6	79.9
フィンランド	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	8	3	16	0	0	3	106.5
韓国	○	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○	6	5	12	2	0	5	98.3
カナダ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5	6	10	0	0	9	105.2
ウクライナ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	6	5	12	1	0	7	95.4
スイス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	2	9	4	0	0	11	118.6
アメリカ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5	6	10	1	0	8	98.0
イタリア	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	0	11	0	0	0	12	163.0
中国	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	11	0	22	0	0	1	97.2

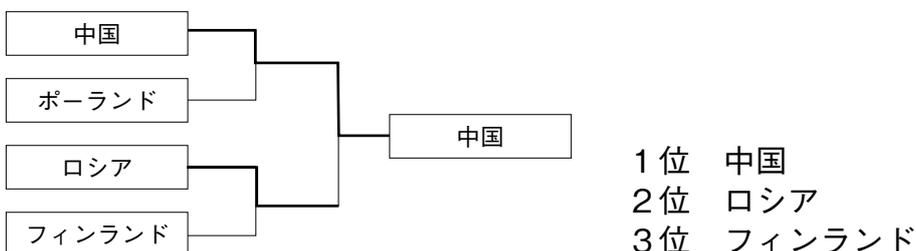
※上位4チームが準決勝進出

予選リーグ 順位表

チーム名	勝ち	負け	ポイント	D.M. 1	D.M. 2	順位	DSC
中国	11	0	22	0	0	1	97.2
ロシア	9	2	18	0	0	2	87.2
フィンランド	8	3	16	0	0	3	106.5
ポーランド	6	5	12	2	1	4	97.4
韓国	6	5	12	2	0	5	98.3
ハンガリー	6	5	12	1	1	6	79.9
ウクライナ	6	5	12	1	0	7	95.4
アメリカ	5	6	10	1	0	8	98.0
カナダ	5	6	10	0	0	9	105.2
日本	2	9	4	1	0	10	108.7
スイス	2	9	4	0	0	11	118.6
イタリア	0	11	0	0	0	12	163.0

※上位4チームが準決勝進出

【決勝トーナメント】



報 告

団長 小椋 武夫

この度、日本代表選手団団長を務めました。

今回のイタリアデフリンピックで時差があるにもかかわらず日本から毎日夜遅く、そして朝早くから多くの応援をありがとうございました。

デフリンピックは世界のろうスポーツの普及と発展を目的として4年に1回開催される国際的な競技大会で、夏季大会と冬季大会を開催しています。

障害当事者であるろう者自身が運営するろう者のための国際的なスポーツ大会であり、また参加者が国際手話によるコミュニケーションで友好を深められるところに大きな特徴があります。

デフリンピックを運営する組織は、国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）で、1924年の設立以来、デフリンピックやろう者世界選手権大会の開催、そして各国のろうスポーツの振興など、着実な取り組みを続けています。現在の加盟国は116カ国です。

今回の大会はイタリアのヴァルテッリーナ・ヴァルキアヴェンナ地方で2019年12月12日（木）から21日（土）に行われました。開催された6競技のうち、日本からは、アルペンスキー、スノーボード、カーリングの3競技に出場、選手15名、役員32名、合わせて47名を日本代表として派遣しました。

ここには団長として感じたことをお話させていただきます。

スキー会場は明るく壮大で、雪しぶきをあげながらゴールを目指し降りてくる選手を見て、日本選手！すごい！と感動しました。選手の表情はとても生き生きとしていて活気に満ち溢れていました。

カーリングを初めて生で観戦しました。スラップと滑りながらストーンを投げるフォーム、ブラシでこすることをスイープといいます。ストーンの前をスイープすることで氷を溶かして距離を延ばしたり、進行方向を決めるやり方とのことです。

聞こえる選手の場合、選手が大声を出してこする回数を変えるか、止まる位置や曲がり方が変わる細かい指示が繰り返されますが、デフリンピックの場合、聞こえない選手たちは相手に見えるよう手を振って指示します。様々な種類の細かい手振りがあると驚き、非常に勉強になりました。

カーリング会場は新設で綺麗ですが、工事中のところもあり、寒いのが難点でした。

イタリア組織委員会から情報が少なく、次にどのような行動を取ればいいのかかわからないと情報不足の状態。また、競技会場が分散しているため、本部の情報把握等の活動が大変で3～4時間の車移動も苦労しました。

競技会場はどこも小さな街で、ホテルから会場ま

で徒歩圏内でしたが、地元の方も皆親切で、デフリンピックを応援してくださっていました。

日本選手団のスローガンは「きらめいて、雪と氷の風となれ 情熱Japan」と掲げ、日本代表としての誇りを持ち、日々練習の成果を国際的な晴れ舞台で発揮してまいりましたが、入賞6名に留まり、惜しくもメダルに手が届きませんでした。

選手たちは自己記録を更新するなど競技力を向上させましたが、少しの差で力が及ばなかった状況でした。しかし、メダルにも勝る感動を私たちに与えてくれました。

勿論、夢を現実のものにするには努力が必要ですが、夢があるからこそ困難に立ち向かい努力を続けることができるのだとも言えます。次の大会を目指して、選手の皆さんも自分自身の夢を持ち、それを大切にして努力を惜しまず歩いてほしいと思います。

この結果を受け、今後、選手強化の方法を見直し、選手たちが研修を受ける、指導者の人材の確保、練習場の提供等、選手が競技に打ちこめる環境を作る必要があります。

そのためには、メダルを取るための強化費や、活動しやすい環境を作る予算の増額が必要です。デフリンピックはオリンピック、パラリンピックと比べると認知度が低い、大会への参加も自費で賄わなければならない、練習時間を確保するのに勤務先の理解を得る必要があるなど負担が大きく、選手にとって厳しい状況が続いています。

国際的な競技力の向上を推進するためにはNF団体の協力を得て、指導者のいるスポーツセンターやデフスポーツを研究する大学等の拠点を整備し、デフスポーツのアスリートが高度なトレーニングを行い、スポーツ医・科学、情報分野等からの支援も得る必要がありますが、デフアスリートに対する強化・支援が十分に行われていません。

競技大会の結果やメダル獲得上位国の状況等の調査・分析を踏まえつつ、日本のデフスポーツの環境を段階的に改善しなければなりません。

国際競技大会等における日本のデフアスリートの活躍は、国民に日本人としての誇りと喜び、夢と希望をもたらす、国民意識を高揚させるとともに、社会全体に活力を生み出します。そのためにも、国際社会における我が国の存在感を高めていかなければなりません。

今回はスノーボードフリースタイル会場において、選手が競技中に転倒、受傷した事故が発生しました。

事故が起きてしまったときには、それに対する初期対応が重要です。時間との勝負であり、少しでも

早い判断・処置が行える救護医療体制を主催者とともに整備することが大切と感じられました。

選手団としても医療スタッフの充実・配置、後方支援医療機関への依頼が適切に行われることが必要と気づかされました。また外国の病院であることやろう者ということもあり会話は困難、症状等を訴えるときにコミュニケーションができないため、指差しでやりとりできるコミュニケーションボードやスマートフォン翻訳アプリの活用、また手話通訳者配置等、対応を行いました。

日本でもようやくデフリンピックという言葉が少しずつ世間に浸透してきたように思います。

何の競技があるのかまで答えられる人はまだ少ないかもしれませんが、イタリアではテレビのニュースや新聞記事などを通してデフリンピックの紹介や選手の姿を知る機会が多くありました。

今後も引き続き聴覚障害への理解を深め、共存社会を実現していくとともにデフスポーツの発展を期待したいと思います。

最後に、日本代表選手団にご尽力、ご支援いただいております関係各位に感謝申し上げます。今後もデフリンピックの魅力、デフスポーツの素晴らしさを多くの皆様にお伝えできるように、選手・役員ともに精一杯、頑張りますので、ご支援の程よろしく願いいたします。

総監督 栗野 達人

1. 目的

2007年・2011年（中止）・2015年・2019年と4回の冬季デフリンピック日本選手団総監督を続けて担当しました。この12年間で競技チームと選手達および本部体制が以前より強化されてきたと思っています。

2015年にロシアで開催された第18回冬季デフリンピックの日本選手団の成績であるメダル5個を超えた成績を取ることを、そして「デフリンピック」の知名度をあげることを今大会の日本選手団の目的として総監督任務に尽くしました。

2. 選手選考と目標

（一財）全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会が定めた日本選手団編成にかかる指針にそった、一般社団法人日本ろう者スキー協会からの推薦をもとに、デフリンピック派遣委員会を開催、過去の実績を重視しつつ、将来の展望もあわせて、15名の選手を選考しました。

★代表選手推薦の手順

2015年から日本選手団選考および準備等を進めていましたが、ICSDからイタリア開催と正式発表が届いたのは2018年12月でした。その為、準備期間もわずか1年間しかない中、下記の指針を策定し、対応しました。

<第19回冬季デフリンピック 日本選手団編成にかかる指針>2019年3月10日策定（別紙P.55）

3. 成績と評価

競技成績詳細は各競技チーム監督の報告を参照。

現地の慣れないコンディションの中を奮闘し、持てる力を発揮しましたが、6名11個の入賞にとどまり、あと一步のところまでメダル獲得はなりませんでした。

4. チーム体制と各スタッフの役割

総務担当と共に4競技チームのまとめと総務チーム、医療チームを指揮下に置き、選手が実力を発揮できるよう全力を尽くしました。

今回は競技会場が2つと離れていたのが下記のように2つの本部体制で進めました。

○【本部】サンタカテリーナ（アルペンスキー、アルペンスノーボード、スノーボードフリースタイル）

◆団長：小椋 武夫

◆総監督：栗野 達人

◆総務：中西 潤

◆各競技監督

アルペンスキー 田中 照也

アルペンスノーボード 笠井 彰子

スノーボードフリースタイル 奥田 和夫

◆医療チーム

医師：清水 雅樹

看護師：篠崎 菜穂子

アスレティックトレーナー：砂川 あゆ未

◆総務チーム

手話通訳 森本 行雄

手話通訳 黒石 恵理子

広 報 狩野 功

輸 送 林 孝雄

輸 送 内田 美春

事務局 加茂下 和子

○【本部】マデージモ（カーリング）

◆総務：倉野 直紀

◆競技監督

カーリング 竹川 寿美子

◆医療チーム

医師：楠目 信三

◆総務チーム

手話通訳 竹腰 由香里
広報 加瀬 大介
輸送 佐藤 順
事務局 梅澤 仁士

5. スケジュール

詳細は各競技チーム監督報告参照。

今回はサンタカテリーナとマデージモの2か所に分かれていた為、私は下記のスケジュールで2か所に移動など実施しました。

しかし現地ですノーボードフリースタイル競技の3種目(スノーボードクロス、スロープスタイル、ビッグエア)の内、2種目(スロープスタイル、ビッグエア)が急遽車で3時間程度離れたキエーザ・イン・ヴァルマレンコへ変更となり、対応に追われました。

私はサンタカテリーナ本部でしたので、スケジュール内容を下記に書きます。ほぼ毎日実行委員会事務所へ行って国際手話で問い合わせ等情報収集に努めました。

- 12月 8日 IDカード手続き (キアベンナ)
- 12月 9日 日本選手団ホテルで本部設立、準備
- 12月10日 各競技場周辺下見と本部打ち合わせ
- 12月11日 各競技会場下見 (サンタカテリーナ)
- 12月12日 開会式 (ソンドリオ)
- 12月13日 アルペンスノーボードGSL/アルペンスキー DH (サンタカテリーナ)
- 12月14日 アルペンスノーボードSL/アルペンスキー CB (サンタカテリーナ)、マデージモに移動
カーリング競技 (マデージモ)
- 12月15日 カーリング競技 (マデージモ)
サンタカテリーナに移動
- 12月16日 スノーボードフリースタイルSX (サンタカテリーナ)
- 12月17日 アルペンスキー GSL (サンタカテリーナ)
- 12月18日 アルペンスキー SL (サンタカテリーナ)
怪我人対応のため病院 (ソンドロ)での対応
次にキエーザへ移動してサンタカテリーナへ
- 12月19日 本部待機と実行委員会事務所問い合わせ
- 12月20日 本部対応と帰国準備
- 12月21日 帰国

6. 競技規則の適用 (問題点など)

冬季デフリンピックはFIS (国際スキー連盟) 規則に基づいて運営されるという事でしたが、各競技の出場人数、競技レベルなどの事情でTD会議にて、変更されたこともありましたが。日本チームは最初からFIS規則に基づくことを承知の上で、各競技監督達に徹底的にFIS規則で日本代表選手達の育成を行っていたのですが、突然の変更に対処するのに苦労しました。

7. 大会参加までの準備状況

第19回冬季デフリンピックも夏季大会同様、推薦基準を世界選手権大会ベスト4以上の成績にすることを検討しましたが、2018年12月一般社団法人日本ろう者スキー協会各競技チームより要望があったため、推薦基準を世界選手権大会ベスト8成績にし、一般社団法人日本ろう者スキー協会が責任をもってメダル獲得が出来る日本代表選手推薦選考をしていただくこととなりました。そして提出された日本代表選手候補を元にして選手を決定しました。

今日の日本選手団のスローガンは「きらめいて、雪と氷の風となれ 情熱Japan」と決めました。選手たちは日本代表としての誇りを持ち、国際的な晴れ舞台で日々の練習の成果を発揮できるようめざしました。

デフリンピックの知名度が11%と低く、知名度をあげることも我々の任務と考え頑張ってきました。その結果、スキージャンプの高梨沙羅選手など有名なスポーツ選手、一般の方々から応援メッセージをもらえました。イタリア開催が決定するまでなかなか連絡がなく、不安もありましたが2018年12月にイタリア開催決定と連絡を受けて2019年2月5日～9日に現地へ視察に行き、イタリア組織委員会に全競技開催されるかどうか確認しました。ハーフパイプ種目の中止以外は問題ないとの回答を得て、準備を進めました。

また、在ミラノ日本国総領事館へ挨拶と派遣に係る協力の依頼をしました。

日本選手団ユニフォームについて今回は明るいピンクと赤色も取り入れてデザインしました。

またデフリンピック啓発と資金作りとして日本選手団ピンバッジとフェイスタオルを作成しました。イタリアの国旗をモチーフにし、日本風にアレンジしたデザインにしました。



タオル



ピンバッジ

派遣委員会および事務局と連日、あらゆる面で確認と連絡を取り合い、準備に欠かさない様、尽くしましたが、反面、まだ足りない所もありました。

8. 反省・まとめなど

大会中、毎日、各競技チームおよび監督達と連絡を取り合いましたが、時々緊急連絡が間にあわず、負担をかけてしまったことがありました。

デフリンピックという国際競技の場で、本部進行等で漏れもありましたが、小椋団長、倉野総務、総務チームと医療チームそして各競技チームと共に協力しあいながら進めることができました。

選手たちは積極的に国際手話などでコミュニケーションを取り、競技運営に対して意見を言えるようになっていたと感じました。

この長年色々となら努力してきたがいがあったと感動と嬉しさで今回の大会に参加して深い感銘を感じました。競技会場は、イタリアの北に位置し、本部はサンタ・カテリーナ（アルペンスキー・スノーボード）とマデージモ（カーリング）の約150kmほど離れた地域での設置でした。競技会場へはそれぞれの本部から徒歩で移動できる距離です。しかし現地で急ぎよスノーボードフリースタイル競技のうち、2種目（スロープスタイル、ビッグエア）が車で3時間程の離れたキエーザ・イン・ヴァルマレンコへ変更となり移動など対応に追われました。公開練習、TDミーティング等のスケジュールが直前で変更されることが多く競技チームおよび本部も対応に苦労しましたが、最後まで頑張りました。

選手たちは日本代表としての誇りを持ち、日々の

練習の成果を国際的な晴れ舞台で発揮しましたが、結果としてメダルの獲得は果たせませんでした。このことについて、選手一同で「次の大会では雪辱を！」と語りあいました。

最後に日本選手団をご支援くださった宮内庁をはじめ、文部科学省、スポーツ庁、厚生労働省、国会議員によるデフリンピック支援ワーキングチーム、日本障がい者スポーツ協会、手話関係団体、全国のろうあ連盟加盟団体やホームページに応援メッセージを投稿してくださった皆さまに心から感謝申し上げます。

総務 倉野直紀

2017年夏季デフリンピック（於トルコ・サムスン）に引き続き、今回も総務として参加しました。競技会場の都合により本部を2箇所に分けた、また競技上での負傷による選手の入院、帰国までの支援など、今大会もさまざまな事態が起きましたが、自分のベストを尽くし選手たちを支えたスタッフの皆さまに心から感謝申し上げます。

①事前視察

まず、2019年2月、10月と2回に分けた事前視察を行い、各競技会場や選手宿泊ホテル、輸送面、医療関連、イタリア組織委員会、在ミラノ日本総領事館を回り、調査を行いました。

2月の視察ではサンタカテリーナ（スキー競技、スノーボード競技）、マデージモ（カーリング競技）、キアベンナ（アイスホッケー競技、ICSDオフィス、アクレ取得・聴力検査会場、閉会式）、ソンドリオ（開会式）の会場や選手宿泊ホテルを視察しました。それぞれの会場は1時間から2時間は離れているため、本部を2か所に分けることやまたウインタースポーツの特性上雪深い山奥地となるため、選手バスを借り上げての輸送は難しいという課題が判明しました。

10月の視察では大会を2か月前に控え、組織委員会と入念な打ち合わせ、またサンタカテリーナが6月の豪雨による土砂崩れで、主要道路が不通になったため会場を変更するという情報が入ったため、代替地候補も併せて視察することになりました。

マデージモやキアベンナ、ソンドリオでは大会準備が順調に進んでいましたが、サンタカテリーナは年内には道路復旧の見込みがないと判断し、ソンドリオ近くのキエーザ・イン・ヴァルマレンコ、リビーニョの2か所が代替地候補とされていました。

結局は大会までにサンタカテリーナへの道路は復

旧していたのですが、大会中にスノーボード競技は諸都合でキエーザに変更されたり、選手の宿泊ホテルも変更等があったのですが、2回に分けて入念な視察を行い情報収集をしていたことで、臨機応変に対応ができたと感じています。

②本部体制のあり方

日本から出場するのは、アルペンスキー、スノーボード、カーリングの3競技ですが、スキー競技とスノーボード競技はサンタカテリーナ、カーリング競技はマデージモと分かれることになり、サンタカテリーナとマデージモは車で片道3時間はかかる距離です。

本部を1か所に置いたほうが毎日の本部スタッフの意思疎通また配置調整を行いやすいのですが、サンタカテリーナまたはマデージモのいずれかに置くとなると、本部から現地への移動が選手たちや本部スタッフにとって大きな負担となるのではないかとということが大きな検討事項となりました。

③事前準備及び説明

派遣にあたり、スポーツ庁及びJPCと十分に協議を重ね、日本選手団編成を行いました。そして、11月には競技団体の責任者を招集し、オリエンテーションを行い、視察報告、現地状況、エントリー手続き、選手団本部、危機管理体制の説明を行いました。

④日本選手団壮行会

11月22日、東京都千代田区の都市センターホテルにて日本選手団壮行会を開催しました。壮行会はフリーアナウンサーのトーマス・サリーさんの司会にて進み、スポーツ庁の藤江陽子審議官、(公財)日本障がい者スポーツ協会の山田登志夫常務理事、障がい者スポーツ・パラリンピック推進議員連盟デフリンピック支援ワーキングチームの役員の方々までにご挨拶をいただきました。

また、高梨沙羅選手をはじめとするアスリートたちに「ドリームサポーター」にご就任いただき、応援メッセージでは、在ミラノ日本国総領事館総領事や柔道全日本監督の井上康生さん、國學院大学の手話学受講者の皆さまなど、多方面に渡り、心強い励ましをいただきました。

また、大会期間中も応援メッセージを受け付けたことにより、国民の皆様からも多数のメッセージが寄せられ、選手たちにとって大いに励みになったことも特筆すべき点といえます。

⑤結団式

今大会は日本選手団の出発が第一陣、第二陣と分

かれたことや、本部も二手に分かれることになったため、結団式を行うことはできませんでした。

しかし、日本選手団第一陣がミラノに到着した翌日、ホテルに在ミラノ日本国総領事館の兩宮雄治総領事においでいただき、手話言語も交えて「頑張ってください。応援しています！」と日本選手団に対して心強い激励の挨拶をいただきました。また、日本選手団派遣主体である全日本ろうあ連盟の久松事務局長からもご挨拶をいただき、選手団一同が決意を新たにしました。

⑥日本選手団本部の設置及び宿泊地

上記でも述べたように、サンタカテリーナ(スキー競技、スノーボード競技)とマデージモ(カーリング競技)は車で片道3時間はかかる距離であるため、十分に検討した結果、本部をサンタカテリーナとマデージモの2か所に分けたほうが選手たちに負担はかからない、例え本部に大きな負担がかかったとしても、選手がベストパフォーマンスを出せるようにサポートしていくという選手ファーストの視点で進めました。

そして、サンタカテリーナ本部は団長、マデージモ本部は総務を原則として常駐させることにし、本部スタッフもそれぞれ総務スタッフやメディカル、手話通訳等も分けることになりました。

宿泊地は組織委員会が指定するホテルでしたが、事前に必要な宿泊の部屋数、会議室、本部室、メディカル室を要望していたのに関わらず、現地に着いてみるといずれも部屋が不足していることが判明しました。

そのため、サンタカテリーナでは本部はホテルのロビーの一角、マデージモでは総務スタッフの部屋を本部に割り当てることになりました。

サンタカテリーナでは、本部はロビーにあったため、競技団体の役員や選手が訪れる等、コミュニケーションは図れたのですが、マデージモでは本部が総務の部屋であったため、気軽に訪れにくい環境であったかもしれません。また、サンタカテリーナでは1つのホテルを日本選手団用にと割り当てられたのですが、マデージモでは2つのホテルが割り当てられることになりました。

割り当てられた部屋数を勘案し、総務スタッフとカーリングチームとそれぞれホテルを分けることになりましたが、情報共有や危機管理、選手団の結束の面を重視し、カーリングチームのホテルには総務スタッフを1名配置しました。

なお、各本部にもホワイトボードや模造紙を活用して各競技の成績結果や速報等を本部の壁に張り出し、モチベーションが高められるよう取り組みまし

た。

サンタカテリーナ本部、マデージモ本部いずれともミーティングを毎日実施しましたが、そのミーティング結果やトラブル時に双方が協議したくとも、山岳地方であったために電波が悪く、ビデオ電話もなかなかつながらない、また映像がかなり悪く、双方のコミュニケーションがなかなか思うように行かなかったのが今思うと残念です。

⑦さまざまなトラブル

大会中にスノーボード競技がサンタカテリーナからキエーザに変更されたことは上記でも述べましたが、それに伴い選手たちやスタッフをキエーザへ移動させる必要がありました。

しかし、組織委員会からなかなか日程や代替ホテル（キエーザ）の説明がなく、サンタカテリーナ本部はやきもきする日々でした。ようやく詳細がわかったあとでも、サンタカテリーナはスキー競技がまだ続いていたため、スノーボードチームをキエーザに移動させることはできても、本部スタッフも一部キエーザへ分けなければならないのかということに頭を悩ませたのです。結論としては、本部の車両を調整し、毎日サンタカテリーナからキエーザへメディカルスタッフや広報スタッフが通うことになりました。

選手たちの体調については発熱及び胃腸の不具合等は特になかったのですが、スノーボードチームでは競技中の事故により、選手1名が現地から病院へ緊急ヘリ搬送、メディカルスタッフは救急車に同乗し、病院へ駆けつけるという事態が起きました。

診断の結果、第二腰椎破壊骨折ということがわかり、緊急手術は成功し、また奇跡的に神経は傷ついていなかったため、下半身麻痺になる事態は避けられました。

なお、選手の手術・入院は日本選手団第1陣帰国日とほぼ重なっており、また第二陣の日本選手団帰国日も近づく中で、言語も文化も違う、コミュニケーションもできないイタリアに1人残すことはできないと、全日本ろうあ連盟本部事務所とも急遽協議しました。

その結果、選手の身の回りの世話は同じ女性の方が望ましいし、本人も希望したため、まずは本部スタッフである連盟職員1名が当面は支援のために残り、そして連盟本部事務所から聞こえる職員（通訳も兼務）、聞こえない職員の2名がすぐに交代に向かいました。

選手は数日後、自力で体を起こしたり、介助付きで歩行してみるなどリハビリを始め、日本へ帰国の長時間のフライトに看護師付きなら耐えられると判

断された12月31日に退院、帰国。そして1月1日に成田空港から自宅まで救急車で搬送し、地元の病院につなぐことができました。

全日本ろうあ連盟が、日本選手団を責任を持って派遣し帰国させるという責務を果たすことができたこと大いに安堵しています。

⑧まとめ

2018年12月に突如、イタリアでの開催が決まり、2019年12月に大会開催という準備期間がわずか1年という苦しい状況でしたが、前大会以上にさまざまな方面からのご支援の輪が広がり、無事派遣を終えることができました。

残念ながらメダル獲得という結果を残すことはできませんでしたが、若い選手たちが入賞をしたこともあり、次回の大会に期待をつなぎたいと思います。

2023年に行われる次回冬季デフリンピック競技大会や第24回夏季デフリンピック競技大会に向け、今回の経験をさらに活かして参る所存です。

最後にデフリンピック日本選手団を応援していただいた国民の皆さま、多方面の方々に厚く感謝申し上げます。

総務 中西 潤

1. 自己の役割とその評価

今大会において、自己の役割においては以下の通りでした。

準備段階

- (1) 日本選手団のWebサイト立ち上げ
- (2) SNSツールを活用した情報発信
- (3) 大会組織委員会を介した情報収集
- (4) 日本選手団の編成・発表
- (5) 選手団派遣に係る書類手続き
- (6) ユニフォーム配布対応
- (7) 壮行会・オリエンテーションの準備・実施
- (8) 必要備品・設備の制作・発注対応

本番段階

- (1) 現地で大会組織委員会からの情報収集
- (2) 日本代表選手団本部の運営管理
- (3) 事故・怪我発生時の対応
- (4) SNSを介した大会結果などの情報発信
- (5) 日本選手団の移動サポート

準備段階でまず、日本選手団Webサイト立ち上げについては現地と日本で時差が8時間ほどでタイムリーな情報発信が厳しくなることを考慮し、総務と事務局内でサイト更新対応ができる体制を構築しました。このことにより、総務と事務局内の業務量は

増えてしまいましたが、前回と比較してタイムリーな情報発信ができたことと自負しています。また、動画を活用して手話言語と字幕による情報発信の数を増やし、聴覚障害者にとって情報が得られやすいように工夫しました。

日本選手団の公表について、大会組織委員会からの情報が少なく判断材料が乏しかったこともあり、公表日が10月上旬にずれ込んでしまいました。このことで競技団体や選手たちにとってもスポンサー獲得対応が非常に厳しくなってしまったことは大変申し訳なく思っています。遠征選手・スタッフの決定については大会組織委員会からの情報によるものが大きい部分もありますが、何らかの方法で早い段階での公表ができるように工面していくなど改善の余地はあるように感じました。

大会組織委員会との連絡手段がE-mailが大半を占めていましたが、組織委員会からのレスポンスが芳しくなく、大会に係る情報が思うように収集できませんでした。組織委員会側の事情で世界各国への情報発信がスムーズではなかったのだろうと想定していますが、日本選手団本部としても「待ち」の姿勢ではなく、現地に自ら乗り込んで情報収集するなど「攻め」の姿勢も状況によっては必要であり、今後の検討課題としたいと思います。

大会本番では、日本選手団の選手が出場する競技の会場が2ヵ所に分かれたことで、選手団本部も同様に（サンタカテリーナ、マデージモ）に分けて対応しました。現地到着後は即、準備段階で得られなかった情報収集に努め、本部の立ち上げを行いながら大会期間中の本部全体の動きについて確認と競技団体への情報提供を行いました。大会組織委員会内でも情報統制ができておらず、交差する情報の整理や対応に大変苦慮しましたが、2ヵ所に分かれた本部の間でSkypeを活用したビデオチャットを行いながら情報交換・収集できたことで効率良く業務を進めることができました。また、毎晩本部でのミーティングを行い、記録を取りながら本部内での情報格差が起きないようにしたことで、本部スタッフそれぞれの役割と行動内容が明確になり、ミーティングの重要性を再認識させられました。しかしながら、競技団体とミーティングする機会が少なく、その面では競技団体とのズレが生じた要因となってしまったことは反省すべきことであり、次大会では改善に繋げていく一存です。

大会期間中に選手の負傷者が2名発生し、内1名が緊急搬送される負傷を負ったことで、本部内で正確な情報収集を行いながら適切な対応するよう努めました。急遽会場変更（ヴァルマレンコ）となった場所での発生で団長・総監督・総務・事務局が滞

在していなかったこともあり、状況が見えない中での判断・対応は非常に困難を極めるものでありました。リスクマネジメント面で予め十分に用意できていなかったこともあり、行き当たりばったり対応になってしまった感が否めないものでした。遠征する選手・家族が安心するためにもリスクマネジメントは十分な熟考を重ね、連絡体制についても明確にすべきだったことが大きな反省ポイントでした。

そういったこともあり、総務・事務局にかかる負担は非常に重いものになってしまっていました。突発的な業務に対して適切な業務遂行を行うためにも、総務・事務局体制の見直しが急務であると考えます。

2. 今後の課題

総務として、今後の課題として挙げられるものは以下の通りです。

- (1) 突発的な業務に適切な対応ができる体制の構築
- (2) リスクマネジメントの強化
- (3) 日本選手団公表の流れとタイミングの見直し
- (4) 情報発信業務の切り離し（広報担当で対応、等）
- (5) 本部が数ヵ所に分かれた際の本部体制の見直し

(6) 本部内と競技団体間の連携に関する見直し
まず、総務として何よりも優先すべきことは、選手・スタッフが試合や練習に専念できる環境の構築と維持、そして本部内の各担当の役割を明確にし、スムーズな運営の実現であります。そのことを実現するためにも、上記に挙げた課題への取り組みが急務であると考えています。

特に、リスクマネジメントの強化については、不慮事態発生時に迅速かつ適切な対応の実現に最低限必要なことであり、様々なリスクケースに対応できる体制構築を次大会で実現できるよう、スポーツ委員会として取り組んでまいります。

今大会で初めて総務という重責を担わせていただきましたが、迅速かつ適切な対応を取るために何が必要なのか、また、自分に何が足りていないものは何なのかを痛感させられました。

力不足な面があり、周囲に迷惑をかけてしまった面もありましたが、全日本ろうあ連盟加盟団体の皆様をはじめ、競技団体の皆様、その他ご支援してくださった皆様のお陰で任務を全うすることができました。ここで厚くお礼を申し上げます。

手話通訳 森本 行雄

第19回冬季デフリンピック競技大会で、本部に配置された手話通訳は3人（女性2人、男性1人）でした。

音声日本語と日本手話言語間における通訳を担当しました。

大会に帯同する手話通訳の特殊性として、通常の手話通訳業務に加え、所属する本部の他の業務も併せ行うことがあります。限られたスタッフと限られた派遣期間の中で、選手が競技力を存分に発揮するための支援がミッションですので、本来の手話通訳業務（意思疎通、情報提供）以外も行うことが求められます。

それは時間的にも同様で、大会運営上のスケジュール変更に合わせて、手話通訳が長時間になったり、早朝深夜に及ぶこともありました。

同時に、本部スタッフで手話通訳ができる聞こえるスタッフから、協力を得る場面も多々ありました。

1、手話通訳者の配置 3人がどこに配置されたか

日本選手が出場する競技の会場が2か所に分かれ、本部も2か所となったため、手話通訳者も二手に分かれて配置されました。

アルペンスキーとアルペンスノーボードの2競技が開かれたサンタカテリーナ本部で2人（黒石さんと森本）、カーリングが開催されたマデージモ本部では1人（竹腰さん）が、それぞれ手話通訳を担当しました。

2、手話通訳の業務内容 どのような手話通訳をしたか

ここでは、筆者が担当したサンタカテリーナ本部での業務について報告します。本部の業務で必要な手話通訳が主たる業務でした。本部に帯同していましたので、さまざまな場面での手話通訳（意思疎通の支援）がありました。それは本部のスケジュールとして、あらかじめ予定されていた業務遂行のためのものがある一方で、突発的な手話通訳も多数ありました。

以下に、本部の業務での手話通訳の主なものを列挙します。

- (1) 毎日の定例ミーティングでの手話通訳。聴覚障害スタッフと、手話がわからない聞こえるスタッフとの間での手話通訳でした。
- (2) 本部の業務内容（広報、メディカル、移動など）での手話通訳。
 - ①メディカル
医師、看護師、トレーナー（メディカルス

タッフ、全員が聞こえる人）による、選手、コーチ等の健康状態の確認時の手話通訳を行いました。また、メディカルルームが選手、本部スタッフが宿泊するホテル内に設置されました。そこでの選手等に対する治療や施術時、競技会場での体調確認と治療対応時での、手話通訳を行いました。

②広報

開催期間中にSNS等で発信された広報活動の取材、収録時の手話通訳を行いました。また、収録された映像の手話言語を日本語に翻訳し、日本語字幕データの作成を行いました。

③輸送

本部内の輸送担当者（旅行会社職員の聞こえる人）との連絡、本部専用車両の運行とその配置の調整時の手話通訳をしました。

(3) 本部担当者が選手対応する際の手話通訳

- ①負傷した選手の治療、入院時のメディカルスタッフとの間で手話通訳がありました。
- ②同じく負傷入院に関して、選手チームスタッフとの移動や滞在に関する調整時の手話通訳を行いました。

(4) その他

日本と大会開催地との間の移動中、あるいは宿泊先での手話通訳もありました。主に交通機関、宿泊先での手続き、コミュニケーションなどでした。

3、手話通訳の業務量 手話通訳の業務量は適切だったか

わたしが配置されたサンタカテリーナ本部の手話通訳者は、前述のように2人。男女でしたので、選手やスタッフの性別に合わせての対応ができました。また、業務量は大会派遣で本部設置の手話通訳という特殊性もあり、大会スケジュールに合わせて、ほぼ毎日変則的なものでした。

それは過去の大会帯同の経験から、多少は覚悟の上で参加しました。その上で考えると、今回は選手の負傷、病院受診が複数あり、1件は入院となりました。そこでの手話通訳対応がやはり問題でした。

幸い今回は、輸送担当スタッフに手話通訳士の方がいたので、急ぎ手話通訳に入ってもらえることができて、大変助かりました。

それは、競技に出場している選手をバックアップする際も同様で、3人での手話通訳体制を組むことができたのが幸いでした。

4、問題点の整理 今回の情報保障を担当して気づいた問題点、反省点

わたし自身はデフリンピックへの手話通訳での帯

回は初めてでした。唯一経験していたのは、アジア太平洋ろう者競技大会での帯同です。夏季大会でしたので、選手団の規模も大きく、移動の難易性も低かったのですが、3人で予定していた手話通訳者が直前の体調不良で、1人が欠けて2人で乗り切りました。

今回は、前述のような事情もあり、一部不安が生じましたが、本部スタッフが相互協力することで大きな混乱はなく終わられました。また、本部が二か所に分かれ、責任者が行き来することもある中でも、本部の指示体制がはっきりとしていて、協力し合える一体感があったことが、安心して手話通訳の業務を進められた要因だと思います。

手話通訳者の3人体制を組むことができない事情は、よくわかっているつもりです。でも、手話通訳の専門性を考えると、他業務からの協力が得にくいことも確かです。

その中で今回は特に、メディカルスタッフとの連携での手話通訳の際に、負傷した選手が女性でしたので、女性の手話通訳者2人で手話通訳することで、選手もスタッフも安心して治療に臨むことができ、時には現地の病院内での長時間に及ぶ手話通訳もあり、何より当該選手の心理面でもとても効果的だったと考えます。

何より、デフリンピックのテーマでもあるろう者主体の運営が、日本選手団本部でも十分生かされていたことを、大変評価しています。

5、今後への提言 今後の同様の大会に向けての情報保障のあり方について

今後は、今回のように本部業務に手話通訳士有資格者をさらに複数配置することで、担当者間での協力体制を明確にしながら、大会に臨むことができることを望みます。

同時に、メディカルスタッフに聴覚障害の有資格者を配置することも、意思疎通での選手の負担を軽減することにつながると考えます。

6、その他の業務

手話通訳業務が主での派遣でしたが、カメラを持参していたこともあり、広報担当者からの依頼で選手撮影の協力もしました。他には、競技に臨む選手の緊張をほぐし、選手団の雰囲気づくりのために、掲示やカードゲームで和ませる工夫をしました。これは業務というよりは、年長者の責務に近いものと考えて行いました。

手話通訳 黒石 恵理子

1. 自己の役割とその評価

【業務内容】

ア) ローテーション

本部手話通訳者として3人が帯同したが、本部を2ヶ所に設営したため、ローテーションは組めませんでした。配属されたサンタカテリーナ本部（以下SC本部）は2人体制。外勤と本部待機に分かれ、状況を見ながら調整し対応。前日のミーティングで本部全体の動きを確認し、当日の急な事態にも迅速な対応が取れるよう備えました。

イ) SC本部での通訳

基本的に午前・午後に分け、担当。本部待機の際は緊急時に即対応できるように、また適宜休憩も取れるよう努めました。SC本部ミーティングは必ず2人で対応。各担当同様、本部通訳としての報告も行いました。

ウ) 動画の日本語翻訳等

開催地の情報、選手宿舎の様子、選手のインタビュー等の動画撮影時の通訳、ならびに翻訳（確認含む）を待機の時間を利用して行いました。

エ) メディカル通訳

メディカルチームが競技場や宿泊ホテル内メディカルルームにおいて、選手・スタッフに対して体調不良、怪我の治療、経過観察等で訪れた際の手話通訳。大会帯同経験のあるスタッフも多く、メディカル利用時は必ず通訳体制が整っていました。緊急搬送、入院時の通訳も担うことができました。日頃よりメディカルチームとのコミュニケーションが密に取れており、連携が円滑に機能。結果、こうした不測の事態にもチームとして対応が適いました。

オ) チームワークについて

立地上、3人で顔を合わせて話をする時間がとれず、打ち合わせや報告等、お互いの状況を把握できませんでした。また、本部手話通訳の他、輸送担当の手話通訳をはじめ、手話通訳できる方が複数名おり、業務内容の線引き（役割分担）が曖昧となり、初めはどのように対応をしてよいのか戸惑いました。事前にお互いの業務内容の把握、棲み分けをきちんと確認しておくべきだったと反省しています。しかしながら、本部手話通訳以外に手話通訳ができるスタッフがいるということは、とても大きな存在でもありました。

2. 今後の課題

①拘束時間と休養

夏季大会とは異なり、競技開始時刻、終了時刻が早い（SC会場での実施競技）。早朝及び夜遅くまで

のメディカル対応もなく、拘束時間は比較的長く感じませんでした。また、本部待機の際は適宜休息を取るよう努め、自室に戻る時間も取れていました。そのため肉体的にも精神的にも負担が重すぎる程ではなく、SC本部手話通訳体制として2名の配置は妥当だったと感じています。

②事前の打ち合わせ

手話通訳者だけの事前打ち合わせの時間を持つことができず、現地でも時間を取れないまま業務に当たることとなってしまい、振り返りの時間も持たずに終わりました。本部においての手話通訳者の役割に関して確認する作業は、渡航前の準備として是非行いたいと感じています。

③国際手話の能力

開会式、閉会式等では、現地手話と国際手話の通訳が行われており、他国選手団においては自国の通訳者が国際手話→自国手話を通訳する国もありました。日本選手団は事前に確認をしておらず途中からの対応となりました。今後どのように、またどこまでの情報保障を担うのか課題となります。式典以外でも、競技場、町のいたるところで国際手話が行き交っており、多少なりとも出来た方が良いと感じました。

④手話通訳と他業務との優先順位・バランス

本部スタッフ各々の担当は漠然とした認識があるとはいえ、他の業務内容について、明確な把握がお互いに十分できていませんでした。そのため、役割の範疇（職域）について不透明な部分があり、職務の優先順位やバランスが難しいと感じました。渡航前に、本部スタッフ全体で共通理解が図れる機会を設けられたら、よりスムーズな運営につながるのではないかと思います。

⑤現地での情報共有

SNSの普及により、瞬時に情報発信・受信ができるようになりました。情報共有が容易にできるのは喜ばしい反面、多くの情報に溢れ正確な情報が見えなくなり、混乱を生じかねない。統制するなど過多を避け、運用方法について、今後検討していただきたいと思います。

⑥その他

デフスポーツに関わる手話通訳者として、スポーツに関する最低限の知識を持つ必要があります。デフスポーツに関わること、またメディカルチームについても事前学習すべきだと感じました。

今回、競技中の事故により、緊急搬送→入院がありました。海外という異国の地で、選手の不安はいかばかりであったでしょうか。聞こえないことに加え、知らない言語が飛び交う病院。選手のために手話通訳として何ができるのか？医師の説明を毅然とした

態度で伝え、聞こえない選手の不安を取り除き寄り添うだけでなく、医師をはじめ聞こえる側へのサポートも重要であり、双方へのアプローチ、配慮が大切となります。最善策は何なのか？自問自答の毎日の中、近くで力強くリードして下さるドクターをはじめ、SC本部やチームのおかげで、今できるベストを尽くすことに集中し対応できました。決して起きてはならない事故ではありますが、現場での数日間は忘れられない大きな経験となりました。

⑦最後に

トルコで開催されたデフリンピックに続き2回目の帯同となった今大会は夏季と冬季の違いに圧倒されるとともに、どちらの大会も現地入りしなくてはわかり得ない様々な状況、慣れない環境下で、柔軟に対応していく現場力、判断力が求められました。手話通訳として待機という役割の重要性、手話通訳の周知、ひいては大会終了後の制度利用につなげることも大きな役割であると前大会で学び、今回も常に念頭に置き取り組みました。そのような中で、今まで体験したことのない、し得ない数多くの貴重な経験を積み、幾度となく感動の瞬間に立ち会う機会に恵まれました。選手の頑張りはもちろん、支える多くのスタッフ、関係の方々など日本からの大きなサポートを肌で感じ、間近で見ました。

日本選手団の一員として帯同し、このような機会をいただけたことに心から感謝申し上げます。この経験全てを大切な学びとし、今後につなげられるよう研鑽していきたいと感じています。デフリンピック、デフスポーツの認知向上と更なる発展を切に願い、今後もその一助となれるよう努めていきたいと思えます。

手話通訳 竹腰 由香里

1. 自己の役割とその評価

(対応業務)

カーリングチームとドクターとのやりとりや、輸送担当からの連絡事項での手話通訳。また、19日はキエーザ・イン・ヴァルマレンコの会場へドクターに同行。

(反省・振り返り)

チームに英語も手話通訳もができる方がいて、英語で情報を得た段階でチームに情報共有をしていたので、最初は輸送担当の方が確認後の説明をチームにされる際、手話通訳を改めてやって良いものかどうか戸惑ってしまいました。

しかし、その場で悩んでいても始まったばかりの段階だったので、マデージモ本部の総務スタッフに

すぐに相談。その後自分の中では少しずつ気持ちの整理ができたと思います。

実際に業務を遂行するとなった時に、立ち止まってしまうことが時々ありましたので確認できる環境下にあったことは非常に恵まれていたと思います。今後もデフリンピックやデフスポーツ大会に同行できる機会があるのであれば、自分の役割を全うできるメンタルをもって臨みたいと感じました。

2. 今後の課題

- ・(初の手話通訳同行が居る場合) 手話通訳の主な動きの説明があると安心できたかもしれません。
→実際に現地でも相談して安心した所もあるため。
ただ、たまたま私はすぐ聞くタイプの人間で、しかもスタッフも元々知っている方だったので、聞きやすかったという環境もあったかと思えます。
- ・担当(役割)の明確化。判断者の明確化。情報共有方法の明確化の必要性について。

今回は本部が分かれていたのでLINEで情報の共有をおこなったが、本部判断で流すもの、スタッフ判断で流すものと統一されていないように感じました。情報共有に関してはシビアに判断が要る場合もあるため、明確にしておいたほうが良いのかも知れない。

…感想・お礼…

全体を通じて、個人的には大変貴重な機会に恵まれたと思っています。手話を続けていてこのようなかたちでデフリンピックと関われるとは思っていませんでした。

仕事柄、取引先の方にデフリンピックで帯同するための休暇をお知らせしたところ応援の言葉もたくさんいただいて、手話のこと、デフリンピックのことを知っていただく機会にもなりました。

本当にありがとうございました。

広報 狩野 功

主な業務内容

- ・写真撮影
- ・日本選手団チームの試合スケジュールチェック
- ・各競技会場の撮影ポイントチェック
- ・写真データ整理
- ・写真データのクレジット表記対応
- ・写真データを総務本部へ提出
- ・集合写真のセッティング
- ・取材インタビュー、取材セッティング

- ・総務本部のサポート

主に使用した機材・備品

- ・Canon EOS-1D X Mark II
- ・Canon EOS 5Dmark III
- ・Canon EOS 7Dmark II
- ・EF600mm
- ・EF300mm
- ・EF70-200mm
- ・EF24-70mm
- ・EF12-24mm
- ・一脚
- ・ノートPC
- ・HDD (1TB本部手配)
- ・Wifiルーター (本部手配)
- ・スキーセット
- ・アイゼン (雪山用12本爪)

主な記録活動

- 11日 各競技会場下見 (サンタカテリーナ)
 - 12日 開会式 (ソンドリオ)
 - 13日 アルペンスノーボードGSL/アルペンスキー DH (サンタカテリーナ)
 - 14日 アルペンスノーポートSL/アルペンスキー CB (間に合わず) (サンタカテリーナ)
 - 15日 アルペンスキー SG (サンタカテリーナ)
 - 16日 フリースタイルスノーボードSX (サンタカテリーナ)
 - 17日 アルペンスキー GSL (サンタカテリーナ)
 - 18日 アルペンスキー SL (サンタカテリーナ)
 - 19日 フリースタイルスノーボードBA (バルマレンゴ)
- 毎日、ホテル内でインタビュー対応

【反省・今後の課題】

まずはイタリアと日本の季節タイミングがずれていることから、雪山ロケーションでのフォーカスマチベーションに多少の不安があったもの、イタリア入り直前にW杯ラグビー日本大会撮影派遣のおかげでフォーカスレスポンス等、キープ出来たことが大きかったです。

雪山というロケーションでの撮影ノウハウはある程度把握は出来ていたので撮影自体に関して問題は無かったのですが、各競技会場の標高差によるスケールから視界不良による影響でフォーカスポイントセレクトに悪戦苦闘しました。

そんな中、視界不良による不規則な事態に備えて超望遠レンズから標準レンズまでそれぞれの種類あるレンズを最初から用意持参したことが1番大き

かったです。

一方、悔やまれたことは特にフリースタイルスノーボードSX競技で視界不良が1番酷く、望遠レンズは使えず、標準レンズで至近距離からアタックしたのですが、至近距離に限界があったうえに日本選手のゼッケン番号、ウェアカラーも全然見えず、滑降順情報も把握出来ないままのフォーカスとなってしまったこと。そんな事態に備えて天候の回復を待つだけではなく、迷わず、一刻も早いフォーカスポイント変更に踏み切る決断が必要でした。

最後に本部スタッフの手厚いサポートをはじめ、各競技監督からの迅速な連絡対応、リアルタイムな情報交換が全体的に「ベストなフォーカス」として功を奏したと思います。

僕1人ではできなかったこと、チームをつくって成し遂げた、その達成感、充実感を得られたことがすごく自分の財産になりました。

「ONE TEAM」

今回のイタリア大会を通して「デフリンピックの認知度を高める」という終着点に変わりはないのですが、このフォーカスをはじめ、現地での広報活動だけではなく、ビジュアルメディアとして色んな展開へとアクションを起こすべきではないか!?と思いました。

広報 加瀬 大介

1. 自己の役割とその評価

今大会にて、日本選手団の一員として広報（カメラ撮影）を担当させていただきました。大会期間中、かなり緊張していましたが皆さまにサポートいただいたお陰で役目を果たす事が出来ました。ありがとうございました。

【期間中の動き】

- 12/11 初戦ポーランド戦から12/17 アメリカ戦迄の9試合を撮影@マデージモ
- 12/17 マデージモからサンタカテリーナに移動
- 12/18 スロープスタイル撮影@キエーザ・イン・ヴァルマレンコ
- 12/19 ビッグエアー撮影@キエーザ・イン・ヴァルマレンコ

【使用機材・周辺機器】

- ・SONY FDR-AX55（ムービーカメラ）
- ・SONY α7II
- ・SONY α6000
- ・SONY SEL18200（一眼レフ用レンズ）
- ・SONY SAL85F14Z（一眼レフ用レンズ）

- ・MINOLTA AF200（一眼レフ用レンズ）
- ・三脚
- ・Photoshop（画像処理ソフト）
- ・WiFiルーター（本部手配）
- ・ノートPC（本部手配）
- ・モバイルバッテリー（本部手配）
- ・HDD 1TB（本部手配）

第16回冬季デフリンピック競技大会ハーフパイプチームの強化合宿やウィンタースポーツに関わった経験を活かして今大会に関わりたいと思いエントリーさせていただきました。私はマデージモでカーリングの撮影を担当し、後半にスノーボードフリースタイル競技を撮影しました。初めてのカーリングの撮影に戸惑いもありましたが、写真を見た方々に試合中の雰囲気や選手の表情がより多く伝えられるよう、試合毎に撮影するタイミングやアングルを変えるなど工夫し撮影を行いました。反省点は、期間中にもっと選手・監督・トレーナーとコミュニケーションを積極的に取った方が良かったかなと思います。コミュニケーションを取る事で私と選手との距離が近くなります。更にプレイヤー視点の情報を得て撮影に入る事が出来る為、もっと写真を通してカーリングの楽しさや臨場感を伝える事が出来たのではと思いました。

後半、18日・19日はスノーボードフリースタイル競技を撮影しました。

18日のスロープスタイル・19日のビッグエアーの競技会場は両日ともに天候が荒れる事はなく視界は良好でした。スロープスタイルについては、レーン・ボックス・キッカーでの選手の動きを事前にイメージ出来た事もあり、コースを見て撮影場所を短時間で決めて撮影準備に入る事が出来ました。翌日のビッグエアーでは狩野さんと2人で撮影をしました。私はスタート付近で選手・コーチ・トレーナーの表情やコミュニケーションを取っている様子を撮影しました。反省点は、もっと被写体に寄れる望遠レンズを使用して撮影する事でフリースタイルスノーボードの迫力を写真に盛り込めたかなと思います。また競技会場到着時にインスペクションが始まっていたので、送迎側の事情もあると思いますがもう少し早く会場入り出来た方が良かったかなと思います。

2. 今後の課題

「デフリンピックの認知度を上げる」という目的から見て私なりに感じた点は、関係者の方々が様々な活動をされていると思いますが、より多くの人に知ってもらうにはシーズン問わず選手個人ではなく

各競技チームで計画的に関連したイベントに参加し、WEBやSNS等を使用しつつ出場した大会の報告やオフシーズンに行っているトレーニングの様子などをコンスタントに発信する事が大切だと思います。

最後にデフスポーツ・ウィンタースポーツが更に発展する事を願いつつ、このような素晴らしい機会を与えていただき、皆さまのサポートを得ながら貴重な経験をさせていただきました事を改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

総務付事務局 梅澤 仁士

1. 自己の役割とその評価

【事前準備】

大会の開催国・都市（地方）が決定したのが開催の約1年前であり、また、結果的に中止にはなりませんが、第9回アジア太平洋ろう者競技大会（香港）の準備も並行して行うという体制で準備を進めました。2019年2月の現地視察には業務の都合もあり参加せず、現地に行った役員からの情報を得ましたが、自分自身が実際に見ていないため、競技会場や街の様子、距離感が得られないまま準備を進めることになりました。

その後、2019年3月に策定・公表した今大会の「日本選手団編成にかかる指針」に基づき、競技団体から選手・スタッフを、また医科学委員会や各関係団体からスタッフを推薦いただき、日本選手団を編成、2019年9月のデフリンピック派遣委員会で決定しました。

事前準備の段階での、主な準備内容は下記の通りです。

- ① 日本選手団の調書（会員資格・メディカルチェック等）の取りまとめ、確認
- ② 現地組織委員会及びICSDに対するエンター等との連絡
- ③ ユニフォームのサイズ確認・発注
- ④ 秋篠宮皇嗣両殿下へのご接見・壮行会・オリエンテーションの対応
- ⑤ 旅行会社との連携
- ⑥ 情報発信（日本選手団特設Webページ作成）の準備 等

自分自身、海外渡航経験も少なく、また事務局として国際総合大会も初めての経験であったため、事務局同士で確認しながら行いましたが、業務量が多く、今度どのように効率化を行うかが課題と感じました。

また、2019年10月には現地視察に同行しました。

組織委員会がほぼ全ての日程で同行したため、情報が得やすいというメリットがあったものの、出される情報は不確定なものが多く、組織委員会の体制に不安を感じる場所がありました。しかし、実際に現地を見ることにより、距離感や雰囲気などをつかむこともできたため、事務局スタッフの現地視察同行というのは大きな意味があったと感じています。

今回、壮行会は大きかりなものではなく、身内を中心としたものとなりましたが、選手団の人数自体が多くないため、規模としては問題がなかったように感じます。ただし、夏季と比べてどうしても規模が小さくなってしまふ冬季の競技において、どのようにスポットを当てていくかは課題が残りました。

また、大会直前になると、組織委員会からの連絡が来なくなり、宿泊するホテル名も分からない状態の中で現地入りせざるを得なくなり、現地でのアクレディテーションの取得においても本来のルールとは違った対応となり、現地での交渉が必要となりました。

【日本選手団の体制】

今大会では現地競技会場の都合により、本部が2ヶ所に分かれることになり、総務付の役割を担う事務局も2つに分かれることとなりました。結果からしてみると、スキー・スノーボードでの受傷のこともあり、選手に対しての本部スタッフは決して満足のいく人数ではなかったですが、派遣できる人数に限りがあるなか、どこに重点を置くか、総務の役割が多すぎるので、役員も含めてどのような役割分担にするのかは検討が必要だと感じました。日本選手団の公表が遅れてしまったことにより、PRの時間が取れなかったこと等、競技団体には迷惑をかけてしまったことは、今後の選手団体制の作り方の反省材料の1つです。自分はカーリングチームとともにマデージモに入ることとなり、総務2名、手話通訳1名、メディカルスタッフ1名、広報1名、輸送1名という体制で現地入りしました。

【現地での行動】

主なものは下記の通りです。

- ① カーリングチームとの連絡係・情報提供
- ② 総務付として各種取りまとめ作業
- ③ 組織委員会からの情報収集
- ④ 試合結果等、日本への情報発信

競技会場がある街がコンパクトであったため、宿泊ホテル・競技会場・組織委員会オフィスが全て徒歩圏内だったことは非常に恵まれた環境でした。その一方、本部スタッフとチームの宿舎が分かれてしまったこともあり、チームと本部スタッフのコミュニケーションがなかなか取れなかったのは課題が残ります。また、組織委員会オフィスにかなりこまめ

に足を運ぶことは今回の大会で重要でした。「日本が情報をほしがっている」という能動的な態度を見せることにより、顔も覚えてもらえ、結果的に多くの情報を得ることができたように思います。ただし、カーリングの場合はTD（技術委員）から各国への情報は配信が比較的あったほうであり、そういう意味では大きな混乱は見られませんでした。

現地での情報はLINEを中心に行いました。別になつたとはいえホテルの場所は近かったため、（本部スタッフとチームの）顔を合わせてのミーティングを行った方が良かったのではないかと感じる部分もありましたが、チームとの連絡はしっかり取るよう心がけました。また、本部内の情報共有も朝と晩はミーティングを行い、また何かあればすぐに連絡ができる体制を整えるよう心がけました。人数が少なかったため、役割を超えて協力ができることは良かったように思います。柔軟な体制ができることと、本来の役割の遂行をどう調整するかは総務・総務付事務局の大きな役割であると実感しました。

試合結果・また選手の様子等情報発信については、事前に現地事務局でWeb更新ができるような体制がとれたこともあり、広報担当者の協力もあり、かなりリアルタイムに近い更新となりました。結果速報と写真を分けてアップする等、工夫を行い、また動画によるデフならではの戦術などができるだけわかるようにしました。ただし、カーリングそのもののルールが一般には知られていないので、その辺りの工夫はもっと必要であると感じました。

スキー・スノーボードチームの本部が受傷・競技会場変更対応に追われていたこともあり、そちらについてもできることは対応しました。ただし、情報発信は個人の能力に頼ってしまった部分があり、毎回このような体制ができるわけではありません。その辺りどのようにシステム化していくか、また大会期間中、現地と日本の役割をどのように分けていくかの課題も見えていきました。

カーリングチームでは大きなケガや病気もありませんでしたが、競技環境は良いとは言えませんでした。会場は完成しておらず、かなり気温の低い環境で競技に臨まなければならない状態でした。選手のケアはチーム内のトレーナーが主に行っていましたが、本部メディカルスタッフとの連携について、もっと上手く繋げられる方法があったように思います。

【受傷対応について】

スキー・スノーボードチームで受傷が続いたこと、また大きな受傷があったことについて、逐一情報を得てはいましたが、遠距離でどのような支援ができるかは課題が残りました（実際に自分自身ほとんどできなかったと感じています）。結果的に医師・手

話通訳を一度ヘルプに出しましたが、判断ができる総務役員を早く送り出す判断をすべきだったと反省しています。また、カーリングでは命に関わる受傷はなかなか起きないこともあり、競技ごとの危険度・リスクの大きさに応じたスタッフの配置、医薬品の準備が必要だと感じました。

スノーボードの選手1名が緊急手術・現地で入院をしたということで予定日には帰国できない状態となり、日本から応援スタッフが来るまで私が付添で残ることとなりました。役割は選手と現地医療関係者とのコミュニケーションや選手本人の（手話言語対応による）ケアでした。私が付き添った3日間はまだ症状が重かったということもあり、実際にできたことは最低限だったように思います。また女性選手のケガだったこともあり、できることが限られてしまったため、保険会社手配の現地通訳（日本語—イタリア語）の方には大変助けられました。逆に男性選手がケガをした場合どのようになっていたのか、ということも含め、今後大きな受傷が起きた際の緊急体制・対応方法はしっかり考えていかなければならないと実感しました。

【反省・課題・まとめ】

大きなものとしては下記の通りです。

① 本部の情報共有のあり方

本体内、競技団体ともそうですが、現地では限られた人数で対応していることもあり、少しの情報ズレなどが誤解を生むことが想定されます。通信環境の発達によりスピーディーな情報共有ができるようになりましたが、その反面、一人一人が責任を持って発信することが重要であると感じました。

② 情報収集のあり方

渡航前・渡航後も含めて組織委員会からの情報が得られない場合の対応についてはもっと考えるべきだと感じました。現地入りしてからは情報のなさに振り回された面があります。組織委員会とのパイプをどう作るかは重要です。

③（準備段階も含む）リスクマネジメントについて

今回のような大きなケガを想定できていなかったことが第一です。受傷に関しては各人が精一杯の対応をして乗り超えましたが、本部メディカル体制、緊急体制について今回はかなり綱渡りの状態だったように思います。調書に記載する内容の見直し、競技団体及び本人やその家族との連携、本部スタッフ内での情報管理等、見直す必要があると感じました。

④ 競技団体との連携

今大会では競技団体は1つでしたが、競技ごと

にチームとして分かれており、チーム同士の連携が取れていたかどうか見えない部分がありました。競技団体内のことにどこまで手を出して良いか、悩む部分がありました。その辺りは信頼関係を作っていくことが大事であり、そのパイプとして総務というのは重要な役割を持っていることを再認識しました。

⑤ 選手ファーストの考え方

スタッフとして（特に現地にいるときは）選手ファーストを意識しました。選手が日頃の練習の成果を最大限に発揮できるようにするのがスタッフの役割だということをいつも意識していました。競技技術面では競技団体スタッフがいるので、その他の環境面などでできることは何か、常に考えて行動をすることが求められます。今回、残念ながらチームの成績が振るわなかったこともあり、その辺りでの声掛けをどうするか、本部スタッフとして何ができたかは反省材料です。

最後に、自分自身としての行動を振り返って感じたことを記載します。

- ・総務自身の体調管理をしっかりすること（今回は大きく体調を崩すことはありませんでしたが、プレッシャーは大きなものがあった）自分が体調を崩してしまうと選手のサポートができなくなるので、日頃からの健康管理は重要。特に食が日本とは大きく違うので、国によってはそれなりの準備が必要です。
- ・（自身の）通信環境はしっかり確保すること。今回はスマートフォンに現地でも使える海外対応のSIMを入れました。これはかなり便利に使うことができ、安心感にも繋がりました。
- ・英語（現地語）や国際手話の技術の習得はやはり必要だと感じました。スマホアプリである程度は補完できますが、やはりデフリンピックの共通語である国際手話や、配布される文書に記載されている英語は、少しでも良いので習得はしておいた方が良いと実感しました。
- ・過度な気負いをし過ぎない（プレッシャーを感じすぎない）こと。ある程度「なんとかなる」（そうではないこともたくさんあるのですが）という気持ちで過ごさないと自分自身が精神的にコントロールできなくなるので、心に余裕を持つことはサポートをする側にとっても大事だと思いました。

今大会は、私自身としても経験が浅い中の渡航だったものの、日本選手団の皆さまをはじめ、競技団体、日本の連盟職員などその他多くの皆さまに支えられて業務を遂行することができました。選手のサポートが十分できたかという万全だっ

た！と言えない部分は多々あったかと思いますが、この反省点を次の大会に活かすべく、引き続き業務に邁進いたします。ご支援・ご協力ありがとうございました。

総務付事務局 加茂下 和子

1. 自己の役割とその評価

競技チームへの事務連絡、大会派遣までにかかる資料作成やICSDや実行委員会への情報収集、エントリー手続き等を行いました。また現地にも同行し、サンタカテリーナの事務局担当をいたしました。

サンタカテリーナは、スキー、スノーボードのメイン会場となっており、リフト乗り場までとても近いホテルに宿泊することができました。またホテルは清潔で、日本人に合うバランスの取れた食事や水を提供してくれたおかげで、風邪などの内科的症状が少なかったのはとても良かったと思います。

ホテル側がロビーを開放してくれたためロビーに本部を設置し、各チームがミーティングなどに活用をし、チーム同士が交流している様子を日々確認することができたのは本部としての「安心感」につながりました。

突発的事例としては、スノーボードフリースタイルチームは会場都合によるバルマレンコにホテルの引っ越しや、試合中の受傷など様々なことがありました。何かあるときはカーリングのあるマデージモ事務局にも連絡を取り「報・連・相」を忘れないよう心掛けました。

2. 今後の課題

本部、競技チームとも「スタッフの有り方」を見直す時期に来ていると思います。

本部に関しては今まで本来の業務だけでなく色々なことを協力し合って進めることが多かったのですが、今大会は会場がサンタカテリーナ、マデージモの2つに分かれ、本部も半分ずつの現場配置となったこともあり、特にそのような状況となりました。

ほとんどと言っていいほど実行委員会からメールでの情報展開や貼りだしなどの可視化情報がなく、実行委員会本部に1日数回通い、英語と国際手話を駆使して情報を得なければなりません。

国際手話ができる者は限られており、必然的に通常の仕事プラス国際手話通訳の役割も担ってしまい負担が大きくなります。

国際手話は極めて重要なコミュニケーションツールであることを目の当たりにしましたので、選手団員はみな国際手話で日常会話ができるくらいの勉強

は必要かと思いました。

今まではおりませんでした。本部署内に専門の国際手話通訳を配置することで本部スタッフそれぞれが本来の業務に注力できるかと思えます。

また、広報に関してもカメラマンが撮影した写真や動画を現地で編集しアップまで行っていますが、ものすごく時間がかかります。これからは編集までを現地で行い、アップは日本待機事務局に任せる等、現地と日本でできる仕事の振り分けを行えば、現地で突発的な出来事が起こってもスムーズに対応できる余力が生まれると思えます。これは広報だけに限ったことではありません。

競技チームには、本部と競技チームをつなぐ事務局的なスタッフを現地へ同行してほしいと思えます。監督やコーチだけですと事務的なことは分からないままのため、情報共有ができていないということも多いです。

また、スタッフの中には事務局的でなくても構いませんが、女性を入れてほしいと思えます。女子選手に何かあった際、男性スタッフでも話を聞く、治療をするなどのケアはできますが、女性特有の身体的サポートはやはり男性スタッフに任せるのに抵抗がある女性選手がいると思えます。

スタッフの人数が多ければ多い程良い、と言っているわけではありません。少数精鋭で、自分に与えられている役割に集中して選手をサポートできる環境を整えることが今後の重要課題になっていくと思っています。

医師 清水 雅樹

2015年ロシア大会以来、2回目のデフリンピック帯同となりましたが、まずはこのようなサポートの機会を頂けたことに心よりの感謝を申し上げます。メディカルチームは本部ドクターが清水（サンタカテリーナ）、楠目信三（マデージモ）、看護師の篠崎菜穂子、トレーナーの砂川あゆ末の計4名からなる編成でした。

【事前準備】

選手・役員のメディカルチェックやドーピングコントロール、医薬品などの準備に関しては、立石智彦先生を中心とした全日本ろうあ連盟スポーツ委員会医科学委員会の皆様にご尽力を頂きました。夏季大会を含めた海外遠征経験豊富な皆様のアシストのもと、前回大会に比較して時間的余裕を持って準備ができました。帯同医としてはオリエンテーションにおいてメディカル支援体制の説明を行うとともに、

現地気候や生活環境、フライト情報、インフルエンザ流行情報と予防接種の推奨などを説明しました。

また、本大会では本部準備薬剤を可及的に漸減し、競技団体または個人によるOTC医薬品（市販薬剤）の準備をお願いいたしました。これはアンチ・ドーピングに由来する問題に限らず、医師処方薬を医療機関以外の場で第三者に投与する治療行為に対する法的整合性に由来するものでもあります。今後も皆様のご協力を頂ければ幸いです。

【移動】

往路、復路とも13時間を超える長いフライトや長時間のバス移動となりましたが、ミラノの空港に隣接したホテルを確保して頂いたおかげもあり、移動に伴う体調不良者は発生しませんでした。また、大会会期中に発生した負傷者も航空会社・保険会社のご尽力のもと、安全かつ快適な環境にて帰国することができました。

【現地生活環境】

本年は日本同様、ヨーロッパも暖冬であったため事前の情報（最高 -2°C ／最低 -9°C ）よりもかなり暖かく、寒冷環境による疾病の発生はありませんでした。サンタカテリーナ宿舎では食事の質・量ともに非常に充実しており、生野菜や果物についてもリクエストに対して柔軟に対応していただけました。

【大会期間中】

アルペンスキー、スノーボードスロープスタイルの2種目で救護搬送を要するレベルの外傷が発生しました。1名は競技場内救護室における現地医師およびメディカルチームの診察にて膝関節前十字靭帯損傷の診断が疑われたため、対症療法のうえ予定通りに帰国ののち治療を行う形となりましたが、もう1名はドクターヘリにより近隣救急医療機関へ搬送後、腰椎骨折の診断にて緊急手術を施行、選手団から1週間遅れての帰国となりました。メディカルチームや現地本部スタッフに加え、全日本ろうあ連盟の関係各所との連携が必要となる事例でございましたので、今後の海外遠征における危機管理マニュアル作成のためにも詳細につきましては別途報告致します。

ドーピングコントロールについては、1日2～3種目がピックアップされ、メダリスト3名が対象となる形で行われました。前回ロシア大会は金メダルチーム・選手のみが対象であったことを鑑みると、年々対象者は増加していくものと考えられます。聴力検査についても抜き打ち検査で3名が対象となり

ましたが、検査場所と選手滞在施設の距離が離れていたこともあり、選手にとっては負担が大きいものでした。

内科的疾患についてはインフルエンザや消化器系の問題は無かったものの、感冒性症状が遷延してしまったケースがありました。幸い流行すること無く大事には至りませんでした。帯同医として内科的診断加療のスキルを十分に有することの必要性を改めて感じた大会となりました。

【大会を終えて】

今回、メディカルを統括する立場として業務に最善を尽くす事はできましたが、事後になって感じる反省点・改善点も多々ございましたので、この経験をデフスポーツにおけるメディカルサポートの質の向上に繋げるために、関係各所へのフィードバックをしっかりと行いたいと感じております。

最後になりますが、本大会における本部役員の皆様、競技団体選手・スタッフの皆様、そして全日本ろうあ連盟の皆様へ心からの感謝を申し上げます。ありがとうございました。

本部医師 楠目 信三

はじめに

小生の孫は生来の聴覚障がい者です。ろう者、聴覚障がい者の置かれている現状は決して他人事ではなく、以前より何かお手伝い出来ればと思案していた。今回、公募を知り早速応募し、貴会のご厚意により参加する機会に恵まれ、多くの知見と教訓を得た。主にマデージモカーリングチームを担当。本部からのメディカルスタッフは小生のみ。薬、機材等は予め他のスタッフが準備したものを持参した。

以下与えられた項目ごとに報告する。

1. 自己の役割とその評価

1) メディカルとしての選手及びスタッフの健康管理

カーリングチームとの宿泊ホテルが異なり大会を通してのコンディショニング、メディカルチェックが十分に出来なかった。

従って、試合前後のメディカルチェックを中心に行った。

試合前、チームトレーナーから一部選手のコンディション報告を受けた。これにより不十分ではあるが、概ね選手の健康管理を行った。

選手団スタッフの上気道感染症が発生し、他の選手、スタッフに2次感染の危険性を危惧する事になった。発症後5日にマデージモにきた時はご本人

は体調不良でふらつき、診察後即座に投薬開始したが大会後半において咳喘息様症状を併発した。そのようなことがあると、選手たちやスタッフの不安材料になり、士気にも影響する事になるので今後はメディカルチームとして注意したい。

2) 今大会を通して、多くの方にデフスポーツ及びデフリンピックを周知し、ろう者、聴覚障がい者のおかれている状況を理解して頂き、偏見や差別の解消、共生社会の実現を促進する。

2. 今後の課題

試合中、当該カーリング選手が氷上で転倒、右臀部を強打？、直ぐに起立可能。脳震盪はなさそう、明らかな骨傷もなさそう。ただ、これはあくまでも観客席からの経過観察。受傷直後はチームトレーナーが対応した。会場はかなり底冷えし、3時間位プレーするカーリングは相当過酷。主催者として責任を持って会場には医学的判断の出来る人材を配置すべき。チームトレーナーより、夜中に何かあると困るのでAEDを管理したい旨申し出があった。カーリングチームと小生の宿泊施設は異なり、AEDそのものは一般の方でも扱えるのでお願いした。今後、万が一に備え、カーリングチームと帯同医は同じ宿泊施設の方が良いと思う。隣同士とは言え何かあると雪の為すぐに対処出来ない。このような状況下では選手、帯同医共にストレスになる。今回、宿泊所には救護室は設置されず小生の宿泊室と兼用だった。感染症等を想定すると別個救護室設置が望ましい。

おわりに

将来、聴覚障がい者の孫がデフスポーツに関わった際、少しでも参考になる事を考え、アスリートファーストを念頭に報告書作成に務めた。なお、多々未熟な言葉が並ぶことは、ご容赦願いたい。最後に、貴会より、この様な貴重な機会を与えて頂き、心から謝辞申し上げます。

看護師 篠崎 菜穂子

1. 自己の役割とその評価

1) 団体内の役割

医療チーム：看護師

2) 目的

日本選手団の選手、監督、コーチ、スタッフ役員などの健康管理、体調不良時などへの看護業務、24時間の日常生活管理、心理的ケアなど医療チームの一員として日本選手が円滑に競技できるように

サポートする。

3) 活動体制

メディカル体制としては、競技会場が離れていた為、サンタカテリーナ:(アルペンスキー、スノーボード) 医師1名、看護師1名、アスレティックトレーナー1名、マデージモ:(カーリング) 医師1名の2ヶ所に分かれ同行しました。

また、サンタカテリーナ内でも、競技により会場が異なるため医療チーム内で担当を決めて同行しました。

4) 診察内容

筋肉損傷、靭帯損傷、皮下出血、腹痛、肋軟骨損傷、打撲、感冒、湿疹、渡航前からの橈骨骨折診察とリハビリ指導、(競技中転倒にてL2椎体破裂骨折緊急手術)

5) 主な処置

投薬、穿刺、弾力包帯固定、トレーナーによる鍼灸、超音波治療等

6) 看護業務

- ① 診療の補助(診察しやすい部位の体位調整、穿刺時の介助、穿刺前の清拭、受診者への緊張をほぐすような声かけ等)
競技中転倒した選手への競技会場医務室医師との病状の状況を確認把握しチームドクターに情報提供
- ② 診察時の問診表記入の援助や代筆(具体的にどんな痛みか、どんなときに強いかなどを詳しく聞く等)
- ③ 検温、血圧測定、酸素飽和度測定
- ④ 与薬方法の確認、指導
感冒にてうがい薬処方となったが、予定よりうがい薬が早くなる事例があり、使用方法の工夫
- ⑤ 医師、トレーナー指示による受傷直後の患部(膝前十字靭帯損傷)へのアイシングと観察、患部安静、患側挙上の姿勢調整
- ⑥ 渡航前からの橈骨骨折者への包帯の巻きなおしと医師からのリハビリ指導をもとに肘の伸展運動を見守り声かけを行いました。
- ⑦ 体調観察
食事時を利用し、選手や選手団員の顔色や表情や食事量の摂取などを観察。また、朝食集合時を利用し、選手の睡眠状況や排便の有無などを聞き体調不良の有無を確認し、水分摂取を促すなどのアドバイスをを行いました。
- ⑧ 環境調査、健康管理指導
メディカルルーム室温湿度を確認し、室温平均21.4℃ 湿度平均42%であり湿度はやや低かった。手洗い、うがいの声かけや、人の集

まる本部やメディカルルームに擦り込み式の手指消毒用アルコールジェルを設置をした。診察までには至らなかったが、咽頭痛などの訴えがあった時には、うがいや飲水の促し、自室の湿度を上げる為にタオルを干すなどの声をかけ、必要時診察の促しを行いました。

⑨ 薬剤・処置用品の管理

現地到着後、日本から持参した薬剤・処置薬品の確認と使用した薬剤数と処置用品を記録に残し管理

⑩ その他

コミュニケーションボード作成(緊急入院となった選手に、入院生活で困らないように、症状や生活での日本語をイタリア語に変換したもの)

7) まとめ

大会途中で競技の会場変更の発表があり、変更競技選手、監督、コーチのみホテルが移動となった。その為競技時には、必ず医療チーム一人は同行できるようにマデージモ担当医師とも連絡を取り合い同行することができた。これは、医療チームのみではなく、日本選手団内一丸となって選手に対してフォローできたことは、スタッフの方々皆様の力であると感謝いたします。

2. 今後の課題

今回、競技中のレスキュー隊の搬送があり、情報が錯綜したことがありました。緊急時のLINEの使用法の周知をすることが必要であると思いましたが、冬季大会では、継続し大会前からの予防策の徹底が必要と思います。本大会の選手団の一員として同じ時を過ごすことができ、全日本ろうあ連盟の皆様へ感謝いたします。

アスレティックトレーナー 砂川 あゆ未

1. 自己の役割とその評価

本部アスレティックトレーナーとして日本選手団全体の医療面でのサポート、特にコンディショニングを担当しました。今回本部メディカルチームとしては医師2名、看護師1名、アスレティックトレーナー1名で構成されておりました。選手団全体の人数また各チームにトレーナーが帯同されていたことを踏まえすと十分な人数体制であったと思いますが、今大会では競技によって開催場所が離れており移動にも時間がかかるため本部メディカルチームを二つに分け、離れた場所で開催されるカーリング

チームは急性外傷が少ないであろうことが予測されたためアスレティックトレーナーはスキー・スノーボードチームに同行することとなりました。離れた場所での開催となる場合、その競技特性を考慮した上でアスレティックトレーナーも2名体制を取ることもご検討いただけたらと思います。

今大会でのトレーナールーム利用者は全日程で16件でした。以下にその内容をまとめます。

	急性期対応		慢性期対応	
	超音波	鍼灸	超音波	鍼灸
打撲	2			
筋損傷	5	3		
靭帯損傷		1	1	2
骨折			2	
合計	7	4	3	2

今大会では基本的に各チームでテーピング類、コンディショニング用品の準備をお願いし、本部メディカルとしてはテーピング類やコンディショニング用品は少なくしました。本部トレーナーとして提供できる治療面での（超音波治療器、鍼灸用品）について準備をしっかりと行い、各競技団体トレーナーと連携して上手くサポートできたかと思えます。

今大会では夏季デフリンピックの際と同様に各チームトレーナーとLINEを利用することにより、本部メディカルと円滑に選手の状態について情報共有できたと思えます。これについては今後も活用できる手段であると思えます。ただし情報共有の内容については個人情報の取り扱いなどの問題も含めて、本部メディカルとしてどこまで情報共有すべきかの線引きについて共有を深めておく必要性を感じました。

また今回、現地病院にて緊急手術する怪我が発生し非常事態だったため一時的に情報が錯綜してしまい、混乱した事態になりました。これについても本部スタッフも含めて情報共有の仕方についてのフローチャートが機能していなかったことがあったため、本部スタッフとメディカルでの情報共有の仕方について精査が今後必要であると思えます。

2. 今後の課題

今後の課題は以下にあげさせていただきます。

- ・競技の開催場所が分散する場合は、その競技特性を踏まえた上でアスレティックトレーナーの人数体制、本部としてコンディショニングのサポートをどのようにすべきか。
- ・各チームトレーナーと情報共有のためにLINEを活用する。その際の個人情報の取り扱いについて今一度本部メディカルスタッフ内で取り決

めをしておく必要がある。

- ・救急搬送など非常事態が発生した場合の情報発信の仕方について、本部スタッフ全体での共通認識を作る。

以上、今後サポートされる方におかれましてはご一考くださいますようお願い申し上げます。

改めて関係者各位、大怪我が起きてしまったにも関わらず皆様のご尽力の結果全員が帰国でき、最高のサポートが行えたことに感謝申し上げます。

輸送 内田 美春

1. 自己の役割とその評価

私はサンタカテリーナにおける日本選手団本部の輸送スタッフとして、このデフリンピックで選手がストレスなく競技に専念し自らの実力を十二分に発揮できるための環境を整えることを大切にしたいと考えました。総務をはじめとする本部スタッフの皆さまと協力しつつ、輸送や宿泊、医療などの手配、調整、対応等のサポート、またその際に必要となった手話・英語通訳などを担いました。

今回は各競技会場のみならず、アクレディテーション登録と開閉会式会場も宿泊地から車で数時間程離れた街に設定されていたことに加え、ゲストのアテンドや本部役員の移動、大会開始後の競技会場変更に伴うチームの引っ越しなど、大会前半は移動への帯同の役割を多く担いました。後半は離れた会場への対応と、けがをした選手への対応など本部全体が慌ただしい印象の中での活動でした。また、帰国第一陣はミラノ発の飛行機がキャンセルとなり、さらにその後の飛行機遅延なども重なり、それらの対応も必要となりました。

本部スタッフそれぞれが自らの役割を全うする中で、隙間を埋めるような役目を担ったと感じています。この2週間がとても短く感じられたのは、充実していたからかもしれません。

今回は、空港での行き・帰りの対応、移動、けがの対応などで様々な初めての経験があり、自分にとって大切な気づきや体験となりました。これを何かの形で継承していくことができれば、と思います。このような貴重な機会を与えていただいたこと、そして実際に様々なご協力をいただいた日本選手団の皆さま、特に本部スタッフの皆さまに感謝申し上げます。

2. 今後の課題

- ・本部スタッフも、日本選手参加競技の基本的なルールや用語は、できる限り興味を持って知識と

して知っておいた方がよい、と感じました。

- ・開催地や競技、スタッフ編成等が変われば、その時々への対応は当然違ってきますが、本部スタッフの過去大会での経験の蓄積を次にどの様に生かしていくことができるのか、現地で話し合う時間を作ってみることも有益かもしれない、と思いました。
- ・現地語が通じた方が外国で業務が進めやすいということは明白であり、現代はそれを助ける様々な翻訳ツールもありますので、事前に選手団内でその共有をしたり、また、緊急事態に備える意味でもWi-Fi所持についても競技チームも含めて把握があるといいと思いました。
- ・今回に限らず過去のデフリンピックでも、ホテルや空港、飛行機の中などで、日本人の方から「何の大会ですか？」と話しかけられたことがあります。デフリンピックをご存知なかったその方たちに説明をしつつ、多くの人の目に触れる選手団の移動を、その啓発活動としての有効性を生かした活用ができないか、と思いました。（スーツケースまたは手荷物にお揃いの「デフリンピック」ステッカーをみんなで貼るなど？）

アルペンスキー

監督 田中 照也

1. 選手・役員の選考基準・方法

選手推薦については、国内大会、ヨーロッパデフカップ、世界選手権での結果を踏まえた上、又選手が技術的 精神的（メンタル）に世界で通用するレベルでメダル獲得か、入賞圏内かを重視しました。

それと日々の練習態度や日常生活等も日本代表として、相応しい行動をしているかも推薦材料としています。

競技スタッフについては、上野コーチは前々回のアメリカのパークシティで開催されたデフリンピックの監督であり経験者でもあり、選手達に良いサポートが可能と判断し推薦しました。

また、2015年ロシアデフリンピック後の4年間をチームコーチとして招聘し、2016年から2018年までの年末年始合宿（北海道開催）、夏合宿でも選手達の技術を見てきており、選手それぞれの技術面、体力面、メンタル面を知り尽くしている上、スキー技術を教える時のコミュニケーションは身振りを含めた分かり易い手話を生かし、選手達の競技スキーのモチベーションを上げられるサポート基準も含めて、推薦をいたしました。

チームトレーナーは、川崎トレーナーを推薦しました。

川崎トレーナーは、競技スタッフの中で一番長くチームをサポートしてくださっており、また選手達のメンタル面のサポートとテーピングサポートが可能ということも含め推薦しました。

それに競技スタッフの中で、手話が一番上手であり、選手達に分かり易くコミュニケーションが取れることも推薦材料としました。

2. 総評

【チーム体制の役割】

監督 田中照也（2003年冬季デフリンピック日本代表選手、2011年スロバキアデフリンピック代表※中止、2015年ロシアデフリンピック代表）

チーム責任者としてチームを纏め、大会本部・他チームとの合同トレーニング（ゲートトレ）交渉他、TCM会議出席選手サポート（コンディショントレーニング他）、庶務全般

コーチ 上野英孝（2007年アメリカデフリンピック監督）

デフリンピック事前強化合宿、大会期間中にお

ける選手のテクニカルサポート、大会コースアドバイザー

トレーナー 川崎純（四條畷学園大学 2011年スロバキアデフリンピックトレーナー※中止）
デフリンピック事前強化合宿、大会期間中における選手のコンディションケア、メンタルケア、ドーピング対応

サービスマン 永田憲市郎（外部スタッフ招聘 2015年ロシアデフリンピックサービスマン）
選手のスキー板マテリアル調整、選手のインスパクションアドバイザー、庶務全般

【事前強化合宿スケジュール、競技スケジュール】

12/4	移動日
12/5	強化合宿（フィジカル及びコンディショントレ）
12/6-12/10	強化合宿（AMゲートトレ PMコンディショントレ）
12/7	強化合宿（AMゲートトレ PMコンディショントレ）
12/8	強化合宿（AMゲートトレ PMコンディショントレ）
12/9	強化合宿（AMゲートトレ PMコンディショントレ）
12/10	レスト日
12/11	強化合宿（AMゲートトレ PMコンディショントレ） ※中村選手はダウンヒル公式トレーニング
12/12	強化合宿（AMゲートトレ PMコンディショントレ） ※中村選手はダウンヒル公式トレーニング
12/13	ダウンヒル競技（中村選手出場） PMコンディショントレ
12/14	SC競技（中村選手 PMコンディショントレ）
12/15	SG競技（中村選手、北城選手出場）
12/16	レスト日
12/17	GS競技（中村選手、北城選手、吉田選手出場）
12/18	SL競技（中村選手、北城選手出場、 ※吉田選手は怪我の為、出場棄権）
12/19	静養日
12/20	移動日
12/21	移動日（飛行機欠航の為、ドイツフランクフルト泊）
12/22	PM日本帰国（羽田着）

【本大会の振り返り】

今回のアルペンチームは、田中監督の下、上野コーチ、川崎トレーナー、サービスマン（外部サポート担当）はチームが良い成績を出せるようにあらゆることに気を配り、各役割をしっかりと果たしたと考えています。

私はアルペンチームを纏める立場として、また元デフリンピック選手の経験を生かし、常に選手目線で考え、最高のパフォーマンスを発揮する為の環境作り（事前強化合宿でのゲートトレーニング、荷物サポート、日本から持参した海外用炊飯器で日本食サポート）に全力を注ぎました。

日本チームが大会期間中、常に優位な状態で活動できるよう気を配り、チームの動きを進めました。

上野コーチは、選手達のもっている技術を100%発揮出せるよう精神面やスキー技術面を指導しました。1/100秒でもタイムが速くなるよう常に考えてくださり、現地での日常生活でも動きの早い行動を実施し、選手達が気持ちの良い準備体制を整えてくださりました。

川崎トレーナーは、選手のメディカル面とコンディション面でサポートをしてくださり、肩に脱臼癖のある北城選手の肩にテーピングサポートする他、選手達の心理的ケアにも努めてくださりました。

前回デフリンピック時に帯同したアルペンスキー経験のあるドクターが今回も来てくださり、時間が許す限り選手達の身体のケア、怪我のケアなどのサポートは選手にとってはプラスになることが多く、非常に有益であったと思います。

今回のデフリンピック開催地は、サンタカテリーナススキー場で、聞こえる人のワールドカップ大会が開催されるレベルで難易度の高いトリッキーなバーン会場でした。

今回はデフリンピック開催1年前に視察で現地に訪ねており、大会会場のバーン他、ワックステスト（雪面の温度測定）を調査しあらゆるシュミレーションを頭に入れて、本大会はサービスマンによる高速系のワックステストを含め、選手の環境慣れの為、早めに現地入りし事前強化合宿を実施する等、本大会の戦略を図って大会に臨むという形をとりました。結果としては、この選択は選手の心準備が整えた意味では非常に良かったと思います。

【TD会議】

（アルペンではTCM（チームキャプテンミーティング）と言います。）

TD会議は私と上野コーチが毎日TCMに参加いたしました。

このTCMでは国際手話が中心となって話が進み

ますが、アルペンスキーの競技ルールはFIS（国際スキー連盟）ルールと全く同じの為、会議の話内容は概ね理解していましたが、天候などによる競技スケジュール変更などは常にアンテナ（自分から情報をつかみとる）を立てておかないと後々になって情報入りが遅れてしまうことだけは一番気をつけた点でした。

また、全体の確認事項や公式トレーニングなどについて確認をしました。国際大会やそのTCMは、FIS（国際スキー連盟）のルールに則り進んでいますので、FISルールを理解している者が必ず出席すべきだと改めて再確認いたしました。

FISルールを理解しないと、話の内容についていけない部分もあります。今後も注意していきたいと思います。

【成績に対する評価、反省、次大会に向けた取り組み改善案】

選手達は毎年ヨーロッパデフカップと世界選手権に出場しており、海外大会の経験値は非常に高く、その経験を生かし選手達は持ち前の技術でフルアタックできていたのは非常に良かったと思います。

前回ロシアデフリンピックでは、中村選手は日本チーム得意種目の技術系SLで4位（メダルまで0.18秒差）でしたが、その悔しい気持ちを今回のデフリンピック大会にかける思いは、非常に大きかったと感じられます。

今大会もオールラウンダー選手として全種目（DH SG SC GS SL）参加した結果、入賞した種目は複合、GS、SL全て8位入賞です。

中村選手のこれまでのヨーロッパデフカップ大会ではGSとSLともメダル獲得しており、この成績だけを見るとここ数年の海外大会では良い成績だっただけにチーム挙げての悲願のメダル獲得へ！と、あと一步届かなかったのは非常に悔しい結果であったとも言えます。

北城選手は、中村選手に次ぐ元々実力の高い選手だけに期待もありました。（出場種目：SG GS SL）

前回デフリンピック同様に今回もスタート順に恵まれず第2グループの最終ゼッケンに近い滑走のビブをひいてしまったのも非常に悔やまれます。

結果は、出場した種目全て入賞なりませんでしたが、これは技術面だけではなくメンタルの強さや、メダルを取る為に自分が何をすべきかということをも自分なりにしっかりと考えて行動する力が必要と感じられました。

吉田選手の出場種目はGSとSL（デフリンピック初参加）。

デフリンピック大会開催前の事前強化合宿では非常に良いトレーニングが出来ており、本番に向けてメンタル面も落ち着いていたと感じられました。

出場種目は技術系のGSとSLの2つに集中し、ベストなパフォーマンスで初レースのGSに臨みました。スタートから中間地点あたりまでベストな滑りが出来たのですが、急斜面から緩斜面（ウェーブ前後）入る地点で転倒し、無念の途中棄権になりました。

本人も良い滑りが出来ただけに非常に悔しかったと思います。

今回のデフリンピックや世界選手権のメダリスト選手は、日本の普通のFISレース、SAJレースでも上位に食い込むレベルです。また、ヨーロッパ選手は若手選手が急成長しておりました。

技術系だけではなく、そのレベルの選手達と対等に戦えたことは、次へのステップへと繋がったのではないかと思います。

今後のトレーニングや大会において技術向上と経験値を重ね、更に上のレベルに上がることで、世界大会でもメダル争いが出来る選手になれるとそう感じられます。

改めて基本からもう一度見直し、今回の悔しさを4年後に晴らしてほしいと思います。

結果的にはメダル獲得の目標は達成できませんでしたが、出場した中村選手、北城選手、吉田選手は持ち前の力で滑走できたことは非常に大きいと思っておりますし、良い糧にもなったかと思われれます。

日本選手のスキー技術はヨーロッパでも評価されておりますので、チームとしても世界のトップ集団の入りする為にはヨーロッパ特有のハードバーン、トリッキーなバーンに勝てなければいけないかと強く感じました。

日本のバーンは基本的にはソフトバーン中心である上、日本国内でどんなに強くでもレベルの高いバーンを提供する海外で勝たなければ、意味がないと思っています。

その為には日々のトレーニングを鍛錬することも重要ですが、国内トレーニングについては、聞こえる人のレースや聞こえる人の合宿（スキーマーカー主催の合宿等）にもっと参加すべきだと思います。

デフだけのレースや合宿（国内外合宿舎）だけでなく、他に競う聞こえる人トップレベル選手たちと切磋琢磨し、レースや合宿で競い合うことで、経験値を上げることもでき大舞台でも力を発揮できると思っております。

これは世界選手権、デフリンピックでメダル争う戦いをする為には非常に重要かと思われれます。

最後に今回サポートして下さった全ての方に感謝の意を表したいと思います。

応援、本当にありがとうございました。心から感謝を申し上げます。

チームコーチ 上野 英孝

1. 自己の役割とその評価

ロシアデフリンピック終了後、前コーチ勇退による新チーム結成となり、平成27年度から新チームの選手育成を仰せつかりました。8年振りにろう者スキー協会コーチとしてスキーの技術指導を行いましたが、手話をすっかり忘れていたことから、まずは選手とのコミュニケーションの向上を図る為、各種トレーニングの中に、遊びによる刺激やシナプソロジーによる刺激等、各種レクリエーションを交えたトレーニングメニューを考え、スキー技術だけではなく、コミュニケーショントレーニング、コーディネーショントレーニング等を積極的に取り入れ選手の育成を図ることとしました。また、基礎基本の徹底と、チームワーク強化にも取りかかり、個人で戦うデフリンピックから、支え合い全員で戦うデフリンピックを目標に掲げ選手の総合的な能力の向上を図りました。

デフリンピック参加選手の推薦については、2007年のソルトレークデフリンピック選手派遣の反省と教訓を活かし、スキー協会代表及び監督・スタッフと議論・協議を重ね、過去の成績や技術レベルだけではなく、夏季・冬季合宿や体力測定への積極的参加や選手個人の人間性・協調性等、技術レベル、身体レベル、精神レベル等総合的に判断し推薦させていただきました。

2. 今後の課題

ロシアデフリンピックでの成績を踏まえ、大変期待されての大会出場となりましたが、諸外国選手の技術レベルの向上や、出場国・出場選手増加など、力の及ばない状況は会場感じておりました。特に気になった点は、技術的な面ではなく精神的な面であり、会場の雰囲気緊張感が高まり、自らの技術を出し切ることができない状況が続きました。

大会会場となったサンタカテリーナは、聞こえる人のアルペンスキーワールドカップを開催する等、大変技術レベルの高いコース設定となっているだけではなく、3000m級の標高や人工降雪機による降雪とインジェクションによるアイスパック等、日本国内では例を見ない難易度となっており、各選手は大変緊張感のある毎日を過ごしたかと思っております。そのような中において、中村選手が3種目で入賞する結果を出したことは大変喜ばしいことでもあります

が、唯一の女子選手である吉田選手がGS競技において転倒・負傷したことは期待されていただけあり大変残念なことであります。

トレーナー 川崎 純

1. 自己の役割とその評価

今回、第19回冬季デフリンピック競技大会にアルペンスキーチームのトレーナーとして帯同するという貴重な機会を得たので報告する。今回の大会は12月開催であり、日本のスキーシーズンは始まったばかりの時期であり、雪上滑走感覚が整わない状態での大会となることが予想された。また会場となるサンタカテリーナのスキー場は3,000m級のスキー場であり、高山病の心配があった。そのため当チームは11月にオーストリアの3,000m級のスキー場で10日間の強化合宿を行い、雪上滑走感覚の調整と高地トレーニングを行った。残念ながら記録的な大雪によって雪崩が頻発したため、滑走日数は2日と少なくなりましたが、高地順応面ではレイクルーズ急性高山病スコアや血中酸素飽和度、心拍数などで改善がみられるなど一定の成果が得られた。

また当チームはデフリンピック開催1週間前に現地入りし、事前合宿を行った。イタリアと日本の時差は8時間あるが、時間的余裕をもって現地入りしたことと、持ち運びマットレスを導入したことによって、睡眠の質が向上し、時差症候群が大会前に改善されたと考える。さらに、眼精疲労を強く訴えていた選手に対して、眼周囲筋群に対する温熱マッサージ器を使用したことで、症状改善に加えて頸肩周囲筋痛、頭痛が改善され、快眠できたとのことであった。大会期間中は毎日の健康チェックシートを用いた健康管理、コンディショニング対応、体調不良・怪我対応、メンタルサポートなどを行った。ドーピングコントロールに関しては、全員が講習会受講者であり、国際大会参加経験者であるため、日本スポーツ協会のアンチ・ドーピング使用可能薬リストを選手達に配り、注意喚起のみ行った。メディカルスタッフ間でSNSを使った連絡網が構築されており、素早い情報共有が可能であった。今回、レース中に転倒して負傷した選手が居たが、SNSにより迅速な対応が出来たため、選手の不安も軽減されたのではないかと考える。

2. 今後の課題

オフトレーニングメニュー調査と負荷量についてのアドバイスは行っていた。しかし、申告している

内容と成果がかけ離れており、チェック方法を考え直す必要があると考える。また本大会は12月開催であり、滑走日数が少ない状態で大会に参加することは予想されていたことなので、サマーゲレンデでの滑走やインラインスケートといった、より滑走感覚を向上させる合宿や具体的練習方法などを提案出来たら良かったと考える。より効果的なトレーニングメニューや自主トレーニングを継続させる工夫、意識改革方法などを他チームのトレーナーと情報交換し、選手達に提供したい。

選手 中村晃大

1. 自己の役割とその評価

全種目で最低8位入賞、技術系（GS、SL）でメダル獲得が目標でした。

また、12月開催が決まった時点で、メダル獲得はもちろん、短期間の雪上練習の中で自らのベストな滑りを取り戻すことも意識していました。

2. 結果に対する評価

前半の高速系（DH～SG）は数年ぶりのぶっつけ本番ながらも、自分の中では落ち着いて滑ることができ、前回大会（ロシア大会）よりは順位も良いものでした。

特に日本で練習することができないDHのトレーニングランから始まり、滑るたびにコースプロフィールの学習、試合勘を取り戻すことができ、滑りもだんだんと良い手応えを感じていました。

SCでは「SG+SL」のはずが、急遽「DH+SL」と驚かされましたが、気持ちで入賞をもぎ取ることができ、後半の技術系にも弾みをつけられたと思います。

後半の技術系（GS、SL）では、自分の得意種目であるだけにどんどん攻めたのですが、いずれも2本目で転倒してしまい、とても悔しいレースでした。

また、前半と変わって、負傷者が出てしまうほどに非常に難しいコンディションの中でしたが、その時点で自分が持っている全てを出し切れたと同時にまだまだ実力不足、努力不足を感じたレースでした。

大会前は雪上練習が全くできていない状態で、現地入りしてから急ピッチで滑りを取り戻せるよう取り組んできましたが、夏場から滑り込んでいる海外勢には「滑走量」で大きな遅れがはっきりと目に見えていました。

「技術面」では日本勢も劣っていませんが、やはり夏場でも滑れるという練習環境の違いは大きく、夏場もっと雪上練習できる環境に身をおかないと

いけないということを痛感しました。

3. 今後の課題

前回大会に比べて、レベルがかなり高くなっていることを実感した今大会。また若手の台頭はもちろん中国、韓国から大勢の選手が出場しており、今後も更にレベルが高くなってくると予想しています。海外では「デフリンピック」の認知度が高くパラリンピックと合同で練習会などかなり進んでおり、今後も強化が進むと思われます。

特に、デフリンピックの認知度がかなり低い日本は若手の育成が進んでおらずこのままではさらに引き離されるだけなので、夏冬問わず、様々なフィールドでデフリンピック認知度向上に向けて動いていかなければと思います。また清水先生、砂川先生のような聞こえる人のハイレベルな大会での実務経験のある方のサポートも絶対的に必要であり、聞こえる人の客観的意見も取り入れた上でどんどん動いていかなければと思いました。

最後になりますが、夏冬デフリンピックの日本代表に選出していただき、ありがとうございます。両シーズンでの経験を伝えていけるよう今後も頑張っていきます。

またどこかで宜しくお願いします。

選手 北城 大地

1. 当初の目標（自己目標）

目標はメダル獲得です。

2. 結果に対する評価

SG、GS、SLの競技に出場し、SG21位、GS15位、SL16位という結果でした。

メダル獲得を目標に頑張りましたが、結果は厳しいものでした。

SGは、雪不足のため一度もポール練習をすることがないまま本番になったことでとても緊張しました。楽しんで滑るよう気持ちを高めて臨みました。

得意なGSは62人中の62番スタートで、スタートまで精神力を維持することが難しく、その中で15位は頑張った結果だったのではないかと思います。

SLは、堅いバーンの攻略に苦戦しました。練習不足で体がついていかず、上手く調整することができませんでした。

合宿や大会と長い期間、技術面・体力面・精神面、メンテナンスなど多くのスタッフの方々に支えていただきました。安心して競技に集中させていただいたことに感謝しています。

3. 今後の課題

大会の時期が早く雪が降らなかったことから雪上での練習がほとんどできないままの大会となりました。支えていただいた皆様に申し訳ない気持ちでいっぱいです。今後は早い時期から雪上でトレーニングができるよう練習環境の整備をしていきたいと思っています。

選手 吉田 絢音

1. 当初の目標（自己目標）

大回転・回転ともに入賞すること。

2. 結果に対する評価

競技中に怪我を負い、2種目とも棄権となりました。

今まで大きな怪我をしたことはなく、柔軟等怪我をしない体づくりにも気を付けていたにもかかわらず、このような結果になってしまい大変悔しいです。

ただ、転倒するまでは自分の中で過去最高の滑りをしました。怪我を負いましたが、後悔のない滑りができたと思います。

3. 今後の課題

右膝の前十字靭帯を断裂しており、手術リハビリに専念し、怪我をしっかりと治し、2021年1月には雪上でトレーニングができる体にしていきたいです。

加えて、怪我をしやすい滑り方の癖や、足の形等、今回のような怪我が起きないように、直せることは直し対策をすることが今後の課題です。

具体的には、専門知識のある病院の理学療法士にサポートしてもらいながら、リハビリや筋肉の強化をし、怪我をした時よりも格段にいい体を作り上げていきたいです。

精神面ではマイナス思考が目立ったので、少しずつプラス思考になれるように、日常生活から意識していきたいです。

アルペンスノーボード

監督 笠井 彰子

1. 選手・役員の選考基準・方法

① 選手の選考について

2018年12月26日に公表した第19回冬季デフリンピック（イタリア）アルペンスノーボード競技日本代表選手選考基準に沿って選考を行いました。両

基準を全てクリアした岡村大晃選手を日本ろう者スキー協会強化委員会に推薦、日本ろう者スキー協会内々定選手として2019年4月にデフリンピック派遣委員会に内々定選手名簿を提出しました。

【選考基準】

1. JSBAスノーボード全日本選手権大会
地区予選を突破し、本選出場を果たすこと
2. FIS全日本スキー選手権大会アルペンスノーボード競技
男子：決勝進出最下位選手（8位）のタイムの110%以内
女子：決勝進出最下位選手（8位）のタイムの115%以内

② 役員の選考について

2019年4月にチーム内強化会議においてチーム代表より第19回冬季デフリンピックアルペンスノーボードチーム監督を拝受し、早急に必要なデフリンピックスタッフの選考に入りました。日本代表選手団派遣団体である（一財）全日本ろうあ連盟の冬季デフリンピック日本選手団編成にかかる指針では選手1名の場合、公費派遣スタッフは2名迄であるため選定に苦労しました。ウィンタースポーツ競技の特性上、監督以外にコーチ、トレーナー、サービスマン、管理栄養士が欲しいところです。チームにデフリンピック派遣予算がなくコーチにサービスマンを兼務、私が管理栄養士を兼務することで、必要最小限のスタッフで陣容を固めることにしました。申し訳ないことに私は国際手話の経験がなくTD会議の場で困ることもあって、チーム代表にお願いして国際手話通訳者を特別スタッフとして帯同してもらうことにしました。こうして固まったスタッフ陣を日本ろう者スキー協会強化委員会に推薦、日本ろう者スキー協会を通して2019年4月にデフリンピック派遣委員会に内々定名簿を提出しました。

監督：笠井彰子

（アルペンスノーボード強化責任者）

コーチ：野藤優貴

（同チーム専属コーチ

元バンクーバー冬季オリンピック選手）

トレーナー：津賀裕喜

（同チーム専属ATトレーナー）

国際手話通訳者：高桐尊史

総評

●競技日程について

事前に公表されたアルペンスノーボード競技日にピーキングを合わせる目的で11月28日から10日間

の日程で現地近くのオーストリアでキャンプを張りました。キャンプでは体調管理と滑走フォームの最終調整を行いました。ところがキャンプ中に日本から緊急連絡があり、大会公式HPでアルペンスノーボード競技日程の大幅変更があったことを初めて知りました。急遽コーチに報告、情報集収集とトレーニングメニュー変更等の対応を行いました。開会式の翌日にPGS競技が始まり、休む間もなく次の日にPSL競技が行われる競技日程の変更でした。選手にも休養期間というものが必要であり、普通のオリンピック競技では到底考えられないことです。TD会議で変更理由を聞くと、スロープスタイル競技とビックエア競技のゲレンデの整備ができず車で離れた別会場で行われるため、役員、選手の移動を考慮しての競技日程を見直したとのことでした。アルペンスノーボード選手の立場から言うと、やはり選手ファーストの精神で、最初に決定した競技スケジュールでやっていただきたいと感じました。そういうこともあってコーチと相談した結果、開会式への参加をキャンセルし、翌日のPGS競技に専念することにしました。

●TD会議

冒頭でも申し上げましたが、恥ずかしいことに私は英語と国際手話が苦手なので、今回の国際手話通訳者の帯同は本当に助かりました。TD会議会場を見渡してみると、国際手話通訳者同伴の国は同じアジア圏の日本と韓国だけでした。中国は国際手話通訳者がいなかったの、TD会議でもうまく意思疎通ができていない場面が見られました。そういった国は国際手話通訳者が必要と感じました。余談になりますが、PSL競技の準々決勝で中国選手が現れず失格になったのは、TD会議での決定事項が監督を通して選手本人に上手く伝わらなかったのではと思います。

今回のTD会議で競技日程変更の理由、コースセッティング等々の質問を発言が認められない聞こえるコーチに代わって私が国際手話通訳者を介して質問等を行い、とてもスムーズに進行することができました。日本チームコーチが元オリンピック選手であることもTD会議の場でアピール、その実績を買われて日本選手に有利なコースセッティングを任されたのも非常に良かったと思います。そういった意味で、今回のTD会議では国際手話通訳者にとっても助けられました。

TD会議は基本的に国際手話が中心ですが、現場では国際手話通訳者を介して各国の手話に置き換えて伝達していく等、様々な国の手話表現があり、これがデフリンピックだなと感じました。やはり、私

としては次回デフリンピックまでに国際手話を覚えてTD会議内容のスムーズな把握、的確な質疑応答ができるようになりたいと思いました。

●PGS（パラレル大回転）競技

当日は朝から気温が低くコースはヨーロッパ特有の非常に硬いバーンとなりました。朝まで降っていた雪が次第に濃霧になり、競技開始近くなると視界が悪くなりコースが見えなくなるほどでした。

私は監督としてレース運びの様子や各国選手の滑り等をチェック、コーチに的確な情報を提供するためにゴールエリアで待機していましたが、その試合運びの様子や周りの観客の歡喜ぶり、各国の国旗がたなびく様子を見てみると私が金メダルを取得したソルトレイク冬季デフリンピック大会の思い出が一瞬よみがえりました。あれから12年経ち、そんなデフリンピックの感動を岡村選手に引き継いで良かったと思うこともありました。

スタート地点でこれまでになく緊張している冬季デフリンピック初出場の岡村選手に、コーチは緊張をほぐすかのように岡村選手に何かしらアドバイスを送っているのが見えました。いよいよ岡村選手のスタートとなりました。岡村選手は途中の緩斜面から急斜面に落ち込むところで強くエッジングをかけすぎたのか危うく転倒しそうになりましたが、何とか態勢を取り戻して完走、予選5位のタイムで決勝トーナメントに進むことができました。予選進出したのは、岡村選手を含めて殆どが10～20歳代の選手で、前回デフリンピックに引き続き今回のデフリンピックでも選手の若返りが急速に進んでいると感じました。予選時に比べて落ち着いてきた岡村選手は持ち前の力を発揮し、決勝トーナメントでも無事に勝ち上がり準々決勝にコマを進めましたが、準々決勝では強豪ロシア国のKHALADZHAN Eduard選手と対戦、あえなく敗戦となりました。

結果的に1～4位までがロシアが独占、岡村選手が5位になりました。後からコーチを通して知ったことですが、優勝したロシア選手は聞こえる選手に交じって練習、大会でもワールドカップクラスの大会に参戦しているとのことでした。

●PSL（パラレル回転）競技

当日の天気は前日と打って変わって晴天となり、前日まで硬かったバーンが気温の上昇とともに荒れたバーンとなり、競技が中盤に差し掛かるころにコースアウトしたり転倒したりする選手が続出しました。岡村選手は、前日のPGS競技の疲労感が残っていることから前夜のうちに津賀トレーナーにコンディショニングケアを依頼、そのおかげで万全の体調で

競技に挑むことができました。その甲斐もあって、スタート前の岡村選手は疲労感が少なくこれまで同様ベストを出せるように感じました。

しかし、ちょっと力みすぎたのか1本目の急斜面に差し掛かるところでターンミスを犯し、若干タイムロスとなりましたが、無事に予選5位で予選を通過しました。もう少しターンを縦長に攻めていればもっと上位に食い込めたと思いますが、ややターンが大きすぎたことが悔やまれました。

決勝トーナメントの初戦で岡村選手と対戦する予定であった中国選手が何かしらのハプニングで時刻になってもスタート地点に現れず、岡村選手の不戦勝となりました。不戦勝とはいえ、やはりスタートエリアで長時間待たされることは選手のストレス増につながると感じました。準々決勝でPGS競技と同じくロシア国のKHALADZHAN Eduard選手と対決することになり、岡村選手は敗れてしまいました。

PSL競技も岡村選手は5位入賞となりましたが、デフリンピック初出場でも金メダルを期待された同選手にとって、5位入賞は満足する成績でなくさぞかし悔しかったらと思います。それでも強豪ロシアチームに対して、一つもひるむことなくここまで正々堂々と戦えたことは監督として心から敬意を表したいと思います。

今回の冬季デフリンピックアルペンスノーボード競技は、PGS競技に続きPSL競技も1～4位までをロシアが独占、ロシアの圧倒的勝利に終わりました。これまでに日本の原田選手が築いてきた3大会連続金メダルの記録は今回で途絶えることになりましたが、今後からは強豪ロシアに挑戦、ロシアを追い形になります。打倒ロシアを目指すためには、これまで練習してきた硬いバーン、柔らかいバーン、そして緩斜面、急斜面のコースの攻め方を何度も繰り返し練習、常に安定したフォームを体に馴染ませることが必要です。そのためには雪上トレーニングだけでなくトレーナーが日頃から口酸っぱく言っているフィジカル強化も必要であり、今後4年間はフィジカル強化をテーマに強化活動を進めたいと思います。

今回の冬季デフリンピックに監督として参加してみて、若いロシアの選手が台頭、メダリストが聞こえる人でもトップクラス並みという滑りを目の当たりにして、今後は4、8年という長期スパンで若手選手の発掘、育成していかなければ、このままでは世界から遅れをとってしまう、そんな危機感をもって取り組んでいかなければと感じました。しかも台頭してきたロシアだけでなく今回初出場の中国も若手選手が急成長しています。

そんな中で、岡村選手にはオリンピック選手並み

に強化計画に沿ってフィジカル強化、技術力向上すると共にアスリートとしての心構えを高めなければ、次回冬季デフリンピックもメダル獲得は難しいと感じました。

最後になりましたが、まだ監督経験の浅い私に選手達をはじめコーチ、トレーナー、日本代表選手団本部スタッフの皆様にもいろいろと助けていただき、監督としての務めを無事に果たすことができました。これもひとえに、冬季デフリンピックのチーム監督という貴重な経験をさせて頂いた日本ろう者スキー協会の関係者のおかげです。

本当にありがとうございました。

コーチ 野藤 優貴

1. 自己の役割とその評価

雪上での滑走指導とボードの道具調整を行いました。

現地に入ってから情報は情報収集と他国とのコミュニケーションを図り、合同での練習を行いながら大会へ向けた調整を行いました。

イタリアのサンタカテリーナはスノーコンディション、天候共に安定していて、練習スケジュールの大幅な変更もなく、公式練習に取り組むことができました。

大会スケジュールの確認はできる限りの情報収集を素早く収集しました。大会スケジュールが大幅に変更されても、公式トレーニングの日数と選手の身体のコンディションとを相談し合いながら、大会への調整ができたのは、日々の海外合宿での体調確認やトレーナーの津賀氏とのコミュニケーションが十分にとれていたからです。

大会では選手は緊張をしていましたが、練習した滑りを大会でパフォーマンスとして実行するだけと伝えました。

スノーボードアルペンチームは公式練習の他に事前に欧州に入り、大会会場の雪質に似た場所での海外合宿で調整を行い、万全の準備だったので集中し十分な練習ができたと思います。

コースは私がこれまで経験した中でも非常に良いコンディションで、国際スキー連盟（FIS）のワールドカップなみのコンディションでした。

雪のコンディションがいいおかげで、大会への緊張も少し和らぎ、早くレースに挑みたいという気持ちが強くなるようなコース状況でした。

天候とコースコンディションが非常に良かったので、選手の滑りも非常に良く、選手だけのコースを楽しんでいるかのようでした。コースは緩斜面から

急斜面に落ち込み、少し左へ曲がりながら緩斜面に向かいゴールするというコースでした。

これまでの合宿で徹底的に指導した緩斜面におけるライン取りと身体の動き方、急斜面におけるライン取りと身体の動き方の斜度に合わせた動き方とラインを集中して指導しました。

普段の練習でも1本目と数本先のタイムが変わらないように、変わったとしてもアベレージタイムの前後1秒以内に着けるように練習を行っていますが、強敵であるロシア選手の胸をかりて、タイム差の比較も実際に数値で確認し、選手が持っている実力そのままの滑りが出ていると思います。

そして強敵ロシア選手たちとの交流や共に戦う者同士、同じコースで練習することでタイムの比べ合いや海外選手との交際交流も深めることができたのは、選手自身の緊張の緩和にも繋がっていました。

PGSレースでは非常に良い緊張と集中で選手は非常に良い滑りをしてくれました。

弱点だった1本目で選手がもう少し緊張から解放されている状況であれば、攻めの最高の滑りができていたと思いますし、決勝トーナメント一回戦から楽なレース展開になったのかもしれませんが。

これまで練習した成果を少しでも多く出せた選手、失敗の少なかった選手は勝ちあがり、今回5位だった岡村選手は滑るごとに気持ちや滑りが変化していくのが見ていて分かるくらい強い滑りをしてくれました。

岡村選手はメダルこそ逃しましたが、予選では強敵であるロシアの下に着いていく落ち着いたレース運びを行い、事前合宿もあったおかげで時差ぼけでの動きの鈍さもなく、ロシア選手たちと事前に公式トレーニングをしたことが大きな自信となり大会中の滑りにも現れていたと思います。

PSLレースでもメダルこそ逃したものの、力強い岡村選手の滑りは1本目から力を出し切って滑るという気持ちの現れが表現されている滑走でした。

メダル獲得はなりませんでしたが、今持っている最高の滑りをしたと感じるレースでした。

期間中に緊張感と調整をさらに高めることで、結果にも繋がると思います。

岡村選手は2戦を通じて、春から取り組んできた合宿で指導した滑りを実行してくれていました。

フィジカルトレーナー、監督と雪上や他ボードのメンテナンス時の連携だったり、指導面でも選手とコーチのコミュニケーションが取り易くスムーズだったと感じています。

レースではドクター、手話通訳者、他競技種目の選手達の応援もあり、選手も非常に気合いが入り熱いレースができたのではないかと思います。

チームを応援して下さった全ての方に感謝致します。

2. 今後の課題

強豪国との合同練習を行うことで、岡村選手の滑りの技術力向上を図っていくことと、各国が団結してコーチ陣、スタッフ、選手がコミュニケーションをとりながら、共にデフリンピックを盛り上げていくようなコミュニティーが必要と感じている。

野藤の役割としては、各コーチたちとのパイプ役となり、次回デフリンピックへ向けた各国合同合宿の予定を立てていく必要があると感じている。

選手は長いようで短い4年間の予定を明確にスケジュールリングし、合宿を取り入れるタイミングを逃さないようにするのが、今後の滑走での技術力向上に大きく躍進できるチャンスになると思っている。

アスレティックトレーナー 津賀 裕喜

1. 自己の役割とその評価

私の役割は大きく分けて2つある。①競技に良い状態で望み、パフォーマンスを最大限発揮すること、②何か事故・怪我等がおきてしまった場合に応急処置・救急処置を行い、速やかな復帰をサポートすること、以上の2点が中心である。

②については今回、選手がブーツ内で打撲が起きてしまったものを除き、事故怪我病気がなく、終わることができた。これは事前に選手に怪我・病気を予防するよう指導してきたため、何もなく済んだことに安堵している。打撲についてもRICE処置を中心に対応し、競技パフォーマンスには影響を与えていないと考えている。

①については体調や高地順化などを含めたコンディションチェック、ウォームアップ/ダウン、雪上での水分・捕食等栄養補給、競技待機時間のリ・ウォーミングアップと身体の使い方の修正エクササイズ、ホテルでの疲労回復に向けたアプローチ、大会期間の筋力・パワーなどの維持などを実施した。コンディションチェックは高地で、異国の食・睡眠等の特殊環境やデフリンピックという緊張状態が起こることなどを想定し、国内強化合宿や国内外大会の段階から選手のコンディションを把握し、異常を早期発見するとともに、選手に自分自身のコンディションを自覚・考えさせるよう指導してきた。記録は手書きのシートとGoogle Formを用いた入力方法を取り、帯同できない海外遠征等もあったため、最終的にはGoogle Formでの入力・集計・確認を行った。選手本人に病気や筋肉等のコンディション不良

を自ら報告する習慣が最終的に身につけられており、非常に円滑だった。ウォーミングアップ/ダウンもこの4年間、一貫したもので取り組み、選手の能力向上に伴い、アップデートしながら実施した。そのため、選手自身にしっかりとルーティンが確立できていると、コンディションチェックと合わせて自身の調子を把握しながら現地で追加・修正を行って大会へ調整を合わせていった。水分補給・捕食管理としては、選手自身では水分補給をおろそかにしやすいため、スポーツドリンクの確保と競技インターバルに補給することをトレーナーから促した。また、ノックダウンに進出することで競技実施時間が長くなりやすい。そのため、吸収効率の良いゼリー系・エナジーバー系のものを国内外大会で事前に試し、デフリンピックで選手の好みに応じた補食を、適切なタイミングで補給させた。また、競技終了後・練習終了後も速やかな疲労回復のためにサプリメント等でサポートした。アルペンスノーボードは天候や前後の選手の影響でスタートエリアでの待機時間が長くなりやすい。過去の大会でいくつか選手に身体を温め直すためにリ・ウォーミングアップや競技中のフォームをコーチと修正するために、身体の使い方の修正エクササイズを実施した。今回の選手はあまり待機中に運動することを好まないタイプの選手であったため、必要最低限に留めたが、ベストな結果が出るよう、提案を続けた。ホテルでは選手の疲労回復のために有酸素運動やストレッチングの指導、セルフマッサージ等を4年間を通じて一貫して指導を続けてきた。選手自身で身体や疲労と向き合い、それが結果的にパフォーマンスにつながるため、トレーナーに依存しない選手育成を行ってきた。デフリンピック期間中に関してはその疲労回復の補助として、選手の要望・疲労感などを聴取した上でストレッチングや筋膜リリース等疲労回復を促す手法をトレーナーからアプローチした。そして、デフリンピック開催地に入ると練習時間の制限やトレーニング環境の制限を受けやすく、筋力やパワーが低下してしまうケースもある。今回は入国から大会開催まで少々時間があつたため、筋力等が低下しないようトレーニングを実施して身体能力の保持に務めた。

結果的にメダルには届かなかったが、選手は非常に高いパフォーマンスを発揮したと思う。これといってパフォーマンスを阻害するような事故事案等なく、円滑に大会へ入ることができていた。また選手指導を続けていたため、選手自身の成長もあり、身体・コンディションについてもコーチ・選手・トレーナーで話を進められていた。

2. 今後の課題

まず、メダルに届かなかったという、今回の結果

をみると、さらなるパフォーマンス向上が必要かと思う。4年前のロシア大会も帯同したが、上位選手のパフォーマンスは前回大会と比較にならないほど高い。コーチとの意見交換でも、上位の選手は聞こえる人のヨーロッパカップ出場レベルはあると考えている。今回メダルを取得した選手から話を聞いても、「聞こえる人にまだ追いつかない・勝てない」といった発言があった。上位選手の目指しているレベルが聞こえる人と戦える、競い合うレベルであることが伺えた。このことから、今後デフリンピックでメダルを目指すためには、聴覚障害者のコミュニティ内で競い合うだけでは不十分で、聞こえる人の世界に身を置き、障害の有無に関わらず切磋琢磨しあいながら競技力を向上させる必要がある。

今回の大会で聴覚障害者のみの切磋琢磨では不十分であることを強く感じた。ろうあ連盟、ろう者スキー協会の運営が多忙であることは十分承知するが、世界トップレベルを目指すには聞こえる人と合同で、競い合う環境づくりが必要だ。ろう者サッカー協会が障がい者サッカー団体と連携し、日本サッカー協会からサポートを受ける形で運営を始めている。健常者の競技団体と連携して、障害の有無にかかわらず、選手強化を進めて行く必要があると感じた。

トレーナーとしての視点で考えても、聞こえる人のトップアスリートと同レベルの能力を目指していかなければならないと感じる。そのために必要だと感じるのは、トレーニング、フィジカル強化に対する取り組みを相当なレベルで改善しなければならない。誤解を恐れずに書くが、聴覚障害アスリート全体を見ても、総じてフィジカル強化に対する意識が非常に低いコミュニティであると感じている。このままの環境ではフィジカル強化に対する意識が周囲に流されやすく、今後の選手たちもそれで正解だと思いついてしまう可能性が高い。そうではなく、聞こえる人のコミュニティに入っていく、行動を変えなければならないと感じる。聞こえる人と競い、勝つレベルの能力を目指さなければならない。そのためには聴覚障害者のみのコミュニティではなく、より高いレベルで競い合う環境が必要である。

私が各国の選手を見る限り、そこまでフィジカル強化に本腰を入れている国はまだないと思う。各国のスタッフにトレーナーがまだ少なく、選手の体つきを見ても、聞こえる人との差は明らかだ。だからこそ、日本がデフリンピックでメダル獲得を今後目指すのであれば、世界各国のデフアスリートがまだ取り組んでいない、フィジカル強化を本気で、どこよりも先取りして取り組むことが日本のストロングポイントになるのではないかと感じる。聞こえる人のナショ

ナルチーム代表を凌駕するレベルのフィジカルを目指し、次のデフリンピックで世界を置き去りにするような強化を本気でして行く覚悟が必要だと感じる。

国際手話通訳 高桐 尊史

1. 自己の役割とその評価

アルペンスノーボード (SB) とスノーボードフリースタイル (SFB) とアルペンスキー (AS)、3チームの国際手話通訳担当の予定でしたが、現場でアルペンスキーチームの通訳同行は必要ありませんでした。

国際手話通訳の行動日程は

12月10日 SB&SFBのTDミーティング、サンタカテリーナ委員会に質問

12月11日 サンタカテリーナ委員会に交渉

12月12日 開会式

12月13日 SB&SFBのTDミーティング

12月14日 SFBのTDミーティング

12月15日 サンタカテリーナ委員会に質問

12月16日 SFBのクロス戦でスタートエリア

12月17日 SFBのTDミーティング

12月18日 SFBのスロープスタイル戦スタートエリア

緊急対応、授賞式、実行委員との問い合わせ

12月19日 SFBのビッグエア戦のスタートエリア、授賞式

12月20日 実行委員との確認の打合せ、案内説明
今回の冬季デフリンピックには、スタッフとして参加は初体験なので、スキーやスノーボードの専門用語やルールなどの知識はほとんどゼロに近いので、出発前にインターネットでいろいろ調べました。ミーティングから競技までの流れの動きを初めて知り、いい体験になったと思っています。

高桐はスキーとスノーボードの経験がないので、万が一スタートエリアからゴールエリアに移動する必要があった場合は、スキーかスノーボードを利用する必要があるのではないかと、自分も経験しなければと思いました。

ミーティング時、ある実行委員が国際手話担当ですが、イタリア手話が時々あったので通訳は苦労しました。

サンタカテリーナのホテルは、事務所が近くで時々質問や問い合わせに行きやすかったですし、ヴァルマレンコのホテルは、たまたま実行委員の方々と同じところなので時々問い合わせもやりやすかったことで助かりました。

現場では国際手話通訳がつく国は、日本と韓国のみとみています。選手の方々のために国際手話通訳がいれば、選手はその種目を集中できるのではないかと考えています。

2. 今後の課題

デフリンピックは国々によって情報の仕方が異なると思います。イタリアの文化なのでしょう。時間などの情報ははっきりしないことが多くて、監督やコーチに不安に与えてしまうのできちんと実行委員の事務所内に目で見える情報（張り紙やメールやインターネット等）があってほしいと思います。

TDミーティングや授賞式時、国際手話を読み取ってコーチ（聞こえる人）に音声で伝えたことがありましたので今後国際手話通訳が必要だと思っています。もちろんろう者にも日本の手話で伝えました。それからミーティングの進行は、質問や意見などが被っている場面が多くて通訳するのは難しかったので、今後はもしそうなったら進行担当に前もってはっきりと注意を言うべきではないかと思っています。

緊急時や抗議時など起こったらと思うと、国際手話通訳が必要かと思っています。

通訳者はスキーの関する専門用語の手話表現を確認するための打合せがあるといいと思います。

選手 岡村 大晃

1. 当初の目標（自己目標）

私は、小さい時からデフリンピック三連覇という偉大な記録を持つ原田上さんの背中を追って一生懸命に練習して来ました。小学6年生の時に、みんなの前で「私は、冬季デフリンピックで原田上さんのように金メダルを獲得します！」と言ったことを覚えています。その時から、今回のデフリンピックに向けて本格的な練習を始めましたが、まだまだ原田上さんと同じくらいのレベルまで成長することが出来なかったと思います。なので、今回のデフリンピックでは、とにかく7年間練習してきたことを無駄せずに全力を発揮しようと思い、レースに参戦しました。

2. 結果に対する評価

パラレル回転とパラレル大回転に参戦しましたが、結果は共に5位入賞となりました。今回のデフリンピックは、今までより選手人口が多く、レベルが高くなり、ワールドカップのレベルと同じくらいといわれています。そんな中、5位という上位成績を獲得することが出来たので、個人的には良かった

です。しかし、私は、メダルを獲得できると自信があったので悔しかったです。大きな舞台で自分の実力は、まだまだ足りないと感じました。

3. 今後の課題

今回のデフリンピックを通して、いくつかの課題を見つけることが出来ました。これらの課題を解決するために、大会の経験値や練習量、気持ちが大切だと改めて実感することが出来ました。来年から、国内だけでなく海外大会やプロ戦に参戦する予定です。一つ一つの大会を大切に、自分の課題を少しずつ解決して行くように努めたいと思っています。次回のデフリンピックでメダルを獲得できるように今から懸命に頑張っていきます。

スノーボードフリースタイル

ヘッドコーチ 小島 敬雄

1. 選手・役員の選考基準・方法

選手選考の最も重要視した基準は日本国内にて開催された各選考基準大会の結果を主に反映することを基本といたしました。

ボーダークロス、スロープスタイル、ビッグエアーの各合宿ともに、各選手のメダル獲得への意識、意欲、練習への取組み姿勢、練習内容のレベル、完成度も吟味し、大会成績を重視しながらも全体的にメダル獲得の可能性を考慮し選考いたしました。

ボーダークロス競技におきましては合宿開催時にボーダークロスコースを実際に利用し、模擬レースを2月17日新潟県かぐらスキー場、3月9日長野県車山スキー場にて2回開催いたしました。選考基準大会の成績とともに模擬レースの結果も各選手の技術レベルを確認することを目的として反映し選考いたしました。

コーチ、トレーナーの選考につきましては、参加種目の変更に伴い、限られた時間の中で最大限の成果が出せるように、コーチ、トレーナー陣が連携、情報共有をして合宿に臨める体制を構築し、合宿参加への回数、LINEグループでのアドバイス、情報共有への積極的な参加を主に、日々の合宿でのコミュニケーション能力、選手のモチベーション、技術力向上へのコミット、選手からの信頼度の高い者から選出いたしました。

2. 総評

私はデフリンピック、デフスポーツの環境への参

加は初めてとなります。

貴重な体験、経験をさせていただきました。また、この経験をデフスポーツの繁栄、認知度アップに貢献、次世代の選手、役員へしっかりと引き継いでいきたいと思っております。

参加種目の変更があり、前回ロシア大会以降の競技レベル、競技環境の情報が乏しい中、チームとして選手達のモチベーションをしっかりと維持し続けることができ、良いチーム環境、運営が整えることができたかと思えます。

結果的には惜しくもメダル獲得はならず、男女ともに入賞のみとなってしまいました。この結果を受け今後チームに必要な要素、想定技術がはっきりと分かりました。

特にスロープスタイル、ビッグエアー競技に関しましては、想定していた競技レベルより1トリック高いレベルの大会となりました。男女ともにロシアチームの新たに加わった若手選手達が想定していたレベルを押し上げていました。ただ日本チームも1年程の準備期間に準備していたトリック、ルーティーンは90%出しきれましたが、もう少し適応力を上げて、準備していたトリックを100%出しきれれば、今回大会でもメダル獲得ができたと確信しています。また今回イタリア大会を経験させていただいたので、次回大会への日本チームがメダル獲得へ向けて必要なトリック、練習の予想がしやすくなり、次回大会へ必要なメニュー、要素をスタッフ、選手達と共有して練習していきたいと思えます。

イタリア大会運営は通常FIS大会運営とはかなり違う運営方法だったことは報告、情報共有しておくべきことです。ボーダークロス、スロープスタイル、ビッグエアーともに公開練習、TDミーティング等のスケジュールが直前で変更されることが多く、その変更のアナウンスもない状況があったほどです。変更が多く、夜に翌日のスケジュールを確認、チームへ連絡、共有することとなり、スタッフはもちろん、選手は精神的に疲弊が多かったと思えます。スロープスタイル、ビッグエアーの会場も当初予定のボーダークロス競技と同じスキー場から車で3時間程のスキー場へ変更となり、ボーダークロス競技終了後にバスにて移動となりました。

幸いなことに宿泊先のホテルの方々の対応が素晴らしく、食事の時間変更や、ワックスルームの使用などスムーズに対応していただけ、過ごしやすい環境を提供していただき、練習やコンディショニングの後にリラクセスする時間が整えられました。会場の変更など大会運営についてチームではどうしようもない事項が発生することがあること、その際にチーム、選手の負担や不安が少しでも解消できるよ

うに、宿泊先、食事、トレーニング、ワックス、リラクセス等の必要な活動ができる状況の準備、事前情報を確保し、チーム、選手へ伝達しておくことがとても重要だと痛感いたしました。しっかり情報を獲得、伝達できることのでかなりの不安、ストレスが軽減できるかと思えます。

また情報の伝達方法が曖昧なため、公開練習コースに到着してから変更が伝えられたり、大会本戦中のエントリーリスト、出走順、タイムテーブルなどの掲示がないことで、出場選手の招集など、時間調整に無駄が多く選手へストレスが掛かってしまう状態でした。基本的な大会運営のことですが、事前のTDミーティング等にて情報の伝達方法、ノーティスボードの掲示場所など確認、要望すること、大会スケジュールなどの情報をどこで、誰に確認できるかをチーム、本部と協力しながら速やかに確認し、安心して競技へ集中できるようにすることも重要です。選手へのストレスを軽減させることが必要なことと、大会へ向けての調整がしっかりとできる環境が必要だと痛感いたしました。

ここまでは大会全体にて確認、準備していくべき事柄をまとめて記載いたしました。ここからは各種目別に記載していきたいと思えます。

ボーダークロス競技：

サンタカテリーナ会場 山頂付近の標高2500m付近にて開催。日当たりはよく、気温は-10℃以下が多い。コース斜度は緩く、起伏もあまりない平坦かつ、横幅も細く直線的なコース。ボードの走り具合を左右するワックスの選択、体重差が影響しやすいコースでした。前回ロシア大会やFIS大会のコースに比べ、コースにバンク等のターンセクションが少なく、ウェーブ、ジャンプのセクションも高低差が少なくテクニクというよりいかに減速が少ないかの勝負となりやすい体格の小さい選手には不利なコースかと思えました。

今後もこのようなコースがあるかもしれないと想定すると、ターンやパンピングの技術とシームレスに直線トップスピードを上げていける技術、加速をスムーズに得れる技術が必要になります。そのためには全選手においてさらにフィジカルを強化する必要があります。チェコやロシアなど体格の大きな選手との競技となるので直線的なスピードアップ、今回は少なかったですがバンク、ターンセクションでのぶつかり合いにも負けないフィジカルが必要です。現地にてトレーナーとも意見交換をしましたが、当たりにも負けない、効率よく加速するために足腰の筋力強化と柔軟性のアップが必須なることを確認いたしました。身長、体格では負けてしまってい

でも、強い足腰での加速、低い重心での当たりへの強化をすることで、体格の大きな海外選手にも負けない対策を選手、スタッフ、チーム全員で確認、認識して今後の練習に反映していき、メダル獲得へ躍進したいと思います。

スロープスタイル競技：

ヴァルマレンコ会場 標高2000m付近にて開催。気温は基本マイナスですが、大会当日の朝、午前を中心に雨に近いみぞれが降り、コースが緩んだ。公開練習、大会を通して風は弱く、競技しやすい環境でした。

コースは上から、

1. フラットダウンのボックス or レール
2. 2ウェイジャンプ（3m、8m 翌日ビッグエア競技にて使用）
3. 9mジャンプ
4. 正面バンクレール

の4セクション。コース難易度的にはFIS大会よりかなりサイズダウンした、JSBA中部地区大会レベルのコース。国内で経験してきたレベルのコース難易度でしたので、ルーティーンの組み方などイメージしやすい状況でした。公開練習は前日のみと日数を少なかったですが、時間を多めに確保し、変更なく開催していただけました。ただチームとしては前日までのスケジュール変更が多く、スロープスタイル公開練習も急に短縮されてしまうのではないかと考えてしまっている選手、スタッフも多く、今思えば、やや焦りがありながら公開練習をしている雰囲気が少しあったかと思います。実際に花島大輔選手が公開練習中盤で自身の得意技で足首を負傷してしまった状況も、通常の合宿や大会ではコーチが促していったからトリックに挑戦、調整するタイプの選手であるのに関わらず、デフリンピックへ挑戦している気持ちや焦りもあったのか、コーチとしてはもう少しジャンプの形状に慣れてほしいと思っているタイミングで、いきなり得意技の調整をしてしまいました。怪我の処置時に状況や心境を確認したところ、やはり公開練習が予定より早く終わってしまい、得意技の調整ができない状態は翌日の大会本番へ不安が残ると話されていました。焦りのある心境へ干渉できずにコーチ、スタッフとしても後悔がのこります。公開練習ですべき調整、タイムスケジュールをチームとしてもっと確実に認知してもらい、各選手が時間的な焦りや不安がないように運営側にスケジュールの確認をもっとまめにしていくことも、こういう状況でしたので必要だったかと思います。

また選手の怪我の際に帯同ドクターができるだけ滑走用具が使用できかつ、怪我の現場へ速やかに移

動できる状態であることを望みます。今回のスロープスタイル、ビッグエア会場がチーム本部の拠点から車で2時間以上離れていることもあり、イレギュラーなことかと思いますが、ドクターができるだけ早くに受傷してしまった選手の様子を見に行けるような体制があるだけで選手の安心感もかなり違ってくると思います。

大会本番は運営もスムーズに執り行われていましたが、通常のFIS大会では各選手の滑走後に、滑走した選手の得点が表示されてから、次の選手がスタートしますが、今大会では得点表示がありませんでした。念の為コーチは日本のジャッジ資格を保有していましたが、採点ステノを独自記載、保管し、大会終了後にジャッジ、運営役員に採点方法がFISに準拠しているか確認をいたしました。

大会のレベル、トリックレベルでは日本チームも劣らずメダルに手が届く実感がありましたが、もう一步、きっちり決めきれずに完成度、高さが足りていなかったかと思います。奥田恵理子選手は最後のセクションにて怪我で棄権となってしまいましたが、3番目のセクションまで高さ、完成度のある演技で高得点を期待できただけに、悔やまれます。ロシアチームの若手選手のレベルが高く、次回デフリンピックではさらにレベルアップしているかと思えますので、日本チームももう1ランク上のトリック、完成度、コースへの対応力、怪我を防ぐ為にもフィジカル強化が必要となります。通常合宿の際にも技術への練習+フィジカルトレーニングの時間を毎回作るようにしていきたいと思えます。またイタリア大会に於いては、日本の冬でもあまり経験のない-10~-20度の雪上環境の経験がもっと必要だと痛感いたしました。

ビッグエア競技：

ヴァルマレンコ会場 スロープスタイル競技コースのジャンプを利用したビッグエア開催。ジャンプは2ウェイキッカー、サイズは8mアップ、3mストレートの国内大会の半分以下のサイズのジャンプ台での開催でした。女子の参加選手は全員3mの小さいジャンプ台での競技となりました。男子は90%が8mのジャンプ台での競技となりました。FIS大会のジャンプサイズでの大会開催は参加選手のレベル的に危険すぎるサイズになってしまうので、適したジャンプサイズかと思えます。

スロープスタイルのジャッジに関して不安感が残った為、大会開始前に運営側にジャッジ基準、ジャッジ陣の紹介をしていただき挨拶をしました。挨拶しながらジャッジについて意見交換、確認をさせていただきました。通常のFIS大会であれば、

前日のTDミーティングにおいてジャッジの紹介、ジャッジ基準の確認が行われますが、今回は行われませんでした。ビッグエア競技も滑走後の得点表示はありませんでした。あり得ないことですが、表彰式が終了後（1、2、3位全員ロシア選手）に3位のロシア選手の完成度が低かったと4位のアメリカチームから撮影したビデオとともにクレームが入り、3位のロシア選手が5位まで下がり、4位のアメリカ選手が3位となりメダル獲得、表彰式をやり直す！！??事態が発生しました。今後も起こり得るとしたら、日本チームとしても準備が必要になるかもしれません。今大会でもビデオなど準備はしましたが、日本選手の順位は妥当なジャッジでした。

競技レベル、トリックレベルは男女ともにメダル獲得圏内に入るレベルでしたが、スロープスタイル同様に完成度、高さが不足していたと思います。特に見栄えのある高さ、着地の完成度を上げていかなければいけません。今後もジャッジの得点を伸ばす為には、現状のトリックの完成度を上げ、もう1トリック上のトリックの取得が必要です。自分の得意技をどんなジャンプ台でもできるように、現状の得意技をさらに難易度を上げていく練習が必要でしょう。ボーダークロス、スロープスタイル、ビッグエアとレベルアップ、怪我のリスク回避のためにもフィジカルを鍛え上げることも今後のトレーニングの主にしていきたいと思っています。

コーチ 南雲 利仁

1. 自己の役割とその評価

今回のデフリンピックでの役割としては、選手らのライディングに関してのアドバイスとワックスサポートになります。また、種目に応じての戦略を立て上位入賞・メダル獲得に主眼をおきました。3種目と言うことでボーダークロスにおいてのワックスの重要性、スロープスタイル・ビッグエアの技の難易度について選手らが出来た事は元より、メダルを獲得するにはリスクと隣り合わせになることを感じました。メダルに重きを置く場合は選手らのパフォーマンス+ α 、どこまで自分を追い込んでリスクと向かい合い、演技が出来ると言う究極の場に選手らは置かれています。その究極の場に置いて選手らのパフォーマンスを「最大限」に引き出すことが我々コーチ陣の役割です。

評価としては、日本選手団は最大限のパフォーマンスを行なった上での順位だと思っています。良くリスクを恐れずに頑張ったと思っています。

2. 今後の課題

今後についてはコーチ陣とも話し合い、世界のレベルが上がっている事、フィジカルの強さ、メンタルの強さ、低年齢化が進んでいることを目の当たりにし、更なる日本選手団の強化を行うことが必須だと感じました。今までの練習方法+ α 、フィジカルトレーナー・メンタルトレーナーなどオリンピック同様に環境を整備し、強い日本選手団へと変貌ができる様にプログラムの改善が必要と感じました。

トレーナースタッフ 大橋 一麻

1. 自己の役割とその評価

1) 役割

選手のコンディショニング維持・向上

(ケア、トレーニング、体調管理、テーピングサポート)

2) 評価

複数の選手が大会前の疲労等により痛みを抱えている選手もあり、ケアを中心にトレーニングサポートを実施。イタリア到着後は身体の疲労改善、大会へ向けて動きやすい身体作りを調整しセルフコンディショニングを始め、夕方、夜はケアを行った。選手のニーズに合わせて、一人当たり40分～1時間のケア、トレーニングを行い、大会へ向けてコンディションを持っていくことは出来たと思う。しかし、ケアの時間等が長くなると、睡眠時間の調整が必要になるため、時間調整を行い、時間の効率化を図った。

これらをはじめから導入し、選手の睡眠時間を調整する事が早い段階から必要であったと感じた。痛みを訴えている選手に対して翌日には痛みの軽減、運動でき、練習中気にならないレベルまで持っていくことができ、選手から安心して練習できるという言葉がもたらえたこと、状態を良い方向へもっていくことが出来たことは大変良かった。今後はセルフコンディショニングをより充実させ、普段の練習、大会からもっと高い意識で自身の身体に向き合う環境、年間を通して選手とのコミュニケーションを一人ひとり取っていくことが重要であると感じた。

全体として、選手のニーズへの対応だけでなく、トレーナーとしてピークの作り方、痛み対しての可能性や改善など安心感を持って大会に挑めたと思う。

2. 今後の課題

今後の課題は大きく5つあります。

・フィジカルトレーニングの強化

過去に大きな怪我をしている選手も多く、年齢層も高い。怪我のリスクが非常に高い状態であり、各

関節周囲の筋肉や靭帯、軟部組織が弱まり、強い衝撃に耐えられない可能性がある。一方海外選手は骨格の違いもあるが、踏ん張るといふ動作、衝撃に対してフィジカル面がとても強く、同じ転び方をして、怪我をするかしないかという違いが出てきている。技術と合わせ身体の強化が今後必要になってくる。

・多方向への運動性強化

トランポリンやスケートボードなど非現実的動作を多く取り入れ、自身の感覚、身体の体性感覚を磨く。中国などはスノーボード歴6ヶ月や3ヶ月など短い選手も多いが体性感覚が鋭く（少林寺や体操をやっている選手が多い）、板に乗って短い期間ながら中には上位に来ている選手もいる。このような感覚は日本人は乏しいため、怪我のリスクは高い動作であるが、メダルを取る為には必要であると感じた。

・自己管理

選手としての自己管理（体重管理を中心としたコンディショニング管理）がもっと必要になると感じた。体脂肪増加に伴い動作制限なども考えられ、体重が重くなると身体への負荷も増加する。技術面を向上するうえでも、技術面同様、選手全体に必要であると感じた。最終的にパフォーマンスアップ、怪我のリスク低下に繋がる点である。

・意識

先ほどあげた自己管理を含め、技術トレーニング中の意識を変えていく必要があると感じた。コーチのアドバイスだけでなく、選手一人ひとり、なぜできないのか、なぜ出来るのかを自問自答する意識がより必要であると感じた。どこをどのように修正したら改善されるのかという考え・意識がもっと選手自身もてるように指導、向上していけるよう、選手、私も含め関わり方に変化をつけたほうが良いと感じた。

・競争力（環境）

向上心を育み、意識を高める為にデフリンピックへの参加条件の見直し、日頃の取り組み（成長率や合宿参加状況）、大会成績、自己管理など、多方面から評価し、選手の本気度、競争心のある中で挑める環境を整える。

選手 奥田 和夫

1. 当初の目標（自己目標）

- スノーボードクロス 3位以内
- スノーボードスロープスタイル 入賞以上
- スノーボードビッグエア 3位以内

2. 結果に対する評価

●スノーボードクロス 9位（27人中）

目標が達成できず、惜敗でメチャクチャ悔しい！！

最初のコースタイム計測で44.99

トーナメント式の準々決勝で、コースタイム計測で1位39台突破した3連覇金メダリストのチェコのTomasさんと同組。同組2位以上に入らないと準決勝へ勝ち上がれないルールなので、スタートが鍵となり、スタートを決められないと相手のミスを待つだけで終わってしまうレースになるので、かなり緊張しました。

予定通り、出だしは3位スタートになりました。作戦通り、パンピングの技術で2位の選手を追い抜こうと思っていましたが、最初のS字ターンで相手に読まれて失速し、3位のままゴールとなりました。

もう少し、相手にこちら側の作戦を読まれたときに攻める術を身につけなければ、と思いながらあっという間にレースが終わってしまいました。

ヘッドコーチと相談し本番までに限られた時間を有効活用するために本格的なスノーボードクロス用の板を使わず（買わず）に慣れ親しんでいるオールランド用の板を使ってレース参戦にしました。

●スノーボードスロープスタイル 8位（14人中）

目標をギリギリでクリアした。それも実力。

100%のルーティンを出れたとしても、6位以下と思われます。

ルーティンのコースは上からだど、

1. フラットダウンのボックス or レール
2. 2ウェイジャンプ（3m、8m）
3. 9mジャンプ
4. 正面バンクレール の4セクションあり。

2018年12月末に突然今回の冬季デフリンピック競技種目からハーフパイプ種目が正式に外れることを告知があり、初めて心が折れた。心が折れた時にやることは色々あるが、限られた残りの時間でどのように練習を取り組めば良いか？1番不安が大きかった。

職場・家族の力を借りて、勝負をかけるため、2018年12月末から毎週土曜日の日中（4～5時間程度）と平日の夜練を2時間程度を1～2回行いました。

僅か1年間だけで身につけた技量を雪上実戦・経験／対応・プレッシャーなどのコントロールを上手く出来たのは、これまでに磨いてきたハーフパイプの技術を活かすことができたからです。

自分の弱みはJIB関連のトリック技量がまだ少ない方で、大会のルーティンは最初のレールに通れないと次の8mジャンプもメイク出来なくなります。

そのルーティンは高得点が出やすくなる結果からリザルトに現れます。もう少し練習する時間が欲しかったと思いますが、いい経験でした。

●スノーボードビッグエア 棄権

誠に申し訳ございません。

3. 今後の課題

●スノーボードクロス

本格的にスノーボードクロス用の板に慣れ親しんでいく重要性がありますので、メーカー探し、試乗などを検討したい。

オリンピックの有力選手は体重が90キロほどあり、若い選手をタレント発掘育成事業を使って探したい。

●演技に関する競技（スノーボードスロープスタイル、スノーボードビッグエア、ハーフパイプ）は若い選手を中心に育成したいのと怪我リスクを低減するためにはフィジカルトレーニングなどのメニューを強化練習に導入することを検討したい。

選手 花島 大輔

1. 当初の目標（自己目標）

スノーボードクロス、スロープスタイル、ビッグエアの3種目ともメダル獲得

2. 結果に対する評価

*スノーボードクロス 11位

初戦は3人中2位。2戦目は4人中3位。

初戦前のタイム計測結果で11位。

国内の大会はテクニカルなコースがほとんどで中盤や終盤でも抜きどころはあるのだが、今回のデフリンピックのコースはほぼ真っ直ぐなコースで初盤で順位がほぼ決まってしまう、抜きどころがほとんどなかった。

アップダウンでスノーボードを加速させたり、複雑な地形でも減速せず曲がったり、安定してジャンプする技術には自信があったのでその技術を発揮できなくて残念である。

*スロープスタイル 12位

2018年12月に突然のハーフパイプ中止を知り、2019年1月よりスロープスタイルに転向した。

国内でオフシーズンでもトレーニングできる人工芝のジャンプ練習施設やジブ練習施設でトレーニングしたが、日本代表選手内定後から今回のデフリンピックまでの間に雪山での練習ができなかったため、雪山で実戦に近い感覚を掴めなかった。

そのことが影響して私自身の公開練習での怪我に

繋がったのではないかと少なからず感じている。

*ビッグエア 棄権

3. 今後の課題

*スノーボードクロス

今回の参加選手が高性能な専用スノーボードだったので同じように高性能の専用スノーボードに変えて、性能を活かせるよう下半身の強化に努めながら滑りこなさなければならない。

*スロープスタイル、ビッグエア

今後は人工芝での滑走トレーニングに加え、雪山で実戦を想定した練習を多く取り入れなければならない。

選手 小野田 瑛次

1. 当初の目標（自己目標）

スノーボードクロス大会で入賞すること。

スロープスタイル大会で3位以内に入ること。

ビッグエア大会も同じく3位以内に入ること。

2. 結果に対する評価

スノーボードクロスのコースのキッカーは低く、ライナー系でジャンプしたらまくられやすくて苦戦しました。転倒せずにゴールはできましたが、1回戦で最下位になりました。今まで、国内のJSBA大会でのコースは低いライナー系キッカーが無くてバンクとウェーブのみでした。あとはスタートからゴールまでにカービングターンとパンピングに集中するのに足りない部分がありました。

スロープスタイル大会前日の公開練習で今シーズンのスノーパークで初めて入ったばかりなので、色々な技を試してみましたが何回も倒れました。

公開練習が終わる前に難易度を下げてメイク率を上げました。

スロープスタイルの結果はトリックを決めたが5位になりました。その次の日は気温下がって雪質が固くなり滑る感覚が変わってきてビッグエアのキッカーでジャンプするのが難しかったです。

本番で3本ジャンプして上手く着地できずビッグエアでは6位になりました。周りの選手を見たら、やっぱり基本練習がとても大事だなと痛感しました。

3. 今後の課題

スノーボードクロスのFIS大会は低いライナー系のキッカーがあるので経験するべきです。

残念ですが、スノーボードクロスよりスロープスタイルとビッグエアの方が得意なので練習する時間

を考慮し、スノーボードクロスはやめて、2種目に絞ることにしました。

スロープスタイルとビッグエアのビッグキッカーは最初から基本練習のストレートジャンプします。

最近、地球温暖化進行していて雪不足状態ですが、ビッグキッカーの代わりにスモールキッカーで時間の無駄にならないように切磋琢磨していくしかありません。

選手 岡本 信彦

1. 当初の目標（自己目標）

メダル目標です。最低でも入賞すること。

2. 結果に対する評価

FIS公認のクロスと思って期待していたが、予想以外に直行気味なコースでした。公開練習の終わる時間の30分ほど前に左肩を脱臼しました。原因はスタートの時でした。でも次の日の大会があるので、チームトレーナーに左肩をテープで固定してもらい、思い通り試合に臨むことができました。でも体重差によって負けました。

3. 今後の課題

クロス大会にたくさん参戦したり、クロスのアイテム（ウェーブやキッカー）に対してどんなフォームで対応するか？アイテムのどこでタイミングを取るか？をたくさん研究しながら練習したいと思っています。

選手 花島 良子

1. 当初の目標（自己目標）

スノーボードクロス、スロープスタイル、ビッグエアの3種目ともメダル取得を目標

2. 結果に対する評価

*スノーボードクロス 10位

4年前のロシアデフリンピックでは参加者のほとんどがフリースタイルメンバーであったため、今回も同様であろうと思っていたが、実際はアルペン選手が多くが参加した。

今回のクロスコースが甘くクロスらしくないコースだったことにより、ボードの性能とWAXで差が出て負けてしまった。

*スロープスタイル 4位

2018年12月に突然のハーフパイプ中止を知り、

2019年1月よりスロープスタイルに転向した。

国内でオフでもトレーニングできる人工ブラシのジャンプ練習施設やジブ練習施設でトレーニングしたが、今回のデフリンピックまでの間で雪山での練習がゼロだったため、雪山でジャンプ台の感覚を掴むのに時間がかかってしまった。

*ビッグエア 6位

基本的な滑りは安定して滑れていたが、雪山でジャンプ台の練習不足から技の面で負けてしまった。

3. 今後の課題

*スノーボードクロス

スノーボードの板をクロス用に変えて、1日も早くボードの性能を知り、下半身を強化しながら滑りこなせるようにしたい。

*スロープスタイル、ビッグエア

今回の滑りおよび結果が自分の実力だと素直に受け止め、今後は人工ブラシでの滑走トレーニングだけでなく、雪山でジャンプ台の練習を多く取り入れるようにする。

いつでもどこでもいろいろな技を余裕で出せるような動きを高めていきたいと思っています。

選手 奥田 恵理子

1. 当初の目標（自己目標）

- ①スノーボードクロス（SX）入賞
- ②スノーボードスロープ（SS）上位
- ③スノーボードビッグエア（BA）上位

2. 結果に対する評価

私は第19回冬季デフリンピック競技大会に初出場しました。

去年の12月にハーフパイプの開催中止を知り急遽3種目に変更して1年間練習を積み重ねました。オフシーズン（雪のない期間）は強化合宿と個人で自主練で、磨いて来ました。

オンシーズン（雪のある期間）の初滑りとして、11月にスイスで強化合宿を行いました。大パウダーとなっていた為、練習は出来ませんでした。

12月8日から現地入りしました。

雪山は、アイスバーンでした。

まずは、スノーボードクロス（SX）のコースとスタート位置の確認が今季の初滑りとなり、更に公開練習は半日しか滑れませんでした。

本番大会は、3人で競技し、スタート位置から遅れたがSコースに入る隙を追い抜けてから2位をキープしようと思っていたが、ウェーブコースに入

る所で3位の選手に追いつかれてしまいました。また追いつこうと思ったが、ボードかWAXの差によりさらに離されたと感じた。焦りがあったのか身体が浮いてしまいそのまま転倒、2回戦へ行けなかった。

スノーボードスロープスタイル (SS)

初滑りでした。公開練習は1日やりました。

1ボックス(ジブ) 2キッカー3キッカー4ドラム缶(ジブ)

スタート位置から1つ目ボックス(ジブ)まで入る距離が短くて、タイミングが難しかった。2つ目と3つ目キッカーは距離感とスピードコントロールが慣れなかった。雪上で、滑る感覚が違う事が1番大きかったです。ドラム缶に慣れてない恐怖感がありました。何回も練習をやって慣れました。本番大会は、天気は雨が降った影響や、塩撒きもあって、滑る感覚が変わりました。1本目は、2つ目キッカーと3つ目キッカースピードコントロールが出来なかった。

2本目は1つ目から3つ目アイテムまでいい流れへ行き4つ目アイテムはただ飛び越えていこうと思っていたのですが大怪我をしてしまいました。スピードコントロールができずに失敗に終わりました。

ただ4つ目が…控えめに軽くタッチだけで終わればよかったと後悔が残っています。もし完璧だったら状況は変わっていたらと思うと悔しいです。

スノーボードビックエア (BA)

1番自信があったのはビックエアでしたがスノーボードスロープスタイルで大怪我をした為棄権になりました。出場出来なくて悔しかった。

3. 今後の課題

オフの間とオンの間は、やっぱり雪山の上は、感覚とスピードコントロールと気持ちが違う事はわかりました。オンの時も練習時間を多く沢山滑りながら磨いたほうが良いと思いました。

カーリング

監督 竹川 寿美子

1. 選手・役員の選考基準・方法

選手のエビデンス(実績)について;

日本ろう者スキー協会に属するカーリングチームは、1チームしかありません。北海道にもデフ選手が数名いますがシニア選手であったり、デフリンピックを目指す真剣さがないため、必然的にチーム

が決まっています。デフリンピックのための選手(チーム)選考会(日本ろう者カーリング選手権)を開催募集したところ、申し込みもありませんでした。しかしながら、今回の日本代表デフチームは、常に合宿や試合をし、練習に励んでいます。

実績ですが、ロシアデフリンピックの後、海外大会はソチ(第3回世界ろう者カーリング大会)とポーランド(聞こえる人の大会)の2つしかありません。このポーランド大会は、新メンバーの世界慣れという要素が大きく、また日程上、ベストメンバーでは戦っていないのでエビデンスとは言い難いのですが、一応報告します。

・ソチ世界大会(第3回世界ろう者カーリング大会)

2017年3月5日(日)から12日(日)にかけて、ソチ(ロシア)のアイスキューブを会場に、第3回世界ろう者カーリング選手権大会が行われました。10ヵ国参加の最終順位は以下の通りです。

- 1 カナダ
- 2 ロシア
- 3 アメリカ
- 4 日本
- 5 ハンガリー
- 6 スイス
- 7 ウクライナ
- 8 韓国
- 9 中国
- 10 ポーランド

日本は3位のアメリカに予選では勝利したのに、3位決定戦での再戦で負けてしまいました。メダル圏内の実力だといえるでしょう。また、世界ランキングはデフカーリングでは最新と呼べるものが、デフリンピック前には、この第3回世界ろう者カーリング大会のものしかありません。

・ポーランド大会について

ポーランドデフチームは、第3回世界ろう者カーリング大会(ソチ世界大会)では10ヵ国中10位、ポーランド大会では12位です。

日本デフチームは、ソチ世界大会は4位、ポーランド大会では14位です。

この2つのデフチーム以外は、ポーランドのレベルの高い聞こえる人のトップチームで、ラウンドロビン(予選)を勝ち上げるのも難しい大会でした。

この大会でのポーランドデフと日本デフの勝数はお互い1勝で同じなのに予選の抽選による位置により、最終順位に差が出たのはそのためです。(今回のデフリンピックではポーランドデフチームは4位

でしたが、実力は同等だと思います。)

また、一番最近の国内公式大会（聞こえる人の公式戦：第32回青森県カーリング選手権大会（2018年12月1日～2日）並びに、第32回東北カーリング選手権大会（2018年12月22～24日）ではこれまでよりも順位をあげていますので、こちらもエビデンスとしました。

- ・青森県カーリング選手権大会
優勝：Big Bang
2位：青森ジュニア
3位：レジェンド
4位：チームデフ
- ・東北カーリング選手権大会
優勝：レジェンド（青森県）
2位：Big Bang（青森県）
3位：まべちがわ（岩手県）
4位：UNKNOWN（宮城県）

チームデフは東北カーリング選手権大会の予選リーグで3位でした。（各組2位以上で決勝ラウンドへ進出）

東北選手権では青森県チームが1位2位を占めていて、青森県で勝ち上がるのが聞こえる人のチームでも難しいことをアピールします。

役員（スタッフ）選考基準について；

今回、選手団のカーリングチームのスタッフとしては4人いました。元々チームに貢献している聞こえるコーチとトレーナー、他に、国際手話通訳者、監督です。公費スタッフとして認められるのは3人までと言われていたので、私（監督）は行くのを止めようと考えましたが、聴覚障がい者のスタッフ（監督）がいないこと、試合中は試合エリア外に国際手話通訳者が1人になること、コーチやトレーナーが本来の業務以外での雑用が増えてしまうこと、などを考慮し、参加することにしました。トレーナーは日本の手話の手話通訳士でもあり、国際手話も多少はわかりますが、TD会議など大事な話し合いの時にはもっとできる国際手話通訳者が必要との判断より国際手話通訳者は削れませんでした。本当はスタッフは5人いてもよいと思っていましたが、連盟本部の助けにより結果的に4人でも業務的に間に合ったと考えています。

2. 総評

デフリンピックを通して思ったことを雑感として書きます。

- ・スポーツドクターについて
普段はカーリングチームにドクターはいない

ので、これまで栄養管理や健康管理、服薬管理など自分たちで元々やっていたが、今回デフリンピックに参加するにあたり、スポーツドクターの同行があるとのことで、もっと選手に対してのサポートがあると思込み、期待していました。

今回、マデージモ（カーリング）会場で選手団が2か所のホテルに分かれてしまった為、選手団本部同行のスポーツドクターと選手とのホテルが別になってしまったのもサポートが弱かったと感じる一因かもしれません。

・本部携行薬剤一覧

日本出発前に医科学委員のメディカルスタッフから貰っていたマデージモへの携行薬剤一覧と、実際に相違があったので、少し不信感を覚えました。また、もともと携行薬剤一覧にないことは分かっていたのですが、予想外に選手たちの便秘が多くあり、便秘薬の携行がなかったのが、私も不準備だったので悔やまれました。デフリンピック後半に、女子チームの視察目的で、カーリングチームの村外スタッフが派遣されてくる予定があったため、便秘薬を頼むことができず窮地をしのぐことができました。また体の痛みを訴える選手に対応するための「さらし」を持ってきてもらったり、カイロの補充をお願いしたりしましたので、現地に行ってから不足物質を補給するスタッフがいるのはとても役に立つと感じました。

・1人1役？

ドーピング検査に呼ばれた場合、日本出発前のオリエンテーションでは「メディカルスタッフと一緒にいきましょう」話がありましたが、メディカルスタッフの範囲を本部に確認すると、本部が選任したスポーツドクターということでした。スポーツドクターは手話ができないため、本部帯同の手話通訳者も選手と一緒にいくとのこと。しかしこの手話通訳者は国際手話が不得意であるため、結局、カーリングチーム帯同のメディカルスタッフ兼手話通訳士がスポーツドクターに付き添うことになりました。ここで言いたいのは、大会中には、スタッフが赴く場合に人数制限があることがよくあるので、一人一役のみのスタッフではなく、もう少し兼任できるスタッフを取り入れるべきではないでしょうか？医師、看護師、英語ができる人、日本手話ができる聞こえる人、国際手話ができる、などと、1人1役だと何人もスタッフが必要になるため、人員を減らすために「英語、日本手話、国際手話ができる」「手話ができる医療従事者」

のようなマルチなスタッフを同行させるべきではないか。今後の人材育成が課題かなと思いました。

・本部スタッフの喫煙について

改正健康増進法が2019年7月1日に一部施行し、2020年4月1日には全面施行されます。このため、スポーツ施設における受動喫煙防止のガイドラインを定めたり、禁煙宣言をするスポーツ事業団が増えています。また、東京2020大会では国際オリンピック委員会（IOC）の「たばこのない五輪」という理念に基づき、期間中、競技会場の敷地内は完全禁煙になるそうです。こうした時流から、スポーツに関わる全日本ろうあ連盟スポーツ委員会内での禁煙を推進した方がよいと考えます。選手に同行する以上は禁煙すべきですし、JAPANのユニフォームを着た状態で公共の場で（例え喫煙所であっても）喫煙しているのはいかがなものかと思えます。

・選手特性、コーチ特性

カーリングチームの今回のデフリンピックは、これまでの成績を考えると振るいませんでしたので、とても残念です。冒頭での選手選考のエビデンスにも少し書きましたが、ポーランド男子デフチームは結成2年ほどですが、実力を伸ばしています。ポーランドチームは、指導者を変更し、その教え方が自分たちに合っていて上達できたとのことでした。現在、日本デフチームは青森市に拠点に置き、コーチも青森市内在住の方に担っていただいています。私が選手に感じていることですが、青森県在住の選手やコーチは全般に「津軽じょっぱり」気質（頑固さ）が強く、聞く耳を持たないところがあり、選手においては指導してもなかなか改善しなかったり、コーチにおいてもろう者に対して理解しやすい指導方法についての提案をしても受け入れてもらえなかったりということがありますので、手話を多少は覚える気持ちのあるような、若くて柔軟な頭を持つ指導者や選手を育てていきたいと思えます。

特に、私たちは補助金という税金を使わせていただきながら練習をしているので、楽しむためにデフリンピックに参加しているわけではないということも言っておきたいと思えます。

・チーム間の連携について

受傷について帰国後に倉野総務から「今回のできごとは、スノーボードチームだけでは対応できず、またスキーやカーリングチームの責任者と相談しようにも、そんなにチーム間のフォ

ロ関係は見られなかったように思いました。本当は、現地で本部とデフスキー協会と善後策を協議しながら対応できると良かったのですが、（中略）今後は、各チームを統括する立場の方が選手団に入っていただくことが今回の出来事をこれからは活かすことにつながるのかなと思います。」とありましたが、私としてはちょっと心外です。というのは、現地でなにも相談されていないし、そもそも報告を受けていませんでした。スキー協会内のトレーナー連絡網にて、たまたま知り、マデージモ対応医師を、ケガ人のでた会場へ行っていただくことを再三提案しましたが、ホテルの部屋がないことを理由に医者に向かわすこともなかなかできなかったようです。

本部からも相談・報告ありませんでしたが、考えてみると確かに他のチームからも相談・報告を受けていないこともあり、本来ならば日本ろう者スキー協会の危機管理規程にのっとり、スキー協会会長に連絡すべきところできませんでした。

倉野総務の「今後は、各チームを統括する立場の方が選手団に入っていただくことが今回の出来事をこれからは活かすことにつながるのかなと思います」とあるように、今回は公費スタッフ数を増やしていただけるよう願っています。

・開催国イタリアのオーガナイズ

今回、イタリアの国民性なのか、オーガナイズ（企画して催す）力が細かいところまで行き届かず、待ち時間や検査機関の不備が散見されました。また、日本が交渉下手ではないのかと思うこともありました。

日本が宿泊するホテルが、向かいとはいえ2か所に分かれてしまいました。イタリア側からすると、出来るだけ希望に沿ったつもりなのでしょう。韓国や中国、ハンガリーなどは、下見に来た段階で、主催国のイタリアに任せてはおけないとの判断から自分たちで予約をしたらしいです。ただ、日本が宿泊したホテルは組織委員会オフィスや試合会場に近く、便利なところではありました。

聴力検査のために、カーリングチームから2名の選手がマデージモからキアベンナに連れていかれましたが、結局（設備の準備不足なのかどうかは不明ですが）検査はせずに戻ってきました。マデージモからキアベンナまでは急勾配のつづら折りの山道であり、選手が無駄に疲労しました。後日改めて聴力検査が行われたが、検査場所は宿泊ホテルから徒歩数分の、マデー

ジモ組織委員会オフィスの建物内でした。

閉会式の旗手をカーリングチームから選出していました。閉会式に選手がステージに行くような演出もなく、日本選手団は観覧席もなく、また、閉会式が始まってから入場を促されたことも拍子ぬけしました。旗手予定の選手はがっかりしていました。

・連盟本部スタッフ

マデージモ（カーリング）会場に派遣された連盟本部スタッフには特にいろいろ手助けをしていただき、ありがとうございました。カーリングチームスタッフがもう一人いても（5人いても）よいかと初めは考えていましたが、結果的に4人で間に合ったのは、本部スタッフがこまめにTD連絡を確認してくださったおかげです。とても助かりました。また、連盟のホームページ更新もこまめにしてくださったおかげで、試合状況や選手の様子などをチームから日本へこまめに発信しなくてもよかったです。本当にありがたかったです。本部スタッフがカーリングチームの（ひいては選手の）手助けをしてくれたと実感しました。

コーチ 石田 順一

1. 自己の役割とその評価

私は前回のデフリンピック後にコーチを引き受け約3年半選手とともに活動してまいりました。

2年前の世界選手権では4位という結果からデフリンピックではメダル獲得を目標に練習に励んでまいりましたが、今回の大会に参加してみて各国チームが以前に増して強化をしてきていることを感じました。残念ながら日本チームのオンアイス（氷上）での合同練習量は選手の勤務の都合もあり1年間で30日にも満たない環境であることから、他国との練習量を比べて著しく劣っているのが現状でした。

練習内容につきましては日数が少ないことから試合を想定した質の高い練習内容を計画しましたが、フィジカルトレーニングは各個人で一生涯命行っており持久力も以前より確実に上がったものの、重要なオンアイス（氷上）トレーニング（青森・盛岡など）が1ヶ月2～3日ではレベルの高い技術の習得は難しい状況でした。したがって、基礎トレーニングである安定したスライディングや正確な方向にデリバリーできるフォームのチェックをするとともにウエイト（投げる強さ）の出し方を中心に多くの練習時間を割いてきて最低限、ショット成功率60%を目標に置いて指導してまいりました。大会地では試合

前と試合後のビデオを見ながらのミーティングも欠かさず行い、日本チームの強い点と弱い点について選手に意識させてきました。現実にはショット率が50%を下回る試合が数多くあり作戦を立ててもショットが不正確なために思うように試合の組み立てが出来ず集中力に欠けた点が多々ありました。参考までに5位となりメダルに手が届かなかった韓国男子チームと比較するならば、彼らはデフリンピックのために6ヶ月間毎日練習したとコーチが話していました。

さらに、男女優勝した中国、準優勝したロシアは次元の違う正確なショットができておりカーリングの練習に時間を割けるプレーヤーでチームを構成し勝つために十分なオンアイストレーニングを積んできたことが強さに繋がっておりました。強さは練習量に比率しており今後の課題となります。

2. 今後の課題

日本におけるろう者のカーリングプレーヤーは少なくデフリンピックの代表決定戦を計画しましたが1チームのみのエントリーで競争原理が働かない状況にあります。課題としてはろう者のカーリング人口が極端に少ないことにあります。カーリングを普及しプレーヤーを増加させることができればナショナルチームの選考も可能になります。

そのためにはカーリング施設のある下記の都市にプレーヤーやチームが存在しなければオンアイス（氷上）トレーニングがままならず現在の状況と変わらないこととなります。世界大会でメダルを獲得するためには常時練習の出来る環境にいるプレーヤーが覚悟を持って目標に向かう姿勢が必要です。

私達は将来のことを考え青森県豊学校の生徒に興味をもってもらうために学校に出向きカーリング体験の企画を提案し実行してきました。今後も地道に活動を続けて行く必要があると感じております。全国にカーリング専用施設のある都市は非常に少なく札幌・名寄・稚内・妹背牛・帯広・青森・盛岡・新潟・軽井沢・上尾・宇治などの地域にしかありません。室内スケート場や屋外仮設リンクで行っている都市もありますがカーリングは凹凸がなくフラットなアイス面が必要ですので楽しむカーリングだけではそれでも良いのですが、競技としてのカーリングをするためには向いていません。各地域にろう者のカーリングチームが数多く出来て全国大会を開催し切磋琢磨できる機運が生まれることを期待しております。

今回カーリング種目に男子1チームでも参加できて世界のカーラー（カーリングする人）と交流し友情が育まれたことに感謝し報告といたします。

1. 自己の役割とその評価

- ①主に、選手のコンディショニングを管理。毎朝の体重と体温、脈拍をチェック。毎食の栄養素と摂取量をチェック、試合中は、休憩中の捕食を準備し必要な選手に摂取させるなど。毎日の体重変化と運動量から、必要な栄養摂取を日本にいる管理栄養士と連絡を取りながら選手にアドバイスを行なった。朝食では脂質が多いメニューだったため、ホテル側をお願いをし夕食に残った野菜やゆで卵をプラスしてもらうなどした。また試合中の補食については、主にフルーツやチョコレートを食べることが多かったが、今回のカーリング場は室温がかなり低かったこともあり、暖かいものも準備した。連日の試合で、選手の疲労が朝の脈拍数に表れたため、休憩の時間を多く取ったり、鍼治療を実施するなどの配慮をしたが、スケジュールそのものがかなりタイトだったため、疲労が蓄積された状態で次の試合に挑まなければならないこともあった。

特に大きな怪我もなく、体調不良の選手も出ず、無事に試合に臨めたが、勝ちが先行しないために、メンタル的に普段の力が発揮できない状況が続いた。今後、メンタルの強化が課題の1つであることを改めて感じた。

- ②主に、コーチと選手間の通訳、TD会議や審判長とのやりとりの通訳を担当した。試合後の振り返り(ビデオ撮影した試合の様子をチェックし戦術やコミュニケーションなどをチェックする)では、次回の試合の修正点をコーチから指導されるので、選手1人1人に確認をしながら進めた。ただカーリング競技は試合そのものが長く、また試合数も多いため、かなりの時間を要した。また、TD会議では競技ルール等の重要事項が話されるため、同席した国際手話通訳と確認を取りながらコーチへ伝えた。また試合中は、コーチ席に入ることができたのは私1名だったので、審判や審判長との通訳は私が担当した。試合中のタイムアウトでは、選手とコーチ間で話ができるのはたった1分しかないのので、的確かつスムーズに伝わるよう努めた。

2. 今後の課題

- ①上述したが、「勝ち星」が選手の試合のテンポを作る何よりも効果的な薬である。今大会は前大会と違い、負けが先行したため、なかなか自

分たちのペースで試合運びができず負けてしまったため、今後は、追い込まれた状況においても、慌てず、自分たちのカーリングができるようなメンタル強化をトレーニングにこれまで以上に組み込んでいきたい。カーリングは試合数も時間も長く、また氷上のチェスと言われているように頭も使う競技であるため、疲労をどのように減らすかが重要である。ホテルの環境を整ええたり、食事に変化を与えたりはもちろんのこと、移動にかかるストレスも軽減できれば良いと思った。

- ②本部の手話通訳が担う範囲と、チーム付きの手話通訳が担う範囲が少し曖昧だったように思う。本部とチームのより細かな打ち合わせが必要であると感じた。

国際手話通訳 砂田 武志

1. 自己の役割とその評価

今回は国際手話通訳者として派遣されました。2009年夏季デフリンピックに初めて派遣され、それ以降10年間で8回にわたり、スポーツ国際手話通訳を務めていました。今回は、初めて日本選手団のスタッフの一員としての派遣でした。

スポーツ国際手話通訳の役割は、コーチや選手等の間において、通訳を行うことでした。

また、試合中だけでなく、オフタイム時のコミュニケーション通訳を行うことも役割のうちです。また、国際通訳手話を行う場面は、練習や試合以外にもインタビューやTD会議、各国交流等であり、幅広いのが特徴です。例えば、次の対戦に関する打ち合わせや、過去の試合を振り返るときなど、コーチや選手が意見を交わすことがあります。そういう場面でも、国際手話通訳を行います。その際は、話者の意図を理解した上で訳出を行うよう心掛け、選手やコーチ陣に伝えるようにしました。

一方、選手から依頼があり、プライベートな場面で通訳をするときもあります。

選手が慣れない土地でも最高のパフォーマンスを発揮できるように、生活全般をサポートすることも、スポーツ国際手話通訳者の役目であり、それを果たすよう努めました。

ただ、プライベートな場面では、国際手話力(公式単語)があっても、他国の方々の国際手話を理解するとは困難であることがわかりました。なぜなら、プライベート場面及び地元で話されている国際手話は、非公式国際手話単語だからです。当然のことながら、自分が理解できていないことを日本選手団に

伝えることはできませんでした。

そして、カーリング競技のルールを熟知していることは当然ですが、まだまだ完全に覚えていなかったため、焦ることもありました。

結団から解散まで2週間という長期間でありましたが、始まってしまえば、あっという間に終わってしまった印象です。

なによりも、無事に終わったので、ほっとしています。

2. 今後の課題

スポーツ国際手話通訳は、一般国際手話通訳とは異なり、言葉だけでなく、話し手の感情や思想までを伝える能力が必要です。また、勝った場面と負けた場面では、通訳の表現方法が異なります。自身は、この表現能力が欠けており、真剣に伝えても、選手には冗談のように受け止められ、上手く伝わらないことがありました。

また、カーリング日本選手団とともに過ごす時間を大切にしなければならないと気付きました。

そして、フリーランスと違って、時には選手たちの信頼を得るためにはチームの一員として振る舞い、コーチ陣の信頼を得るためにはやはり一員として行動しなくてはならないとわかりました。

このように、通訳技術よりもまず信頼してもらえること、そしてチームプレーヤーであることが求められます。これらは、クリアしなければならないという今後の課題です。その課題解決のためにも、自分もカーリング競技を体験してみたいと思います。今後、またスポーツ手話通訳を活動する中で、実績を重ね、信頼されるスポーツ国際手話通訳者を目指したいと思います。

最後にカーリング選手、コーチ陣の皆様、本部の皆様、今回は、いい機会を与えていただき誠にありがとうございました。

チーム代表 荒谷 淳一

1. 当初の目標（自己目標）

メダルを獲得することが目標。

4年前のデフリンピックでは5位、2年前の世界選手権では4位のため、今回のデフリンピックこそはメダル獲得したい。

2. 結果に対する評価

デフリンピックの出場チームが2年前の世界選手権よりも全体的にレベルが上がっており、日本チームのレベルは下がってしまった。

日本では標高が低く、デフリンピック会場は標高1,500mという日本とは異なる環境で思い通りにやれなかった原因もある。

それも海外での合宿が行われなかったからでもありえると思う。

3. 今後の課題

年齢のことも足のこともあるため、選手継続するかどうかは未定だが、チームメンバーの年齢的には高齢なので、新しい若い方を育成を努めたい。

セカンド(中盤頃からサード・フォース) 荒谷 飛翔

1. 当初の目標（自己目標）

我がチームのメダル獲得を目標とし、コミュニケーション力とスィープの役割をしっかりと自覚しながら、作戦を図ること。個人でショット成功率50%以上を必ず出すようにデフリンピック大会で今までの合宿の練習通りに意識しながら挑む。

2. 結果に対する評価

12チーム中10位でメダル獲得を逃した。初めから私がセカンド担当としてチーム貢献に努めたが4人のショット成功率と比較すると、私の方が判断力とショット率が良いので中盤頃からサード担当とバイス担当にされた。最後にフォース担当にされたので、責任が重く、覚悟が必要だった。バイス担当では判断力遅れでストーンがぶつかることがよくあり、対戦に勝てなかったのは私の責任だった。突然サード・フォース担当とバイス担当を務め、緊張感やプレッシャー感があったが、勝ちたい気持ちを込めて頑張ったのが良かったです。

3. 今後の課題

前回デフリンピックの5位から10位に下がったことで、チームの体力、戦術、コミュニケーション力の不足または合宿の数とチームのモチベーションが足りない等、様々な課題があると思う。各国チームを見るといつものメンバーだけでなく、若い世代が増え、より選抜してベストなチーム作りをされる形に見られる。日本では、国内でチームが1つしかない為に、さらに多数のチームを作り上げないといけないのが私の課題。今は2年後の世界選手権大会、4年後のデフリンピックでメダル獲得を目指すことしか考えられない。そして自分の体力をさらに高めるにはトレーニングを定期的実践し、戦術面をしっかりと理解することを努めていく。

選手（サード、リード） 米田 義光

1. 当初の目標（自己目標）

メダルを目標はメダル獲得すること。

チームとコミュニケーションをしっかりと取り、作戦も含め、自分もメンタルに負けずに、今までの練習通りでベストを尽くすことでした。

2. 結果に対する評価

参加12か国中10位という結果でメダルを逃がしてしまいました。カーリング場は寒く慣れない環境であり、スケジュールもハードでした。チームのショット率を考えると、モチベーションが上がらないのか、いつもよりは低く、私個人もメンバーの中で最悪であり、サードからリードに変更になった。急な変更でメンバーは戸惑ってしまい、大変申し訳ないと思えました。試合は僅差ばかりでしたが最後まで諦めないのが良かったと思います。

3. 今後の課題

今後に向けて、若いメンバーの育成が必要と感じました。しかし、全国に1チームしかない為、増やすことが必要と感じます。チームも早目に戦略面をもう一度勉強し、試合中も悪い癖を無くしてショット率を上げ、コミュニケーションもしっかりと投順も固定が必要と感じました。

選手 中村 鉄哉

1. 当初の目標（自己目標）

一番の目標は、試合に出場して、チームの目標の金メダル獲得に貢献することでした。私は、デフリンピックは2回目の参加でしたが、4年前は補欠としてサポートする役割で終わり、試合には出場出来なかったからです。その悔しさをバネにこの4年間、練習を重ね努力を積み上げてきました。

また、試合に出場し、狙ったところにストーンを投げ、チームのためにベストを尽くすことでした。そのために、自分の体調、メンタルをいい状態に維持することを目標としていました。

2. 結果に対する評価

参加12チーム中10位という結果に終わりました。予選リーグで7連敗し、決勝に進むことが出来ず、メダル獲得も消えた時は残念で悔しい思いでいっぱいでした。その後、スイス、イタリア戦に参加し勝利することが出来たのは良かったと思います。

チーム全体の實力は、他の国に負けているとは

思っていません。小さなミスが続いたのは何が足りないのか、実力が出せる環境作りを考えることが大切だと思います。

3. 今後の課題

正確なショットを目指して練習をすること、お互いに皆の意見をよく聞くことが大切だと思います。

友人の紹介でカーリングを始め、冬季デフリンピックの存在を知りました。耳のきこえない自分達でも（デフ+オリンピック）に出場し、外国の選手達と戦うことができる、そんな機会があると知り、わくわくして練習に参加してきました。今回は残念な結果となりましたが、今までの努力の日々は、大きな意味のあるものだったと強く感じています。次の世代のきこえない子供達へ、デフリンピックの存在をもっと知ってもらうように、青森県ろうあ協会や学校等に呼びかけて選手層が厚くなるようにしていきたいと思っています。

セカンド（リード） 松橋 要

1. 当初の目標（自己目標）

初デフリンピックでしたが、私以外のメンバーは過去の大会で上位の成果を残したので、今回のデフリンピックはメダルを取ることが目標でした。デフリンピックの知名度を日本中に広めるために、良い結果を残すこと。また、日本の皆さまに微力ながら夢や希望、そして勇気を少しでも与えられる意志を持っていきたいと強く思っていました。

2. 結果に対する評価

標高（環境も含む）の高いところでカーリング試合は初めての経験でした。不慣れもあり、スケジュール的にハードだったと思う。海外での強化合宿はあまりなかったので、実績が乏しいこともあり、最終的な結果に繋がったのではないかと思います。記憶から取り除くことができない大会でした。しかし、大きな糧を得た大会でもありました。

・2013年と2017年の世界選手権大会、2015年のロシアデフリンピックに1度も勝てなかったスイスチームに打ち勝ったこと。

・連続1位中国、2位ロシア、そして3位フィンランドにコンシードせず、最後まで僅差で闘ったこと。
・スイスチームのコーチ、マリアンヌ・フロトロンさん（現役時代に世界大会などで多くの成績を残した凄い選手だった）から評価をいただいたこと。

今回、悔しい思いを経験に活かして、今後のデフリンピック競技大会、デフカーリング世界選手権大

会に向けて糧の基盤を作れたと思います。

3. 今後の課題

4年に向けて強いチームへと新たに団結しなければならぬと思う。また、物理学も含めて、勝てる戦略を一から学ばなければならぬ。海外への強化合宿や練習試合などで百戦錬磨して、4年後のデフリンピックでのメダル獲得へ貪欲に挑みたい。

●今大会における受傷、またその対応について

- ・ 受傷者：スノーボードフリースタイル選手（女子）
- ・ 受傷競技：スノーボードフリースタイル スロープスタイル（12月18日）
- ・ 傷病名：第二腰椎の破裂骨折

(現地時間)	
12月18日	競技中に転倒。ソンドロの病院にヘリコプターにて搬送され、現地時間夕方6時頃緊急手術。帯同ドクターが病院に付添。手術は成功。
12月19日	入院開始。神経等に損傷はないが、下手に動かすと下半身麻痺になる可能性があるため、長期の入院見込み。当初帰国日(23日)の帰国は不可能となる。日本から在ミラノ総領事館・スポーツ庁・JPCに受傷報告。
12月20日	ドクター付添。連盟より本人の職場に第一報の連絡。付添として連盟職員を残すことを決定。日本から連盟職員2名(ろう者・聞こえる人、ともに女性)の派遣を決定。現地ではドクターが引き続き付添。旅行会社より保険会社に連絡を入れ、現地通訳・滞在場所の手配を行う。
12月22日	付添職員・現地語通訳が付添開始。この頃から本人のリハビリ開始。
12月24日	日本からの職員が現地到着し引継ぎ。帰国に向けての段取りを整理。
12月25日	付添職員帰国。
12月26日	帰国方法・空港からの搬送方法、帰国後の入院・自宅搬送とするか等を調整。日本ろう者スキー協会と情報共有開始。
12月27日～30日	本人が個室から大部屋に移動。12月28日に抜糸。帰国便は現地12月31日発、日本1月1日着で進める。帰国後日本の手話通訳の調整。
12月31日	本人・帯同職員2名帰国。病院⇒空港は救急車。日本の空港からも救急車で自宅に搬送。本人の精神状態を勘案し、空港での出迎えはなし。
(以下、日本時間)	
1月9日	地元の病院を受診(初診)。
1月14日	地元の病院を受診(再診)。担当医より安静のため入院を指示される。
1月17日	地元の病院に入院。主に安静と経過観察。
2月16日	退院。今後、6ヶ月に1度 通院予定。

【今回の課題】

- ・ 受傷時、本部が分かれたことによる情報共有体制・現場責任者不在の問題
- ・ 家族との対応の問題(緊急時対応)・非常時の家族の付き添いの重要性
- ・ 競技団体内(チーム内)での危機体制についての認識および協議不足、本部との連携不足

【今後の改善点】

- ・ 緊急時の本部の指揮系統のマニュアル化(現地及び日本での「責任者、連絡体制」の決定)
- ・ メディカル体制の見直しについて(競技団体からの「チームドクター」の派遣)
- ・ 受傷への対応とともに選手のメンタル面へのケア及び日本代表選手へのメンタルトレーニングのサポート向上
- ・ 競技団体との関係、受傷時の対応について(書面での覚書等の作成)
- ・ 緊急連絡先の把握と日本との連携(後方支援体制)の確認
- ・ 提出書類等の見直し(緊急連絡先の記載方法、家族や職場への連絡について)

資料

①日本選手団編成にかかる指針

第19回冬季デフリンピック 日本選手団編成にかかる指針

(全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会 2019年3月10日策定)

第19回冬季デフリンピック大会に

(1) 高水準の競技に適切な準備ができている競技者を派遣し、

(2) 競技者が持てる能力を出し切れる環境を整えて「ロシア 2015」以上の好成績を修めるために、

全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会は日本選手団編成にかかる指針をここに策定し、全日本ろうあ連盟 2018 年度第 4 回理事会承認後の 2019 年 3 月 10 日をもって発表されるほか、文科省および厚労省、日本パラリンピック委員会にあらためて報告されるほか、国民広く公開されるものである。

各競技団体はこの指針をもとに冬季デフリンピックでメダルを競えるための選手強化及びチーム編成準備を行う。

★代表選手推薦の手順（予定）

- ・ 2019 年 4 月 競技団体より推薦選手リスト提出
- ・ 2019 年 7 月 全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会にて代表候補選手団員内定
- ・ 2019 年 9 月 全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会（臨時）にて代表選手団員決定
- ・ 2019 年 10 月 最終エントリー

★代表選手推薦基準について

高水準の競技に対応する準備ができている、メダルの可能性がある競技者のみを「冬季デフリンピック 2019」に日本代表として派遣するために、各競技団体は次に示す推薦基準に基づいて選手の推薦を行う。スタッフについては基準を特に設けないが、各々の役割において専門性を有していることが求められる。

各競技団体は推薦する選手・スタッフがデフリンピックの精神を認識し、かつデフリンピック大会規則及び該当競技規則と世界アンチ・ドーピング規定について理解しており、日本選手団員として責任ある行動をとることを保証しなければならない。

◎ICSD 規約によりデフリンピックに参加する聴覚障害を持つ選手団員は ICSD の会員でなければならない。新しく参加する選手は 2018・2019 年度において全日本ろうあ連盟会員でなければならない。

前大会（ロシア 2015）出場選手は、2016・2017・2018・2019 年度において会員でなければならない。

（尚、推薦基準をクリアした選手の年齢が高校生でも会員登録は必須とする）

◎全日本ろうあ連盟が主催するろうあ者冬季体育大会への出場を原則として義務とする。

《推薦基準》

※アルペンスキー競技

- (1) 2017年開催の世界選手権大会でベスト8の成績をおさめること
- (2) FIS・SAJ公認等の公認大会、ジャパンパラリンピック等の公認大会で好成績をおさめること

●上記のいずれかを満たすこと

(上記公認大会に強化選手が複数出場して各選手の成績を比較できるようにする)

※アルペンスノーボード競技

- (1) 2017年開催の世界選手権大会でベスト8の成績をおさめること
- (2) FIS・SAJ公認等の公認大会で好成績をおさめること

●上記のいずれかを満たすこと

(上記公認大会に強化選手が複数出場して各選手の成績を比較できるようにする)

※ハーフパイプ競技

開催国の事情により開催無し。

※スノーボードクロス競技

- (1) SAJ公認等の公認大会で好成績をおさめること
- (上記公認大会に強化選手が複数出場して各選手の成績を比較できるようにする)

※クロスカントリースキー競技

今回は派遣なし。

※カーリング競技

- (1) 2018年度中に国内で大会もしくは競技会を実施すること。チーム総数は原則4チーム以上が望ましい。
 - (2) 2017年の世界選手権大会でベスト8の成績をおさめること
 - (3) JSA(社団法人日本カーリング協会)等の公認大会で好成績をおさめること
- 上記のいずれかを満たすこと

※スロープスタイル競技

- (1) JSBA(日本スノーボード協会)等の公認大会で好成績をおさめること
- (上記公認大会に強化選手が複数出場して各選手の成績を比較できるようにする)

※アイスホッケー競技

今回は派遣なし。

②派遣スケジュール

年	月 日	内 容
2018	2月10日-12日	第43回全国ろうあ者冬季体育大会 於岩手・雫石スキー場
	7月5日	イタリア政府の承認が得られ、9月に提携するとの連絡あり
	7月15日-16日	2018年度第1回理事会・第1回デフリンピック派遣委員会 今後のスケジュール確認
	9月	ICSD ウェブサイトにて大会日程・開催地が公開される
	10月	旅行会社・ユニフォーム会社へ見積依頼 在イタリア大使館担当紹介依頼
	10月31日	オンラインエントリー／アクセス担当者の連絡
	11月10日	2018年度第2回理事会・第2回デフリンピック派遣委員会 今後のスケジュール確認 下見・本番の旅行会社からの見積内容確認
	11月下旬	旅行会社、ユニフォーム会社の決定
	12月5日	ICSD から各国へ Official Invitation Letter が配信される
	12月16日	JPC 競技別指導者講習会助成事業 次回デフリンピックに向けての研修会②
2019	1月25日	予備エントリー提出
	2月5日-9日	事前視察 競技会場、治安等の確認
	2月22日	競技団体へ推薦資料提出依頼 推薦調書、ユニフォームサイズ表、健康診断書、薬物調書、聴力検査表、連盟会員確認書
	3月10日	2018年度第3回連盟理事会・デフリンピック派遣委員会 日本選手団の編成にかかる指針の最終確認・発表
	4月	加盟団体へ会員確認協力依頼
	4月下旬	選手団ユニフォームの発注
	5月	聴力検査表の提出依頼（新規選手のみ）
	6月29日-30日	2019年度第1回スポーツ委員会 推薦調書の確認、派遣日程、交通費支給規定、スローガン等の検討
	5月	実行委員会へ宿泊申し込み
	7月13日-14日	第2回理事会・第2回デフリンピック派遣委員会 選手団員内定、スローガンの決定
	8月	選手団主将・旗手の選定
	10月6日-11日	直前下見 競技会場、治安等の確認
	10月8日	2019年度デフリンピック派遣委員会(書面) 選手団員決定
	11月12日	ICSD へオンラインファイナルエントリー提出
	11月13日	ICSD へフライトインフォメーション提出
	11月22日	第3回デフリンピック臨時派遣委員会 視察報告、今後のスケジュールの確認
	11月22日	秋篠宮皇嗣同妃両殿下 ご接見
	11月22日	社行会 於都市センターホテル
	11月23日	オリエンテーション
	12月8日	日本選手団 出発
12月12日	開会式	
12月21日	閉会式	
12月23日	日本選手団 帰国	
2020	2月6日	秋篠宮皇嗣同妃両殿下 ご接見
	2月17日	入賞者等に係る文部科学大臣表彰式および天皇・皇后両陛下拝謁

④候補スタッフ推薦用紙

様式5 (選手) 第19回冬季デフリンピック 日本代表推薦選手候補 プロフィール②

競技名

氏名

競技について (記入日 2019年 月 日)

①始めたきっかけは？

②主な活動場所は？

デフリンピックについて

①ライバルは？ (国名や名前)

②目標は？

③あなたにとってデフリンピックとはなんですか？

* 当用紙に記載された内容は、第19回冬季デフリンピック日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

様式6 (団体) 第19回冬季デフリンピック 日本代表推薦スタッフ一覧表

競技名

スタッフ候補が推薦基準をクリアしているかどうか、及びスタッフ候補推薦をどのようにして行ったか等を入力ください。

※年齢は2019年4月15日現在 (記入日2019年 月 日)

役職	氏名	性別	年齢※	健聴・ろう	ろうの場合所属協会名	推薦の理由
【例】	〇〇 〇〇					2015年の第18回冬季デフリンピック(ロシア)でスタッフとして参加。デフスポーツに対する幅広い知識を備え、選手への指導力も十分にあり、監督に選ばれている。
監督						
コーチ						
トレーナー						有資格:
通訳						(日本語・国際手話・音声言語) 通訳
スタッフ						
スタッフ						

※私費によるスタッフを派遣したい場合、以下にご記入(役職含む)ください。

役職	氏名	性別	年齢※	健聴・ろう	ろうの場合所属協会名	推薦の理由

競技団体名

代表者名 印

当用紙に記載された内容は、第19回冬季デフリンピック日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

様式7 (スタッフ) 第19回冬季デフリンピック 日本代表推薦スタッフ調査書

競技名/役職

(記入日2019年 月 日)

氏名	性	名	性別	
ふりがな				
漢字			男	
ローマ字			女	
出生地	都道府県	市	区	
生年月日	(西暦) 年 月 日	歳	(2019年4月15日現在)	
パスポート	名前	有効期限	年 月 日	
有・無	顔券番号	国籍		
身長	cm	体重	kg	
		足のサイズ	cm	
現住所	ふりがな	〒		
	住所			
	TEL	携帯電話	番号	
	FAX	〒		
	E-Mail (P.C)			
住民票のある住所	〒			
*現住所と異なる場合は記入して下さい。				
出生地もしくは出身地	都道府県	市区町村		
*主に育った地域を記入して下さい。				
障害者手帳情報	病名	手帳No.	等級	
勤務先 (在籍学校名)	名称	〒		
	所在地			
	所属部署 (学年)	役職		
	TEL	FAX		
派遣依頼 (必要な場合記入)	所属長名	役職		
	会社名			
	送付先	※資料は原則スタッフ本人宛に郵送します。スタッフが自分で会社に持っていき、回収してください。		
	TEL	事務担当名		
緊急連絡先	連絡者氏名	(本人との関係:)	連絡先	
			TEL・携帯・FAX・E-Mail (携帯)・E-Mail (P.C)	
語学力 (英語)	Reading & Writing	長い	普通	できない
	Listening & Speaking	5	4	3
		2	1	
		5	4	3
	2	1		
			5段階評価 (5が最良)	
語学力 (手話)	日本の手話	5	4	3
		2	1	
	国際手話	5	4	3
		2	1	
			5段階評価 (5が最良)	

* 当用紙に記載された内容は、第19回冬季デフリンピック日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

様式8 (スタッフ) 第19回冬季デフリンピック 日本代表推薦スタッフ プロフィール①

(記入日 2019年 月 日)

ふりがな	競技名		
スタッフ氏名			
指導者・競技役員等の資格	取得年	資格の内容	備考
	年		
	年		
	年		
	年		
	年		
	年		
	年		
	年		
	年		
国際大会等の参加歴	参加年	大会名	開催地
	年		
	年		
	年		
	年		
	年		
	年		
	年		
	年		
	年		
競技団体内での役職	指導歴	年	
その他特記事項を記入			

* 当用紙に記載された内容は、第19回冬季デフリンピック日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

様式9 (スタッフ) 第19回冬季デフリンピック
日本代表推薦スタッフプロフィール②

競技名	
氏名	

競技について (記入日 2019年 月 日)

①主な活動場所は？

デフリンピックについて

①ライバルは？ (国名や名前)

②目標は？

③あなたにとってデフリンピックとはなんですか？

* 当用紙に記載された内容は、第19回冬季デフリンピック日本選手団派遣業務のみに使用し、それ以外の目的には使用いたしません。

⑤ 会員確認書

第18回冬季デフリンピック参加者用 (継続)

第19回冬季デフリンピック (於イタリア)

会員確認書

2019年 月 日

一般財団法人全日本ろうあ連盟
スポーツ委員会
委員長 小椋武夫 行き

所属の都道府県協会名 _____

代 表 者 _____ 印

体育部長名 _____ 印

以下の者について、(一財)全日本ろうあ連盟加盟団体の登録会員であることを確認致しました。

<選手候補・スタッフ候補>

競技 _____ 氏名 _____

<会員登録年度 (会員年度に○を付けてください。)>

2016年度 ・ 2017年度 ・ 2018年度 ・ 2019年度 _____

以 上

【注】

- 協会名は「都道府県協会」の印をお願いいたします。
- 代表者名の部分は「理事長(会長)」もしくは「事務局長」どちらかをお願いいたします。
- 複数名の選手候補、スタッフ候補がいる場合は、1人1枚ずつ「会員確認書」を作成くださいますよう、お願いいたします。

⑥ 誓約書

一般財団法人全日本ろうあ連盟 デフリンピック派遣委員会

誓約書

私は、第19回冬季デフリンピック競技大会の日本選手団員として、一般財団法人全日本ろうあ連盟デフリンピック派遣委員会の意向に従い、以下の事項について誓約いたします。

- 第19回冬季デフリンピック競技大会の日本代表としての名誉を保ち、国際ろうあ者スポーツ委員会の規則を遵守して競技・行動すること。
- 出発前までに配布する選手団必携を熟読し、派遣期間中は団長の指示・決定に従い、規律を守り集団行動に努めること。
- 任命から大会期間中、以下に掲げる理由等によりデフリンピック派遣委員会が代表団員に相応しくないと判断し、任命取消の決定がされた場合受け入れること。(医学的な見地から派遣することに問題がある、規律を守らない、団長の指示・決定に従わない場合)
- 国際アンチ・ドーピング機構規程および関連ドーピング規定を遵守すること。
- 派遣期間中、組織委員会の許可した報道機関および日本選手団事務局の撮影・録音・インタビュー等には極力応じること。
また、以下に掲げる場合の写真や動画の使用については承諾するとともに、その都度の連絡を求めないこと。
(当会が作成するデフスポーツの周知・広報を目的としたパンフレットやPR動画への掲載、または、当会が許可した印刷物や映像作品等への使用の場合)
- 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会、一般財団法人全日本ろうあ連盟の主催および許可した行事への参加要請に応じること。
- 公式ユニフォームの支給を受けた団員は、ユニフォームを他人に譲ったり売買しないこと。

以 上

一般財団法人全日本ろうあ連盟
デフリンピック派遣委員会 委員長 石野 富志三郎 殿

2019年 月 日

競 技: _____

自 筆 署 名: _____ 印

保 護 者 署 名: _____ 印

* 未成年の場合は保護者のサインを添えて提出

⑦ 承諾書

第19回冬季デフリンピック競技大会 (於イタリア) ・ 日本選手団員

承諾書

私は、下記の派遣条件を前提に、第19回冬季デフリンピック競技大会 (於イタリア) 日本選手団員の任命を受諾いたします。

* 派遣条件

- ①「第19回冬季デフリンピック日本選手団の編成にかかる指針」に基づき、各競技団体は選手団事務局の指示に従い、登録手続き等を行うこと。
- ②選手及び聴覚障害者スタッフは「候補」の段階から、全ろうあ連盟加盟団体の会員資格を有すること。また、地元協会の理解と協力を得られること。
- ③参加に必要な経費 (航空費、ユニフォーム代、宿泊費等) のうち、自己負担が生じる場合応じることができること。
- ④職場の理解と協力が得られ、派遣期間中の休暇が可能であること。
- ⑤派遣期間中の行動は、団長の指示・決定に従い、規律を守り集団行動に努めること。
- ⑥任命から大会期間中、諸手続きや身体面などの都合により代表団員に相応しくないとデフリンピック派遣委員会が判断した場合、任命取消の決定がなされても受け入れること。

2019年 月 日

競 技 _____

氏 名 _____ 印

氏 名 _____ 印

* 未成年の場合は保護者のサインを添えてご提出くださいますようお願いいたします。

⑧オリエンテーション





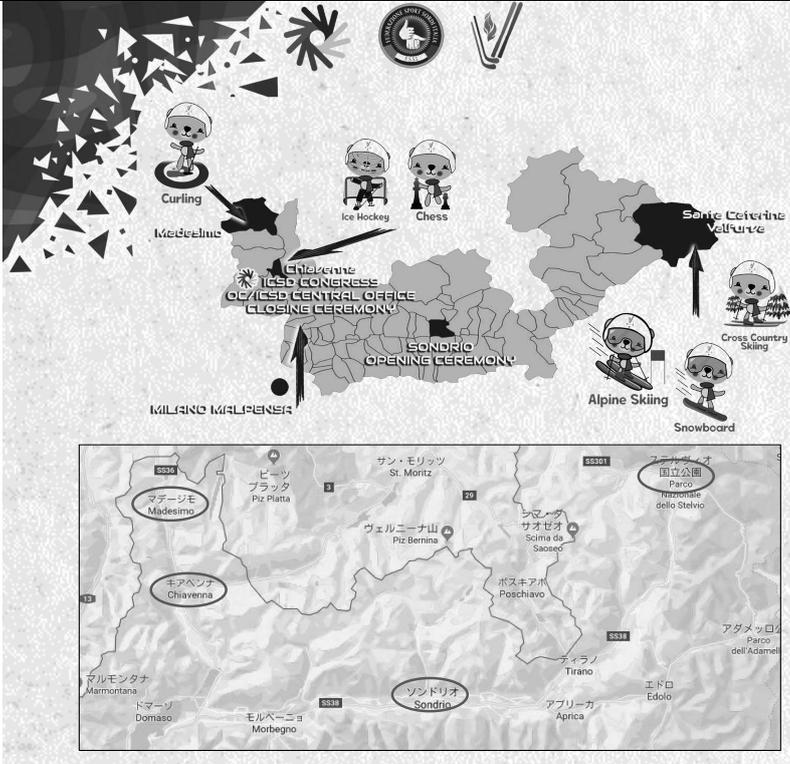
大会概要

開催期間：2019年12月12日～12月21日
 渡航日程：2019年12月8日～12月23日
 開催国・都市：イタリア・ヴァルテッリーナ
 ヴァルキアヴェンナ地方

運営主体：国際ろう者スポーツ委員会
 第19回冬季デフリンピック競技
 大会組織委員会

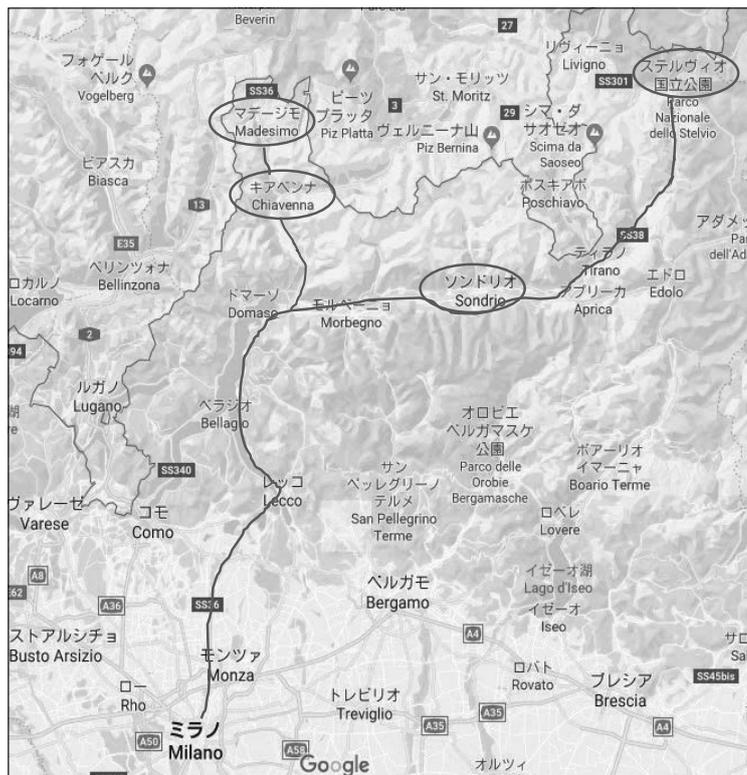
実施競技：アルペンスキー、クロスカント
 リースキー、スノーボード、カー
 リング、アイスホッケー、チェス
 ※赤文字は日本選手が参加予定の競技

参加国・人数：28ヶ国、1,009名（視察時点）



Map locations and events:

- MILANO MALPENSA
- Medicine
- Curling
- Ice Hockey
- Chess
- Chiaavenna ICEB CONGRESS
- ICEB CENTRAL OFFICE
- CLOSING CEREMONY
- SONDRIO OPENING CEREMONY
- Alpine Skiing
- Snowboard
- Cross Country Skiing
- Sante Caterine Valfurva
- マデージモ Madesimo
- チアヴェンナ Chiavenna
- サン・モリッツ St. Moritz
- ヴェルニョーナ山 Piz Bernina
- ソンドリオ Sondrio
- ティラーノ Tirano
- アプリーカ Aprica
- アドメットロ Parco dell'Adamello
- エドロ Edölo
- モルベニョ Morbegno
- ドマッソ Domasö
- マルモンタナ Marmontana
- ピッツ プラッタ Piz Plattä
- サオゼオ Scimia da Saoseo
- ボスキアポ Poschiavo
- フエドレーオ Parco Nazionale dello Stelvio



各会場間の交通時間

- ・ ミラノ → サンタカテリーナ (ステルヴィオ国立公園) 約3時間30分
- ・ サンタカテリーナ → ソンドリオ 約2時間
- ・ サンタカテリーナ → キアベンナ 約2時間40分
- ・ ソンドリオ → キアベンナ 約1時間
- ・ キアベンナ → マデージモ 約40分
- ・ 積雪状況、休憩また交通の流れの事情により、+20分の誤差はあるかもしれない

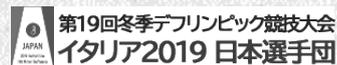
サンタカテリーナ (スキー競技、スノボ競技、クロスカントリー競技)

ソンドリオ (開会式会場)

キアベンナ (閉会式会場、チェス競技・アイスホッケー競技)

マデージモ (カーリング競技)

※チェス競技はキアベンナから車で数分のホテル

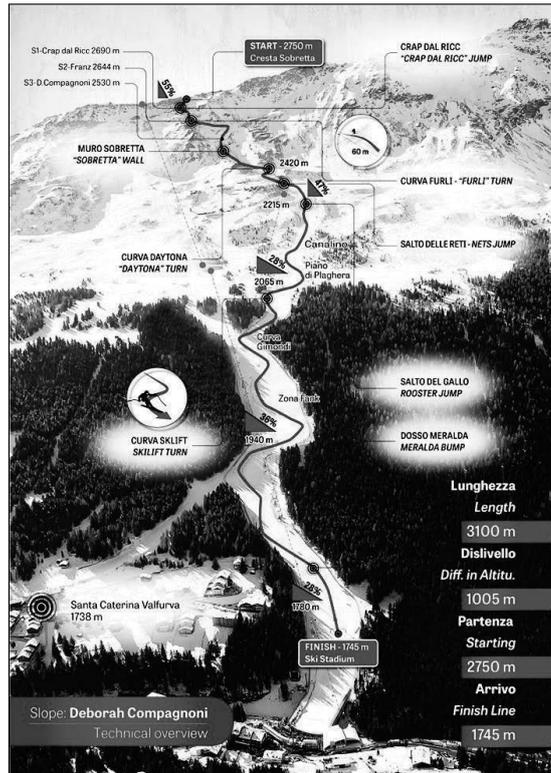


CHIAVENNNA キアベンナ

アクレ・聴力検査・閉会式

- ・ ミラノ空港に着いた後、まずキアベンナに向かい、アクレ手続きや求められれば聴力検査を受けることになる
- ・ 長時間待機になるため、施設脇にテントを設営し、休めるようにすること
- ・ アイスホッケー決勝が終われば、そのまま閉会式を行う (フェアウェルパーティー会場も近く)
- ・ 空港からキアベンナ、各競技会場までシャトルバスがある
キアベンナで日本選手団は分かれてそれぞれの会場に向かう
- ・ ICSDオフィス、聴力検査施設あり





SANTA CATERINA サンタ・カテリーナ

アルペンスキー・スノーボード

- ・コースの最大高さは2600m台
- ・リフトチケットはアクレに含まれる
- ・山頂には食事等できるカフェ、中腹には簡易診療所がある
- ・スノーボード競技ではもし、雪が少なければ山頂から中腹、雪が多ければ中腹から麓までのコースを考えているとの話
- ・スキー競技では、コースの勾配がきついため安全面を考え、コース脇にネットを整備
- ・スラローム競技はナイターで行う予定
- ・ホテルとリフト乗り場までは車で5分程度
- ・ICSDオフィス、ドーピング検査施設あり



MADESIMO

マデージモ

カーリング

- ・カーリング競技施設は新設
観客席、更衣室、シャワー室など完備
- ・レーンは5レーンになる
- ・施設横や近くに飲食店がいくつかある
- ・ホテルと施設は徒歩5分程度
- ・ICSDオフィスやドーピング検査施設は施設から歩いて数分
- ・マデージモへの道はかなり狭く、またつづら折りであるため、移動負担は大きい
- ・キアベンナからマデージモまで車で40分



SONDRIO ソンドリオ

開会式

- ・ソンドリオ市の中心にあるガルバリディ広場で開会式を行う
- ・広場であるため、誰でも自由に見られる
- ・各競技会場からシャトルバスが出され、広場近くの大通りで待機、そこから広場に向けてパレード行進
- ・開会式は夕方から始まるため、開会式を終えてホテルに戻ったときは何時になるかは分からない。防寒対策を！



第19回冬季デフリンピック競技大会
イタリア2019 日本選手団



日本選手団の誇りを持ち 心を一つに！

アルペンスキーの競技スケジュール

12月13日	10:00 - 12:00 滑降 男子/女子
12月14日	10:00 - 12:00 アルペン複合 男子/女子
12月15日	10:00 - 12:00 スーパー大回転 男子/女子
12月17日	10:00 - 12:00 大回転 男子/女子
12月18日	10:00 - 12:00 回転 男子/女子

スノーボードの競技スケジュール

12月13日	10:00 - 10:20 スロープスタイル 女子
	10:20 - 11:20 スロープスタイル 男子
12月14日	10:00 - 10:20 パラレル大回転 女子
	10:20 - 11:20 パラレル大回転 男子
12月16日	10:00 - 10:20 スノーボードクロス 女子
	10:20 - 11:20 スノーボードクロス 男子
12月18日	10:00 - 10:20 パラレル回転 女子
	10:20 - 11:20 パラレル回転 男子
12月19日	12:00 - 12:20 ビッグエア 女子
	12:20 - 13:20 ビッグエア 男子

カーリングの競技スケジュール

12月11日	09:00 - 11:00 Draw 1 男子
	14:00 - 16:00 Draw 1 女子
	19:00 - 21:00 Draw 2 男子
12月12日	09:00 - 11:00 Draw 3 男子
	14:00 - 16:00 Draw 2 女子
12月13日	19:00 - 21:00 Draw 4 男子
12月14日	09:00 - 11:00 Draw 5 男子
	14:00 - 16:00 Draw 3 女子
	19:00 - 21:00 Draw 6 男子
12月15日	09:00 - 11:00 Draw 7 男子
	14:00 - 16:00 Draw 4 女子
	19:00 - 21:00 Draw 8 男子
12月16日	09:00 - 11:00 Draw 9 男子
	14:00 - 16:00 Draw 5 女子
	19:00 - 21:00 Draw 10 男子
12月17日	09:00 - 11:00 Draw 11 男子
	14:00 - 16:00 Draw 6 女子
	19:00 - 21:00 Draw 12 男子
12月18日	09:00 - 11:00 Draw 13 男子
	14:00 - 16:00 Draw 7 女子
	19:00 - 21:00 Draw 14 男子
12月19日	09:00 - 11:00 準決勝 女子: 1 v 4 and 2 v 3
	14:00 - 16:00 準決勝 男子: 1 v 4 and 2 v 3
	19:00 - 21:00 準決勝 女子
12月20日	09:00 - 11:00 準決勝 男子
	14:00 - 16:00 決勝 女子
	19:00 - 21:00 決勝 男子

⑨ 出発案内冊子

2019 デフリンピック冬季大会

Santa Caterina di Valfurva & Madesimo

2019年12月8日—12月23日

<出発案内>

出発当日のご案内

1. 出発日
 - ① アルペンスノーボード
11月28日(木) 3名
 - ② アルペンスキー
12月5日(木) 6名
 - ③ カーリング(9名)、アルペンスノーボード(2名)
スノーボードフリースタイル(9名)、本部(先発7名)
12月8日(日) 27名
 - ④ 本部(後発10名)
12月9日(月)
2. 集合日・時間 :
 - ① 前日(11月27日・水) 23:00
 - ② 前日(12月4日・水) 22:00
 - ③ 12月8日(日) 09:45
 - ④ 12月9日(月) 09:45
3. 出発時間 :
 - ① 01:55
 - ② 00:50
 - ③ 12:45
 - ④ 12:45
4. 集合場所 : 羽田空港国際線ターミナル 出発階
 - ① 全日空カウンター前
 - ② 全日空カウンター前
 - ③ ルフトハンザ航空カウンター前
 - ④ ルフトハンザ航空カウンター前

1. 搭乗手続について
 - ・チェックインカウンターにてパスポートを提示し荷物を預けます。
 - ・チェックインは個人チェックインとなります。
2. お預けになるお荷物について

無料でお預け頂けるお荷物(スーツケース等)は **お一人様23kg x 2個** までとなります。
※1個あたりは3辺(縦・横・高さ)の和が160cm以内のもの。
 安全上の理由から1個あたりの荷物が32kgを超えるお荷物に関してはお預けいただけません。貨物の取り扱いとなり、別途手続きや高額な料金が必要となりますので、1個あたりの重量は32kgを超えないようご注意ください。

【注意①】可燃性・引火性のスプレー(コールドスプレー等)は機内への持ち込みも預け入れ荷物にもできませんのでご注意ください。もし見つかった場合、没収される場合があります。

【注意②】飛行機に預ける荷物の中にはパスポート、現金、機内で必要なものは入れないでください。
3. 機内持ち込み手荷物について
 - 1) 制限について
お一人様1個 8kg・3辺(55 x 40 x 23cm) 以内
 - 2) 機内に持ち込み頂くもの
 - ・日本出国時に必要な物 : パスポート、搭乗券
 - ・手荷物にした方がよい物 : 現金、貴重品、壊れやすい物、機内で使用するもの
 - ・他、機内であれば便利な物 : スリッパ、ガイドブック、メモ帳、ボールペン、ノートパソコン、携帯電話、ムービーカメラ、カメラ、MP3などの高価なパーソナルデジタル製品、貴重品は受託手荷物に入れず、直接機内にお持ち込み下さい。
航空会社では貴重品の紛失または破損の損害に対していかなる責任も負いません。
 - 3) 機内に持ち込めないもの
 - ・危険物 : あらゆる種類のはさみ、刃物など先の尖った鋭利なものなど危険物になり得るもの。
 - ・液体物 : あらゆる液体物(ジェル状、ペースト状のものも含む)
液体物を機内に持ち込む際には各液体物を100ml以下の容器に移し、これらの容器を12以下の透明なジップロック式の袋<最大16cm x 22cm>に入れ、空港の保安検査の際に別途検査を受ける必要があります。なお、機内に持ち込めるのは一袋までです。

出発前の準備

1. 外貨の準備
 - 1) お小遣いを現金で持って行くのは危険?
多額の現金を持ち歩くのは、非常に危険です。万一、盗難にあたり、紛失したりしてもまったく補償がありません。現金は必要最低限をご準備ください。
 - 2) 現金の準備
日本出発前に5,000円~1万円分程度の現金をユーロに両替しておくとう便利です。
※キャッシュレート2019年11月14日現在 1EUR=120円
 出発当日に成田空港の銀行にて両替できます。当日空港にて両替をされる方は、チェックイン前に両替を済ませてください。なお、日本に戻った際に余った外貨を日本国内に再両替できますが、両替できるのは紙幣だけになります。硬貨はどれだけ集めても両替ができませんのでご注意ください。
2. 持ち物
 - 1) 気候・服装
サンタカテリーナおよびマデーゾモは、イタリア北部のアルプス山脈に囲まれた高山地にあります。気温も低いのでしっかりと防寒具を用意してください。(日中最高気温は-10℃程度)
 - 2) いつも使い慣れたものが“必需品”
寝間着、洗面用具、バス用品(シャンプー等)、タオルなどは、日本のホテルとは異なり、必ずしも備え付けられているとは限りません。必要最低限は使い慣れたものをご準備ください。
また、外国では医師の処方箋がないほとんどの薬は買えません。自分で必要と思われるものについては、各自ご用意下さい。
 - 3) 電圧とプラグ
イタリアのプラグは **Cタイプ** が使用されています。
電圧は220Vで周波数は50Hz。ごくまれに125Vもあります。日本国内用の電化製品はそのままでは使えないので、変圧器が必要になります。ただし、パソコンや携帯、デジタルカメラの充電器は240Vまで対応しているものが殆どなので変圧器は必要ありません。

 - 4) 時差
イタリアと日本の時差は-8時間となります。日本のほうが8時間進んでいます。

出発の流れ

- 羽田空港到着 国際線ターミナルの各航空会社チェックインカウンターへお越しください。
- ↓
- 搭乗手続き チェックインは個人チェックインとなります。**パスポート**をご用意ください。
こちらで搭乗券と、荷物預り証をお受け取り頂きます。
スーツケース（預け荷物）はここで預けます。
※クレームタグは荷物紛失の際に必要となりますのでスーツケースを受け取るまでは大切に保管してください。
- ↓
- セキュリティチェック カメラやパソコンはバックから出し、ポケットは空にしてください。
※金属類のベルトや靴は脱いでください。
※液体物をお持ちの場合、こちらで没収されます。
- ↓
- 出国手続き 出国審査を受ける際に**パスポート**、**搭乗券**が必要になります。
- ↓
- 搭乗 出発時刻の30～40分前までに搭乗ゲートにお集まりください。

出発日別参加者名簿

① 11月28日(木) 3名

08564 28NOV19(木) 羽田/ウイーン 01:55 06:00 (全日空運航・オーストリア航空共同運航便)					
08507 28NOV19(木) ウイーン/ミラノ (マルペンサ) 08:45 10:10 オーストリア航空					
LH1857 20DEC19(金) ミラノ (マルペンサ) /ミュンヘン 13:10 14:20 ルフトハンザ					
LH714 20DEC19(金) ミュンヘン/羽田 15:35 10:55 (21DEC)					
Sumame	Firstname	Gender	種目	役務	
1	KASAI	AKKO	F	アルペン/ボ	監督
2	NOFUJI	YUKI	M	アルペン/ボ	コーチ
3	OKAWURA	TAKAKI	M	アルペン/ボ	選手

② 12月5日(木) 6名

MH203 05DEC19(木) 羽田/フランクフルト 00:50 05:20 全日空					
LH248 05DEC19(木) フランクフルト/ミラノ (マルペンサ) 07:30 08:40 ルフトハンザ					
LH1857 20DEC19(金) ミラノ (マルペンサ) /ミュンヘン 13:10 14:20					
LH714 20DEC19(金) ミュンヘン/羽田 15:35 10:55 (21DEC)					
Sumame	Firstname	Gender	種目	役務	
1	KIFAD	DAICHI	M	アルペン	選手
2	NAKAWURA	KODAI	M	アルペン	選手
3	YOSHIDA	AYANE	F	アルペン	選手
4	TANAKA	TERUYA	M	アルペン	監督
5	KAWASAKI	JUN	M	アルペン	トレーナー
6	UENO	HDETAKA	M	アルペン	コーチ

③ 12月8日(日) 27名

LH715 08DEC19(日) 羽田/ミュンヘン 12:45 16:45 ルフトハンザ					
LH1862 08DEC19(日) ミュンヘン/ミラノ (マルペンサ) 18:35 19:40					
LH1861 18DEC19(木) ミラノ (マルペンサ) 17:05 18:15					
LH4924 18DEC19(木) ミュンヘン/羽田 20:00 15:40+1					
Sumame	Firstname	Gender	種目	役務	
1	TSUGA	YUKI	M	アルペン/ノーボード	トレーナー

LH715 08DEC19(日) 羽田/ミュンヘン 12:45 16:45 ルフトハンザ					
LH1862 08DEC19(日) ミュンヘン/ミラノ (マルペンサ) 18:35 19:40					
LH1857 20DEC19(金) ミラノ (マルペンサ) /ミュンヘン 13:10 14:20					
LH714 20DEC19(金) ミュンヘン/羽田 15:35 10:55 (21DEC)					
Sumame	Firstname	Gender	種目	役務	
1	AWANO	TATSUHIITO	M	本部	総監督

LH715 08DEC 羽田/ミュンヘン 1245/1645					
LH1862 08DEC ミュンヘン/ミラノ (マルペンサ) 1835/1940					
LX1613 22DEC ミュンヘン (マルペンサ) 1000/1105					
LX160 22DEC チューリヒ/成田 1300/0855 (23DEC)					
Sumame	Firstname	Gender	種目	役務	
1	TAKAGARI	TAKESHI	M	APスノーボー	手話通訳
2	KOJIMA	TAKAO	M	スノーボードフリースタイル	コーチ
3	NAGUMO	TOSHIMITSU	M	スノーボードフリースタイル	コーチ
4	OHASHI	KAZUMI	M	スノーボードフリースタイル	スタッフ
5	OKUDA	KAZUO	M	スノーボードフリースタイル	監督兼選手
6	HANASHIMA	DAISUKE	M	スノーボードフリースタイル	選手
7	ONODA	EIJI	M	スノーボードフリースタイル	選手
8	OKAMOTO	NOBUHIKO	M	スノーボードフリースタイル	選手
9	HANASHIMA	RYOKO	F	スノーボードフリースタイル	選手
10	OKUDA	ERIKO	F	スノーボードフリースタイル	選手
11	TAKEKAWA	SUMIKO	F	カーリング	スタッフ
12	ISHIDA	JUNICHI	M	カーリング	スタッフ
13	YANAMOTO	NAOKI	F	カーリング	スタッフ
14	SUNADA	TAKESHI	M	カーリング	スタッフ
15	ARAYA	JUNICHI	M	カーリング	選手
16	ARAYA	HISHO	M	カーリング	選手
17	YONETA	YOSHIMITSU	M	カーリング	選手
18	NAKAWURA	TETSUYA	M	カーリング	選手
19	MATSUHAS	KANAMU	M	カーリング	選手
20	KURANO	NAOKI	M	本部	スタッフ
21	KUROISHI	ERIKO	F	本部	スタッフ
22	TAKEKOSHI	YUKARI	F	本部	スタッフ
23	UMEZAWA	HIROSHI	M	本部	スタッフ
24	KAWOSHITA	KAZUKO	F	本部	スタッフ
25	HAYASHI	TAKAO	M	本部	スタッフ

④ 12月9日(月) 10名

LH715 09DEC 羽田/ミュンヘン 1245/1645					
LH1862 09DEC ミュンヘン/ミラノ (マルペンサ) 1835/1940					
LX1613 22DEC ミラノ (マルペンサ) /チューリヒ 1000/1105					
LX160 22DEC チューリヒ/成田 1300/0855 (23DEC)					
Sumame	Firstname	Gender	種目	役務	
1	OGURA	TAKEO	M	本部	団長
2	KASE	DAISUKE	M	本部	広報
3	SHIMIZU	MASAKI	M	本部	医師
4	KUSUME	SHINZO	M	本部	医師

LH715 09DEC(月) 羽田/ミュンヘン 12:45 16:45 ルフトハンザ					
LH1862 09DEC(日) ミュンヘン/ミラノ (マルペンサ) 18:35 19:40					
LH1857 20DEC19(金) ミラノ (マルペンサ) /ミュンヘン 13:10 14:20					
LH714 20DEC19(金) ミュンヘン/羽田 15:35 10:55 (21DEC)					
Sumame	Firstname	Gender	種目	役務	
1	KARNO	ISAO	M	本部	広報
2	SUNAGAWA	AYUMI	F	本部	AT
3	UCHIDA	MITSURU	F	本部	輸送
4	NORIMOTO	YUKIO	M	本部	手話通訳
5	NAKANISHI	JUN	M	本部	総務
6	SHINOZAKI	NAOKO	F	本部	看護師

現地連絡先

滞在先:

住所：
TEL：
URL：

国内連絡先

手配旅行会社：株式会社グロリアーツ

住所： 〒107-0062 東京都港区南青山5丁目4-30 ONAC2F
TEL/FAX： 03-6826-3434 / 03-6826-5535
営業時間： 9:45-18:15 (月~金) 土日祭日休み
緊急連絡先： 090-4725-8457

担当：林孝雄

e-mail: takao.hayashi@gloriatours.onmicrosoft.com
携帯： 090-1434-0848

第 19 回冬季デフリンピック
(於イタリア)

日本選手団 必携マニュアル



大会期間：2019年12月12日(木)～12月21日(土)
派遣期間：2019年12月8日(日)～12月23日(月)

一般財団法人 全日本ろうあ連盟
デフリンピック派遣委員会

【内 容】	PAGE
大会期間中の注意事項	1
日本選手団現地体制図	4
” 名簿	5
ドーピング検査の手順①	7
ドーピング検査の手順②	10
ドーピング検査を受けたら	14
競技中における抗議(プロテスト)について	15
報告書作成について	18
危機管理体制	19
大会一般規則 (原文URL: http://www.deaflympics.com/load/general-technical-rules-deaflympics/winter)	20
デフリンピック規則 (原文URL: http://www.deaflympics.com/load/deaflympics-regulations)	27
聴力検査規則 (原文URL: http://www.deaflympics.com/pdf/AudiogramRegulations.pdf)	52

【大会期間中の注意事項】

1 はじめに

大会へ出場するにあたって、自分の技術の程度や海外遠征など、不安な状態にあると思われる。参加決定後、選手団本部、競技団体やコーチからいろいろ注意、指示があると思われるが、項目が多すぎたり、メモに書き落したりということがあつては、折角のチャンスを十分に生かせない結果になることも予想されます。ここでは、心構え、準備から帰国後までの内容を記しておきます。

2 心構え

- ★ 日本代表選手は「公人」であり、自分の行動や発言（SNS 等の発信含む）はすべての人から常にどこかで見られていることを忘れず、日本代表選手としての自覚を持って行動する。
- ★ 自分が今まで積み重ねた練習やトレーニングに自身を持ち、代表選手また日本選手団として心一つに（チームジャパン）として悔いのないようベストを尽くして戦う。
- ★ 大会参加の経験を生かし、後輩のために役立てる。

3 大会参加まで

- 1) 選手団本部やコーチからの連絡事項
 - ① 身体に関すること
 - ・ 健康状態の確認
 - ・ 常備薬、排便などの生活習慣チェック
 - ② 競技に関すること
 - ・ エントリー種目の決定
 - ・ 競技規則の熟知
- 2) 生活態度に関して
 - ① 本部からの指示事項は必ず守る。
 - ② 集団生活のマナー（ルール）を守る。
 - ・ 時間の厳守
 - ・ 私物の管理（持ち物に名前を付ける）
 - ・ あいさつの習慣
 - ・喫煙場所の厳守
 - ③ 生活習慣を合わせること
 - ・ 食事、シャワー浴、ベッド（メイキングも含む）
 - ・ バランスのよい食事に気をつけること。
 - ・ 貴重品は各自で管理すること。
 - ・ 時間的、場所的にも制約を受けることが多くあるが、お互いのペースを尊重しながら、睡眠、食事、トレーニング、競技、応援、ミーティング、洗濯、排せつ等の生活リズムを自分でコントロールし、規則正しい生活に心がける。
- 3) 所属するろう協会、居住する都道府県障害福祉課への連絡について。
 - ① 所属するろう協会や都道府県・指定都市の障害福祉課等と十分連絡を取り、挨拶などを欠かさ

- ないこと。
- 4) その他
 - ① 国際手話に慣れておき、簡単な会話も学習しておくこと。

4 大会前までの練習について

- 1) 大会に合わせた練習計画を立て、質の高い練習をすること。
- 2) 初めての国際大会では、雰囲気になれなかつたり、あがつたりするので、各自で競技に集中する方法を持つておく。
- 3) 選手 1 人になつても競技に参加できるように、競技会の仕組みについて理解しておくこと。
- 4) コーチの指示をメモし、頭にいられておくこと。
- 5) 大会参加までの練習で、困つたこと、わからないことがあれば、選手団本部や競技チームに連絡、相談すること。
- 6) 練習終了時に身体のチェックを行なうこと。

5 ユニフォームの着用について

日本選手団として参加する者は、その自覚と誇りを持って選手団公式ユニフォーム（以下「公式ユニフォーム」）を着用しなければならない。

日本選手団より支給された公式ユニフォームは以下の通りである。

- 1) 共通ユニフォーム（スキーウェア、ウォーマーウェア）
- 2) 共通ユニフォームの着用について
 - 結団式、開会式、閉会式及び表彰式、解団式は共通ウェアを着用すること。
 - ※この共通ユニフォームは他人に譲つたり交換することはできません。
 - ※靴は黒やダークな色とすること。
- 3) バッジ
 - 選手団員にはバッジを 1 個配布するので胸もしくは襟元に付けること。

6 大会会場

- 1) 競技場、食堂、宿舍、その他の関係施設の位置を確認すること。
- 2) 大会では、雰囲気になれなかつたり、あがつたりするので、各自で競技に集中する方法を持つておくこと。
- 3) なるべく多くの参加者と親交を深めるように努力し、またそれぞれが、日本チームの一員として責任を持つた行動をすること。
- 4) 自分の競技が終了しても、日本チームの他の人でまだ競技を控えている人もいるので、他の人への心づかいを忘れないこと。
- 5) 無断に宿舍、競技場を離れないこと、また、単独行動はとらないこと。
- 6) 部屋をきれいに使うこと。
- 7) パスポート、現金、貴重品の管理をしっかりすること。
- 8) 生水は飲まないこと。

7 毎日の報告について〔重要事項〕

1) 毎日の健康チェックについて

- ① 各チームとも、毎朝出発前までにチーム全員（選手・スタッフ）の健康状態を指定の用紙（別紙参照）に記入し、メディカルルーム前のボックスに入れること。
- ② 体調のすぐれないメンバーがいた場合、速やかにメディカルスタッフと相談すること。

2) 毎日の試合結果について

- ① 各チーム監督は毎日のチームの行動日程及びリザルトを宿舎に戻り次第、選手団本部に提出すること。
- ② 公式記録の発表は、選手団本部においてもインターネットで確認する予定。

2) ドーピング等に関して

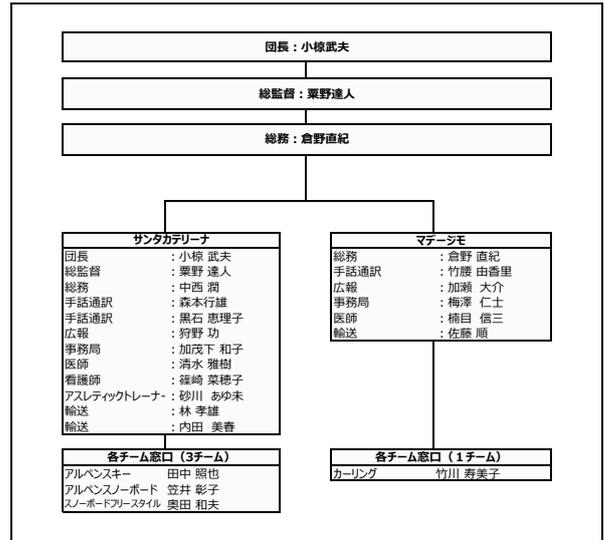
- ① サプリメントや薬を服用する場合は必ずドクターに相談してから服用すること。
- ② ドーピング検査や尿検査は、いつでも実施される可能性があることを認識し、居場所情報の提出を怠らないこと（特に外出時）。

8 危機管理〔重要事項〕

- ・自分の安全を守るのは結局は「自分自身」であることを自覚すること。
- ・安全対策のため、できる限り不要不急の場には近づかない、立ち入らないこと。

これらの条件遵守期間は競技種目に関わらず全員
2019年12月7日～12月23日までとする。

【 日本選手団組織図 】



第19回冬季デフリンピック 日本選手団一覧 2019/10/8現在

種目	種別	スタッフ 選手	選手名及び 出場希望競技種目	名前	年齢	性別	住所	所属団体	競技種目
1	アルペンスキー	スタッフ	監督	田中 明也	46	男	東京都足立区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟 公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	トリノアタランタ株式会社
2	アルペンスキー	スタッフ	コーチ	上野 美香	41	女	東京都上野区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	社内教育委員会
3	アルペンスキー	スタッフ	トレーナー	川崎 純	48	男	東京都荒川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	沼津市立高等学校
4	アルペンスキー	選手	選手 スーパー大回転 スーパーコンビ 水鏡 回転	中野 寛大	26	男	東京都大田区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	社内教育委員会
5	アルペンスキー	選手	スーパー大回転 スーパーコンビ 水鏡 回転	北城 大地	26	男	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	公益社団法人株式会社
6	アルペンスキー	選手	大回転 回転	高田 朝雄	27	男	神奈川県横浜市	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	東京府立所
7	アルペン スノーボード	スタッフ	監督	加藤 孝子	44	女	東京都目黒区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	東京都立所
8	アルペン スノーボード	スタッフ	コーチ	野藤 美香	32	女	神奈川県横浜市	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	東京都立所
9	アルペン スノーボード	スタッフ	AT	津賀 朝雄	39	男	東京都世田谷区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	東京都立所
10	アルペン スノーボード	スタッフ	手話通訳	高野 美香	41	女	東京都足立区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	公益社団法人株式会社
11	アルペン スノーボード	選手	スーパー大回転 スーパーコンビ 水鏡 回転	岡村 大晃	18	男	東京都足立区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	公益社団法人株式会社
12	スノーボード フリースタイル	スタッフ	コーチ	小島 智雄	40	男	神奈川県横浜市	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社アズ
13	スノーボード フリースタイル	スタッフ	コーチ	高野 美香	44	女	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	
14	スノーボード フリースタイル	スタッフ	トレーナー	大橋 一博	29	男	東京都下高井町	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	全国キッズスポーツ専門学校
15	スノーボード フリースタイル	スタッフ 選手	監督 クロス スノーボード ビッグエア	高田 和夫	50	男	東京都中央区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	パナソニック株式会社
16	スノーボード フリースタイル	選手	クロス スノーボード ビッグエア	花島 大輝	44	男	神奈川県横浜市	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	キヤノン株式会社
17	スノーボード フリースタイル	選手	クロス スノーボード ビッグエア	小野田 誠次	30	男	東京都荒川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社デザインセンター
18	スノーボード フリースタイル	選手	クロス スノーボード ビッグエア	岡本 智哉	41	男	東京都中央区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社LIXIL International
19	スノーボード フリースタイル	選手	クロス スノーボード ビッグエア	花島 智子	46	女	神奈川県横浜市	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社オー・エム・エム
20	スノーボード フリースタイル	選手	クロス スノーボード ビッグエア	後田 美穂子	44	女	山梨県中井町	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	キヤノンファインテック株式会社

第19回冬季デフリンピック 日本選手団一覧 2019/10/8現在

種目	種別	スタッフ 選手	選手名及び 出場希望競技種目	名前	年齢	性別	住所	所属団体	競技種目
21	カーリング	スタッフ	監督	川川 寿子	49	女	東京都中央区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	東京都立所 公益社団法人株式会社 公益社団法人株式会社
22	カーリング	スタッフ	コーチ	石田 幸一	47	男	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社イデオスポーツ
23	カーリング	スタッフ	トレーナー	高野 美香	41	女	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	埼玉県立高等学校
24	カーリング	スタッフ	手話通訳	伊藤 浩志	58	男	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	
25	カーリング	選手	男子団体戦	高橋 直一	44	男	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社立所
26	カーリング	選手	男子団体戦	宮本 雅博	27	男	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社フジノエ電機製作所
27	カーリング	選手	男子団体戦	本田 直光	52	男	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社品川工業株式会社
28	カーリング	選手	男子団体戦	中村 新雄	41	男	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	アパレル株式会社
29	カーリング	選手	男子団体戦	和泉 孝	35	男	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社日立ロジスティクス・サービス
30	ボウリング	スタッフ	監督	中島 誠	47	男	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	
31	ボウリング	スタッフ	監督	栗野 達人	43	男	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	
32	ボウリング	スタッフ	監督	高野 美香	41	女	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	三井物産株式会社
33	ボウリング	スタッフ	監督	中島 誠	47	男	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	
34	ボウリング	スタッフ	手話通訳	高野 美香	41	女	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	公益社団法人株式会社
35	ボウリング	スタッフ	手話通訳	高野 美香	41	女	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社
36	ボウリング	スタッフ	手話通訳	竹藤 由香里	39	女	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社ニルカ
37	ボウリング	スタッフ	監督	高野 美香	41	女	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社
38	ボウリング	スタッフ	監督	加藤 孝子	44	女	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社
39	ボウリング	スタッフ	監督	高野 美香	41	女	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社
40	ボウリング	スタッフ	監督	高野 美香	41	女	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社
41	ボウリング	スタッフ	監督	高野 美香	41	女	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社
42	ボウリング	スタッフ	監督	高野 美香	41	女	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社
43	ボウリング	スタッフ	監督	高野 美香	41	女	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社
44	ボウリング	スタッフ	監督	高野 美香	41	女	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社
45	ボウリング	スタッフ	監督	高野 美香	41	女	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社
46	ボウリング	スタッフ	監督	高野 美香	41	女	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社
47	ボウリング	スタッフ	監督	高野 美香	41	女	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社
48	ボウリング	スタッフ	監督	高野 美香	41	女	東京都品川区	公益社団法人東京都障害者スポーツ実業団連盟	株式会社

【ドーピング検査の手順】

1. 全体的な考え方

ドーピング検査の対象競技者は、競技順位やくじで決定されます（従って、予告なしに通告されます）。

(1) 行動の監視

ドーピング・コントロール・オフィサー（DCO）からドーピング検査対象となったと通告を受けた時点から検査終了まで、選手の全行動は DCO から監視を受けることになります。

(2) 検査の種類

尿検査と血液検査の 2 種類となります。

選手が検査の種類を選択することはできません。注意してください。

(3) 検査途中での異物混入を防ぐために

検査中は外部から検体（尿・血液）への異物混入を防ぐために、容器の選択、ボトルへの分注、ボトルの密封まで、選手本人と DCO 双方が確認した上で各操作が実施されます。検体は、密封された状態で検査機関に搬送され、成分が分析されます。

(4) コーチ等の同伴

選手にはコーチやチームドクターなどの同伴者を 1 名帯同することが認められています。特に視覚障害のある選手や上肢機能に障害のある選手については、採尿も同伴者が手伝うこともできます。未成年の選手には、検査が正しく行われたかを確認するためにコーチを同伴することが強く勧められていますが、どうしても難しい場合には、DCO によりシャベロンを 1 名配置するなど、DCO と選手が二人きりで検査を行わないように配慮されています。なお、通訳は上記同伴者の人数に含まず帯同することができます。

2. 検査手順

以下は検査手順ですが、検査の際にはドーピング・コントロール・オフィサー（DCO）が丁寧に一つずつ手順を説明してくれますので、その指示に従って検査を受けてください。また、(公財)日本アンチドーピング機構（JADA）のサイト上（ドーピング検査の流れ）に、手順が紹介されているので、必ず大会前に見ておくようにしてください。

アスリートサイト <http://www.realchampion.jp/>

アスリートに求められる世界基準の手続き <http://www.realchampion.jp/process>

尿検査 http://www.realchampion.jp/process/examine_urinalysis

血液検査 http://www.realchampion.jp/process/examine_blood

1. ドーピング・コントロール・オフィサーから、検査対象者になったことを通告されたら、検査への同意を確認するための通告書類に署名する（検査を拒否することは規則違反となる。）

* DCO から検査対象になった旨を伝えられます。通告後は、速やかにドーピング・コントロール・ステーションに出席してください。表彰式や別種目へ出場する、メディアに対応する、ウォームダウンを行う、必要な医療処置を受ける、同伴者または通訳を探す、写真付きの身分証明書を探すなどの行動は、DCO にその旨を伝え、許可を

-7-

受けてください。DCO あるいはシャベロン（検査対象者への通知およびドーピング・コントロール・ステーションまでの付き添いし監視を行う検査係員）の同伴があればこれらを行うことは可能です。検査には 1 名の同伴者（コーチなど）を連れて行くことができます。検査を拒否することは規則違反とみなされます。

（ここからは尿検査の場合を説明します。基本的な流れは血液検査も一緒です。）

2. 尿意をもよおすまでウエイティングルームで待機する。

* 検査室には安全なミネラルウォーターなどが用意されていますので、飲みながら尿意を催すまで待ちます。採取した尿量が 90ml 以下の場合は、再度の採尿が必要です。

* ドーピング検査の際は対象選手だけでなく同伴者（スタッフ、通訳など）もきちんと手を洗ってから検査キットなどにさわるように注意書きを加えてください。体につけている化粧品や日焼け止めからグリセリンなどの禁止物質が混入することを防ぐためです。

3. 待機中に、いくつかの採取カップの中から、使用するカップを自ら選ぶ。

* 必ず複数のカップの中から自分で選択します。破損や汚れがないか、気をつけて確認しましょう。

4. 採尿する。

* 同性のオフィサーと一緒にトイレに入り、選手が正しく採尿しているかどうかを目で見て確認します。

5. 採取した尿を保管するためにいくつかの密封されたサンプルキットの中から、使用するものを自ら選ぶ

* サンプルキットには外箱に確認用のシールが貼ってあります。また中にボトル 2 本が入っています。あらかじめサンプルキットが密封されているか、また容器に破損がないか確認します。

6. 2 本のボトルに、指示された量の尿を分注し、しっかりとふたをする。

* 指示に従い、自分で行います。

7. 残った尿で、比重が測定される

* DCO が、カップに残った尿に尿スティックを浸して測定するか、または屈折計を用いて比重を測定します。

8. 検査 7 日以内に使用した薬物・サプリメントについて申告する。

* 大会前 7 日以内に使用した処方箋や処方箋のない薬および栄養補助食品類（サプリメント）を記載して下さい。吸入喘息治療薬（例えば吸入ベータ 2 作用薬、糖質コルチコイド吸入薬）を使用した場合、あるいは糖質コルチコイドの局所注射（関節内、関節周囲、腱周囲、硬膜外、皮内）をした場合は、診断名、使用した薬品名、および処方した医師の氏名や病院名などを記載して下さい（**常時、薬名、サプリメント名とその成分がわかるものをリスト（日本語と英語）にして所持すること**）

9. ドーピング検査公式記録書にすべての関係者が署名した後、控えを受け取る

* 選手と同伴者も記録書の内容が間違いないか確認し、署名をします。

10. その後の措置

* 結果は 2 週間程度で、公式検査機関を通して実施団体及び JADA に報告されます。結果が陰性であった場

-8-

合には JPC および選手へは連絡は入りません。陽性の反応が検出された場合のみ、JADA より選手へ直接通知されます。JPC にも連絡が入りますので、選手の所属競技団体にその旨を伝えます。その後、聴聞会を経て選手の処分（罰則）が決定されます。

採尿の方法

(株) LSI メディエンスウェブサイトより

DCO : ドーピングコントロールオフィサー

選手にドーピング検査対象であるという通告。

通告後 1 時間以内にドーピングコントロールステーションで受付。

待合室で飲み物を飲みながら待機。

検査室で採尿カップを選ぶ。

専用トイレで同様の DCO とともに採尿。90ml 以上採る。認めること。

サンプルキットを選択。

* コード番号や未開封を確認。

コンテナから A・B ボトルを取り出す。

サンプルの分配。採尿カップから B ボトルへ 25ml、残りを A ボトルへ入れる。

A・B ボトルをコンテナに納める。

検査 7 日前に使用した薬剤・サプリメントを申告。

公正に採尿作業が行われたことを確認してサイン。

終了 * DCO は検本を保管。選手は控えを受け取る。

※「血液検査」については次頁を参照してください。

【注意】

① 現在使用している「くすり」は、使用目的ごとに、名前、メーカー、薬品名、番号などを英語でリストにし、常に所持して下さい。（検査が必要となります。）

② ドーピング検査を受けたら、必ず「ドーピング検査報告書」を本部メディカルに提出してください。

-9-

Blood Testing

ドーピング検査(血液)

クリーンなアスリートであることを、
証明するために。

ドーピングの手法が巧妙化してきている。
尿検体だけで潔白を証明することが難しくなっています。
アスリートとして血液検査に対する心構えも必要です。

JADA
Japan Anti-Doping Agency
スポーツ振興事業

検査手順と注意点

アスリートは、自分がクリーンであることを証明するために、いつでもどこでも検査に対応する義務があります。
ドーピング検査(血取)の手順と注意すべき点を、期間や不安をクリアにしていきましょう。
不安なこと、気になることがあれば、気軽にドーピング検査員(ドーピングコントロールオフィサー: DCO)に聞いてください。

- 1** 採血前に運動をしていた場合は、運動終了後2時間待機した後の採血となります。
※分析によっては、運動終了後であっても長時間待機した後に採血できる場合もあります。



待機



書類作成・体調確認



キット選び・確認開封

1

ドーピング検査は国際基準に則って行われます。DCOから検査通告を受けたら「通告書」にサインをし検査を開始します。その後、検査室に到着したら椅子に座って両足を地面についた状態で10分間安静にします。リラックスした状態で待つてもかまいません。

注意!
10分間の安静中に立ち上がると、その後座った時点から再度10分間安静に座り続ける必要があります。
採血本業のアスリートは、成人の同伴者を連れてくる必要があります。

2

DCOから渡された重要事項などが記載された書類をよく読み、必要事項を記入してください。医師・看護師の採血者から問診が行なわれますので体調不良やアレルギーなどは申し出てください。

注意!
採血時の器具でアレルギー反応を起こしてしまう方がいます。ゴムやアルコールにアレルギー反応がある方は、事前に伝えてください。
過去の採血時に気分が悪くなったことがある、失神したことがある方は、事前に伝えてください。

3

検査に使用する器具を複数の中ら選び、器具に不審な点(傷や開封された形跡など)がないことをしっかり確認してください。またバーコードシールとキットの検体番号のチェックも必要です。問題がなければキットを開封し、手前側に割り、机の上に置いてください。



検体番号の確認 キットの開封



血液採取・止血



検体番号の確認
検体の袋詰め



書類作成・控への受取

4

採血を行う方の腕を採血者と相談して決めてください。採血後、絆創膏を貼りますので、採血者の指示をしっかり聞き、絆創膏の上から指で押さえて止血しましょう。

注意!
採血者の指示に従ってください。
採血の際はリラックスしてください。
内出血予防のため、採血後20分間は採血した腕を強く使う運動等は避けてください。

5

採血管に貼られた検体番号とキットのフタ、ポールの番号がすべて一致していることを確認し、カチカチという音が鳴らなくなるまでフタを締めDCOに提出してください。封印されたポルをDCOが輸送用のビニール袋に入れてください。



止血作業が終わったら、採血者が採血前に検体番号の貼付をします。

6

必要事項を記入し、書類を完成させます。都度、サインを求められますが、必ず書類内容に間違いがないか確認の上、署名してください。書類の控えを受け取り、検査終了後は検査履歴管理の目的で、自分でしっかりと保管・管理することをお勧めします。

注意!
必ず書類内容を確認してから、サインしてください。
検査中、不審に思った点や気になることがあった場合、コメントとして記録に残すことができます。

血液検査Q&A

Q 通常の採血と違いはあるの?

A 病院等で行われる採血と似ています。肘の正面にある静脈から採取します。
※採血直後の腫れや赤みは正常な反応です。

Q どのくらいの量を採取するの? 痛抜に支障は出ない?

A 3~20ml程度(採血回1~4本)です。最大20ml程度の採血では競技に支障がないと言われています。

Q 毎回、尿と血液両方とるの?

A どちらか一方の場合もあれば、両方の検体を採取する時もあります。両方の検査を行う際、採血の順番はDCOの指示に従ってください。

Q 尿検査同様、飲み物は飲んでもいいの?

A 尿検体採取の時同様、飲み物は検査室に用意しています。用意している以外の飲み物は自己責任で飲んでください。

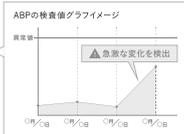
Q 血液採取は他いので尿検査にしてみらえる?

A 指定された採血検体の変更はできません。検体受領の届紙はアンチ・ドーピング規則違反と判断される可能性があります。

Q ABPってなに??

A アスリートバイオロジカルパスポート(ATNete Biological Passport: ABP)といい、アスリートから定期的に検体を採取し分析する検査方法。1回のドーピング検査において禁止物質・禁止方法の存在が検出されなかったとしても、経時的な検査データで異常な変化が検出され、それが禁止物質・禁止方法の使用の結果であることが証明されると、アンチ・ドーピング検出違反となります。

注意! ABPは血液検査、尿検査どちらも実施されています。



薬に関する正確な情報をもう!
アンチ・ドーピングの安心トライアングル
薬の成分や禁止物質・禁止方法について、「Global DRO」と「スポーツファーマシスト」を上手に活用して正確な情報を確認しよう。

- スポーツファーマシスト 最新のアンチ・ドーピングに関する知識・情報を持つJADA公認の薬の専門家(薬剤師)。
- Global DRO WEBやスマートフォンで、薬の成分に禁止薬物が含まれていないか検査が可能。



アンチ・ドーピングに関するWEBサイト | JADA | アンチ・ドーピングに関する大切なお知らせ
アスリートサイト | 血液検査をはじめ、アスリートにとって必要な情報を掲載した特設サイト



大会期間中にドーピング検査を受けた場合

- 必ず、本部メディカルに行き、報告書の提出をお願いいたします。
- 書式は本部メディカルで準備をしています。
- 複数回受けた場合、その都度報告書の提出が必要です。

2019年12月 日

ドーピング検査報告書

ドーピング検査を受けたら本部メディカルチームまで報告してください。

ドーピング検査を行った日 時	2019年12月 日 午前・午後 時ごろ
競技	
種目	
ドーピング検査を受けた選手名・年齢	() (歳)
ドーピング検査を受けた会場	
メダルの有無	金・銀・銅 [?]以上/?(銅)入賞5位:]
ドーピング検査の種類	尿検査・血液検査
問診票 どちらの欄にチェックをください	あり (氏名:) (役職:) なし
特記事項 ドーピング検査時に気になったことなどを お書きください。	

【競技中における抗議について】

- 抗議する場合には、必ず事前に総監督に相談をすること。
- 下記を熟読し、手順の流れについてつかむこと。
- 抗議する際の申し立て金については競技団体負担とする。
- 抗議の委託金は US \$ 100

大会技術規則 (General Technical Regulations-) より

11. 権限・判定権

11.1 ICSD 理事会は、組織委員会及び大会参加国連盟より提訴された冬季大会や試合に関するあらゆる訴訟問題に対して、最終決定を下すことができる最高権力を有する。

11.2 各競技において試合の審判員 (ground judges) に対する抗議は、ICSD が定める冬季デフリンピック抗議用紙に英語で記入して提出しない限り、審判員によって判定される。この抗議用紙は各競技ごとに定められた時間内に提出されなければならない。(各競技の技術規程参照)

11.3 競技役員 (official) の判断に対する抗議は、該当する競技の抗議委員会 (Protest Committee) の各委員に対して申し立てることが可能であるが、その際には 100 ドルの保証金を納める。

11.4 抗議委員会は抗議を受けてから競技ごとに定められた時間内に判定

-15-

を下し、抗議を提出した連盟に対してすぐに判定の結果を通知しなければならない。

11.5 抗議委員会の下した判定に対して抗議する場合、その判定が下されてから 4 時間内に、抗議をする連盟の役員から審査員団に提訴しなければならない。

11.6 提訴が受理された場合、その提訴を起こした連盟へ 50 ドルの保証金が返却される。

11.7 聴力、ドーピング検査、選手の国籍問題に関する訴えは ICSD 理事会の単独判定とする。

11. AUTHORITY AND JURISDICTION

11.1. The Executive Board of ICSD constitutes the supreme authority which will decide, as the last resort, all disputes relating to the Winter Deaflympics, on appeal by the Organizing Committee or the participating National Deaf Sports Federations.

11.2. Protests made to ground judges, in matters of competition, are judged by them and are without appeal unless a protest has been made in writing (in English) on the official Winter Deaflympics protest form. The protest must be delivered within a fixed time for each sport (see the technical regulations for each sport).

11.3. Protests against a decision of an official can be made to any member of the Protest Committee of the sport in question and must be accompanied by a deposit of US \$100.00.

-16-

11.4. The Protest Committee must decide on the protest within the time limits set forth for each sport, and the federation in question must be informed about the decision immediately.

11.5. An appeal against the decision of Protest Committee can be addressed by an official of the protesting federation to the Jury of Appeal of the Winter Deaflympics within four hours after the decision of the first Protest Committee has been declared.

11.6. If a protest is accepted, the deposit is to be returned to the protesting federation.

11.7. Appeals regarding hearing ability, doping tests and nationality of an athlete are solely the jurisdiction of the Executive Board of ICSD.

-17-

【報告書作成について】

大会終了後、日本選手団員は「全員」報告書の作成が義務付けられております。

【手順】

日本選手団員は報告書を作成→競技団体で取りまとめ→派遣委員会事務局へ提出。

【事務局への提出〆切】

2020年1月17日(金) 厳守

※事務局提出〆切りを勘案し各競技団体内の〆切を決められますよう、お願い致します。
※こちらの報告書は助成金を受けた結果を報告するためのものです。

■ 3つのパターンでフォーマットを作成しましたので、添付のワード書式を利用して、下記の内容で報告書の作成をお願いいたします。

● 団長・競技監督 (競技チーム全体のトップ)

- ① 選手・役員の選考基準と方法
- ② 総評

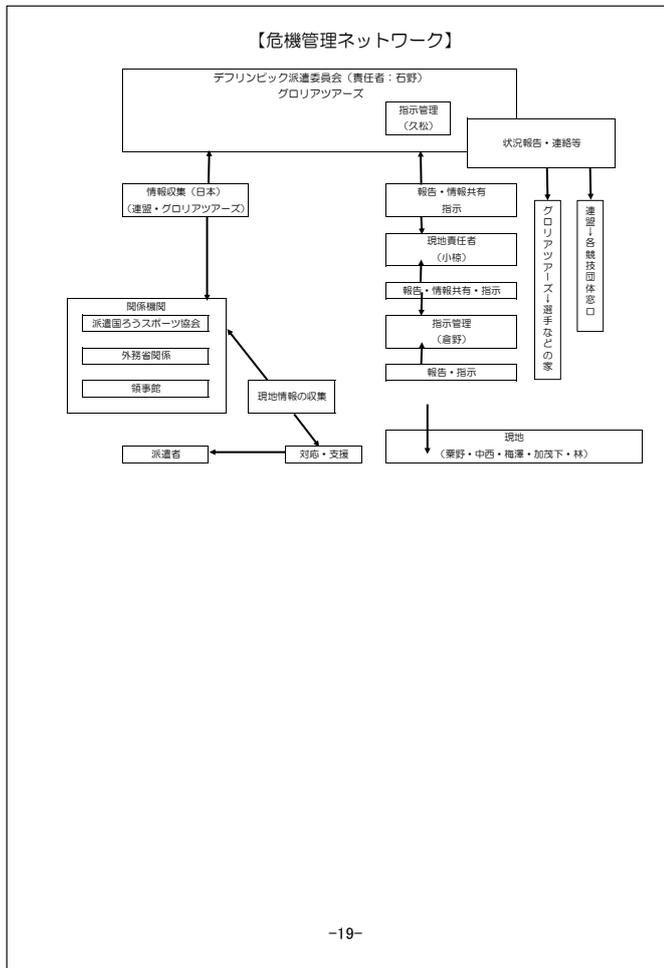
● 競技スタッフ

- ① 自己の役割とその評価
- ② 今後の課題

● 選手

- ① 当初の目標 (自己目標)
- ② 結果に対する評価
- ③ 今後の課題

-18-



大会一般規則-デフリンピック

ヴァルテッリーナ-ヴァルチアベンナ 2019

1. 期間
冬季デフリンピックをイタリアのヴァルテッリーナ-ヴァルチアベンナにおいて、**2019年12月12日から12月21日まで**で開催する。

2. 競技
冬季デフリンピックでは以下の競技を行う。

- 2.1. 個人競技:** アルペンスキー、チェス、クロス・カントリー・スキー、スノーボード
- 2.2. 団体競技:** カーリング、アイスホッケー
- 2.3.** 各個人競技の種目内容は各競技の特別規則及びそれぞれの競技規程により定められる。
- 2.4.** 予備/最終登録で男性、女性それぞれに最低2つの地域から合わせて5か国以上の参加登録があった競技及び種目のみを行う。
- 2.5. デフリンピック競技規則 DG7 5** に従い競技又は種目を中止する場合は、予備登録の締め切り日から14日以降に、必要があれば最終登録締め切り後直ちに、国際ろう者スポーツ委員会 (ICSD) 事務局から関係各国連盟に通知する。

3. 参加資格

- 3.1** 冬季デフリンピックは公平無私な競技を行う目的のもとに、(ICSD) 加盟国連盟全てのろうスポーツマンが集い団結する場である。
- 3.2** 人種、宗教及び政治問題など、いかなる理由においても団体及び個人を差別する行為を禁ずる。
- 3.3** 冬季デフリンピックに参加する選手は以下の条件に適用者でなければならない：
 - 4.4** これらの検査で不適格の結果が出た選手は、直ちにその競技から退場しなければならない。この選手が同一種目の別な競技にも出場する場合、不適格と判定された競技のみにおいて失格となる。
 - 4.5** もし、チームの一員に検査で不適格の結果が出た場合、該当する選手は直ちに競技から退場しなくてはならない。その選手は、その競技の残りの部分、及び次の競技について失格となる。別の選手がその選手の代わりに出場することはできる。
 - 4.6** なんらかの不正行為があった場合、その選手が属する連盟は ICSD 理事会が定めた手続き料と罰金を支払う義務が課せられる。
 - 4.7** 冬季デフリンピック期間中の検査に係る諸経費は組織委員会が負担する。
 - 4.8** (アレルギー、喘息、てんかん、等の) 慢性疾患のために、薬物もしくは禁止されている物質の使用が必要な選手は、TUE 申請をしなくてはならない。詳細は、ICSD アンチドーピング規則 ICSD Anti-Doping Rules をご覧ください。

-20-

- 1.** ろう者であること：この場合は両耳のうち、聴力が優れた方の耳の聴力レベルが最低でも 55 デシベル以上の者を指す (1964 年に定めた ISO 基準：500、1000、2000 ヘルツの 3 つの振動数平均を基準とする)
- 2.** (ICSD) 加盟国連盟の会員であること。
- 3.4** 規則として、年齢に制限を設けない競技種目がある。一方、各々の規程により年齢制限を設けている種目もある。
- 3.5** 登録用紙に参加規程項を明記して以下の同意文を載せるが、各国連盟の役員 2 名 (通常は会長と事務局長) が代表し、これに同意してサインしなければならない：

「我々署名者は冬季デフリンピックの参加規程を讀み、我々及び選手はその条件に従うことを誓います。我々は国際ろう者スポーツ委員会によって認可された条件と目的において、冬季デフリンピック期間中、テレビ撮影及び写真撮影などを受け入れることに同意します。」
- 3.6** 上記規則が守られない場合は、いかなる登録も無効とする。
- 3.7** 参加者は自分が所属している連盟の国籍を有していなければならない。疑わしいとされた場合、関係する連盟は該当する参加者のパスポートのコピーを提出し、国籍を証明しなければならない。

4. 取締り・罰則

- 4.1** それぞれの連盟には、以前オージオグラムを提出した選手のリストが配布される。このリストに名前のある選手は、新たに聴力検査表 (オージオグラム) を提出する必要はない。その他の (リストに名前のない) 選手は全員、大会参加前に ICSD 事務局に聴力検査表を提出しなければならない。その際、聴力検査表のフォーマットは ICSD のホームページに掲載するものを使用することとする。
- 4.2** 冬季デフリンピック期間中、選手に対して新たに聴力検査を実施する場合がある。
- 4.3** 選手に対してドーピング検査を課す場合がある。

-21-

- 4.4** これらの検査で不適格の結果が出た選手は、直ちにその競技から退場しなければならない。この選手が同一種目の別な競技にも出場する場合、不適格と判定された競技のみにおいて失格となる。
- 4.5** もし、チームの一員に検査で不適格の結果が出た場合、該当する選手は直ちに競技から退場しなくてはならない。その選手は、その競技の残りの部分、及び次の競技について失格となる。別の選手がその選手の代わりに出場することはできる。
- 4.6** なんらかの不正行為があった場合、その選手が属する連盟は ICSD 理事会が定めた手続き料と罰金を支払う義務が課せられる。
- 4.7** 冬季デフリンピック期間中の検査に係る諸経費は組織委員会が負担する。
- 4.8** (アレルギー、喘息、てんかん、等の) 慢性疾患のために、薬物もしくは禁止されている物質の使用が必要な選手は、TUE 申請をしなくてはならない。詳細は、ICSD アンチドーピング規則 ICSD Anti-Doping Rules をご覧ください。

5. 選手団役員

- 5.1** ICSD 加盟国連盟のみが冬季デフリンピック大会に参加する選手を登録する権利を有する。
- 5.2** それぞれの競技種目に参加できる選手団役員の上限人数は各競技の特別規則及びそれぞれの競技規程に明記されている。
- 5.3** 自国のろうスポーツ連盟より 1 競技につき選手団役員を 1 名、加えて選手 3 名につき役員を 1 名派遣することができる。(ICSD 評議員会に出席する代表者はこの規程から除く)
- 5.4** 冬季デフリンピックの登録用紙は事務局が準備・提供する。

6. 団体競技

- 6.1** 団体競技への登録の最終締め切りは **2018年12月12日** とする。

-22-

- 6.2. 団体競技の参加表明の〆切は**2018年12月12日**である。
- 6.3. 団体競技の最終エントリーの〆切は**2019年11月12日**である。
- 6.4. ICSD事務局宛に、各選手名、登録種目および背番号を明記した最終登録用紙を**2019年11月12日**以前に提出しなくてはならない。この手続きは、ICSDの定めたオンライン登録にて行う。
- 6.5. **2019年11月12日**以降は、一切の追加登録も受け付けない。
- 6.6. 出場登録をしたチームが、**2018年10月12日から2018年12月12日**の間に登録取消しをする場合は、取消し後直ちに**USD \$ 2,500**の罰金を支払わなければならない。
- 6.7. **2019年11月12日**以降に出場取消しをする場合は、取消し後直ちに**US\$5,000**の罰金を支払わなければならない。

7. 個人競技

- 7.1. **2018年12月12日**までに ICSD事務局宛に、各競技種目に出場可能な選手の人数を想定して報告する、予備登録を済ませなければならない。
- 7.2. **2019年11月12日**までに ICSD事務局宛に、出場する競技種目に選手名を記入して最終登録用紙を提出しなければならない。この最終登録の手続きは、ICSDの定めたオンライン登録にて行う。
- 7.3. **2019年11月12日**以降は、一切の追加登録も受け付けない。
- 7.4. 登録済みの選手が当日競技に出場しなかった場合は罰金 US\$100 が課せられる。ただし、医者からドクターストップがかかり、その旨の診断書が提出された場合を除く。

8. 財政規程

- 8.1. 各国選手団は自身の旅費、食費、宿泊費など派遣に係る諸経費を負担しなければならない。

-23-

- 8.2. 各参加選手及び選手団役員（連盟代表者を含む）は、それぞれ冬季デフリンピック開会前に参加費の US\$40 を支払わなければならない。
- 8.3. ICSD に支払われるべき全ての納入金は、冬季大会が始まる前に支払わなければならない。冬季大会が始まるまでに支払いが済んでいない連盟の選手団は、全員出場資格を失う。

9. メダルと賞状

- 9.1. 全競技種目において、第1位には金メダルと賞状を、第2位に銀メダルと賞状、第3位には銅メダルと賞状が授与される。
- 9.2. 全ての団体競技及び“人工的な性質”を除いた（**9.3. 参照**）その他の競技種目における団体戦の場合、第1位となったチームのメンバーのうち、冬季デフリンピック開催期間中に少なくとも1試合もしくは1競技以上に出場した全ての選手に第1位のメダルと賞状が授与される。第2位、第3位のチームのメンバーにも同様に、少なくとも1試合もしくは1競技以上に出場した全ての選手に、それぞれ2位、または3位の賞状とメダルが授与される（**9.1 参照**）。これらのチームのその他のメンバーには、メダルはないが、賞状が授与される。
- 9.3. 個人競技の場合、4～8位までの選手には賞状が授与される。

10. チーム代表者・技術委員打ち合わせ会議、抽選会

- 10.1. 各競技のチーム代表者・技術委員打ち合わせ会議は各競技の最初の試合が始まる前に最低1回は行われる。日時、場所は発表される。
- 10.2. この会議には競技委員会、審査員、ICSD技術委員、各参加国連盟の代表者2名（2名のうち1名はろう者でなければならない）が出席する。この会議に出席するろうの代表者にきこえる人が同行した場合、通訳の使用を認める。
- 10.3. 団体競技の抽選は、団体競技を登録した国々に**後日発表する**。
- 10.4. ノックアウト方式の試合の抽選はこれらのチーム代表者打ち合わせ会議が始まる前にヴァルデリーナーヴァルチアベンナで行われる。シードは抽選がおこなれる前に公開される。

-24-

11. 権限・判定権

- 11.1. ICSD 理事会は、組織委員会及び大会参加国連盟より提訴された冬季大会や試合に関するあらゆる訴訟問題に対して、最終決定を下すことができる最高権力を有する。
- 11.2. 各競技において試合の審判員（ground judges）に対する抗議は、ICSD が定める冬季デフリンピック抗議用紙に英語で記入して提出しない限り、審判員によって判定される。この抗議用紙は各競技ごとに定められた時間内に提出されなければならない。（各競技の技術規程参照）
- 11.3. 競技役員（official）の判断に対する抗議は、該当する競技の抗議委員会（Protest Committee）の各委員に対して申し立てることが可能であるが、その際には100ドルの保証金を納める。
- 11.4. 抗議委員会は抗議を受けてから競技ごとに定められた時間内に判定を下し、抗議を提出した連盟に対してすぐに判定の結果を通達しなければならない。
- 11.5. 抗議委員会の下した判定に対して抗議する場合、その判定が下されてから4時間内に、抗議をする連盟の役員から審査員団に提訴しなければならない。
- 11.6. 提訴が受理された場合、その提訴を起こした連盟へ50ドルの保証金が返却される。
- 11.7. 聴力、ドーピング検査、選手の国籍問題に関する訴えは ICSD 理事会の単独判定とする。

12. 身分証明カード（IDカード）

選手及び役員は身分証明カードが与えられ、競技会場に入場する際には必ず携帯しなければならない。身分証明カードがない限り、入場及び出場が許されない。

13. 宣伝活動

- 13.1. 衣服や用具に小さなロゴマーク、その他の宣伝をつける事は許される。ただし、前面、背面などあらゆる個所に付されているマーク等の合計表

-25-

面積が400cm²を越えてはならない。この規程は、そのマーク等が伝統的、特徴的なデザインである場合も、伝統的デザインとは関係なく、個別のものである場合も適用される。（デフリンピック技術規則 **DG15 2** を参照）

- 13.2. 冬季デフリンピック区域内外ではあらゆる政治的、宗教的、民族的な宣伝活動を禁ずる。（参照 I O C 憲章、第50条-2015年8月版）

- 14. 冬季デフリンピック競技中、一切の補聴器または人工内耳の外部機器の使用を固く禁ずる。

15. その他

現在のデフリンピック規則及び規程や ICSD 憲章で定めた範囲外において予想外の問題が起こった場合、IOC（国際オリンピック委員会）や国際的な団体によって定められた規則及び規程に従って処理する。これらの規則に抗議することはできず、開催国のろうスポーツ連盟の有する規則及び規程より優先してこれに従う。

訳注：

用語は以下のように翻訳：

Protest Committee = 抗議委員会
 Jury of Appeal = 審査員団
 Official = 競技役員
 (ground) judges = 審判員
 Technical Meeting = チーム代表者・技術委員打ち合わせ会議
 いわゆる「TD会議」のこと

(原文)

<http://www.deaflympics.com/icSD/general-technical-rules-deaflympics/winter>

-26-

デフリンピック ー 規約

DG1. 基本原則

デフリンピックの目的には以下を含む：

- ・ ろうのスポーツ選手の肉体的・精神的幸福。
- ・ ろう者が高レベルのスポーツ競技に参加する機会の提供。
- ・ 4年に一度のスポーツ競技会への世界中の選手の集結。
- ・ 国際ろう者スポーツ委員会 (ICSD) の原則の世界への推進と、それによるろうコミュニティ中の国際親善の構築。

DG2. 総則

1. デフリンピックは4年に一度開催され、夏季デフリンピックと冬季デフリンピックが交互に2年ごとに開催される。これらのデフリンピックはIOCの公式支援を受けている。
2. デフリンピックは他の年に延期してはならず、また、オリンピックと同じ年に開催してはならない。
3. デフリンピックの開催地はあらかじめ決定されるのではなく、候補国の連盟がICSD評議員会に提議する。
4. 夏季デフリンピック及び冬季デフリンピックの期間は、大会前イベント及び予選を除き、通常、夏季大会は12日間以内とし、冬季大会は8日間以内とする。
5. デフリンピックはICSDの独占財産である。ICSDは、とりわけ、デフリンピックに関する使用権(ライセンス)を付与することができる。
6. ICSD執行委員会は、開催国立候補募集にあたり、ICSD執行委員会(EC)の承認を得て、冬季デフリンピック20,000米ドル、夏季デフリンピック35,000米ドルの保証金など、使用権料の詳細を概説するものとする。開催権を得た国は、公式発表から3か月以内に使用権料を支払わなければならない。
7. デフリンピックは国家間の競争ではない。競技結果によって国家レベルを格付けすることはしない。
8. デフリンピックへの参加は、以下の者に制限される。
 1. ろう者、良耳の聴力が55dB以上(500、1000、2000各ヘルツの3周波の平均、1969年アメリカ国家規格(ANSI)基準による)の聴力損失と定義される。
 2. ICSD加盟国の国籍を有する者。

-27-

3. デフリンピック競技中は、補聴器又は体外人工内耳を使用しない。

DG3. 招致手続

1. 夏季デフリンピック又は冬季デフリンピックを招致しようとする国内連盟又は団体は、実際にデフリンピックが開催される9年前に、開催予定の都市及び日程を含む申請書類を事務局に提出しなければならない。
2. 加盟国の都市(商工会議所、観光局など)による夏季デフリンピック又は冬季デフリンピックの招致も受け入れることができる。
3. デフリンピックの開催申請書には以下の組織の支持証明書を添付するものとする。
 1. 政府(又は省)
 2. 市長室
 3. 国内オリンピック委員会
 4. 該当する国内ろう者競技連盟
4. 提出期限は執行委員会により決定され、提出期限の12か月以上前に公表される。
5. 大会開催地は、該当デフリンピックの6年前に開かれる評議員会で正式に決定される。
6. 大会開催申請書には以下の内容を含めなければならない。
 1. デフリンピック開催に立候補する都市及び期間
 2. ホテル、食事、現地交通手段の現行価格一覧
7. デフリンピック開催を申請する国内連盟は、現地視察の実施の前に、現行のICSD「デフリンピック規約」に従うことに同意する契約書に署名しなければならない。
8. デフリンピックを招致しようとする国内連盟は、ICSD会長又はその代理人による都市への現地視察を手配しなければならない。現地視察は、その国でのデフリンピックの開催が提案される月と同じ月に行われなければならない。
9. 視察の前に事務局がDG3. の3、6及び7に挙げた文書を受けとっていない場合、現地視察は行われないものとする。
10. 評議員会に出席した適任の国内連盟により記録された投票の単純過半数をもって、評議員会がデフリンピック開催地を宣言するものとする。
11. 第1回の投票でどの候補地も投票数の過半数を得られなかった場合、1つの候補地が過半数を得るまで、追加投票を行わなければならない。
12. 2つの都市が投票で同じ票数であった場合、最終投票が行われる前に、都市の代表者それぞれが5分間のプレゼンテーションを行い、質問に答えるよう

-28-

促される。しかし、その後も票数が同じとなった場合、2つの候補都市の名を箱に入れ、ICSD会長がそのうちの1つを引いて、その市をデフリンピック開催都市として発表することとする。

DG4. 組織委員会

1. デフリンピック開催権を得た都市は、開催権を得た後6か月以内に組織委員会(OO)を任命し、デフリンピック運営の責任をこれに委任するものとする。
2. 組織委員会は運営経験のある者(ろう者及び聞こえる人)によって構成されるものとする。組織委員会は電子通信機器を使用してICSD事務局と直接連絡をとる。
3. 組織委員会は電話、ファックス、電子通信機器を備える集中的な事務局を置くことができる。これらの通信機器の番号は、組織委員会のレターヘッド及びウェブサイト(存在する場合)に掲載するものとする。
4. 組織委員会はデフリンピックの運営に責任を持ち、組織委員会の業務に対する支援を得るために、国内オリンピック委員会と対話を開始しなければならない。
5. 組織委員会は、デフリンピックの競技プログラムを決定するにあたり、適切な国内競技連盟と連絡をとり、その競技連盟の役員と協働するものとする。
6. 組織委員会は、すべての選手団の交通及び宿泊のニーズのために、デフリンピック公式旅行代理店を指定することができる。旅行代理店は電子通信機器を有するものとする。旅行代理店の指定は、デフリンピックの2年前に行うものとする。
7. 選手団の団長、監督、リーダー(シェフ・デ・ミッション)は、大会開始1年前にデフリンピック開催会場を訪問することができる。組織委員会は会場訪問のスケジュールを決定するものとする。スケジュールが決められた時期以外に訪問しても、組織委員会による支援はない。

DG5. 報告

1. 執行委員会の要求に応じ、デフリンピックの1年前まで、四半期ごとの進捗報告書を事務局に提出するものとする。その後は毎月の報告書が必要とされる。
2. 組織委員会の委員は、進捗報告書を報告するために、ICSDの執行委員会(EC)への出席を求めることができる。
3. デフリンピックの技術及び組織を詳細に説明する完全な報告書を、大会が開

-29-

催前の遅くとも2年前及び4年前に、ICSD評議員会に提出する。

4. デフリンピックの完了に向けて、デフリンピック実施後1年以内に、以下を記載する最終報告書を事務局に提出するものとする。

1. 全競技種目の結果
2. 全競技の評価
3. 財政
4. 国別の競技者、役員及び観客の数、選手と観客の比率、性別比などの統計情報

DG6. 正式招待

1. デフリンピックへの招待状は、遅くとも1年前までに、ICSDと組織委員会双方から別々に送付するものとし、招待状にはデフリンピックプログラムの一部となる公認競技リストを同封するものとする。
2. バッジ及びメダルだけでなく、開催者が配布する印刷物である招待状、競技リスト、登録カード、プログラム、ポスターなどのすべての文書にも、ICSDのロゴと名前を入れなければならない。

DG7. プログラム

1. 各競技の技術委員(TD)は、デフリンピック開催の6か月以上前に最終競技スケジュールを承認する。夏季デフリンピック及び冬季デフリンピックのプログラムに含まれる競技は、開催決定の際に評議員会が承認した競技とする。
2. デフリンピックのプログラムに含まれる競技は、IOCで認められている競技に限るものとする。
3. 組織委員会はデフリンピックの日程案について、ICSD執行委員会と協議する。この協議では、ICSDが承認する他の競技種目と重なる可能性を排除することを基本としてデフリンピックの正式な日程が決定される。協議はデフリンピックの4年前までに最終決定されるものとする。
4. 執行委員会は、デフリンピックの夏季大会及び冬季大会の18か月前までに各競技で実施する種目について承認する。執行委員会は、評議員会の事前の決定、技術委員(TD)の提出物及び国際競技連盟の規則を考慮に入れる。
5. 公式プログラムには、2つ以上の地域で5つ以上の国で予備登録された競技及び種目についてのみ含めるものとする。競技又は種目の参加者が5人未満又は参加地域が2地域未満である場合、その競技又は種目は中止する。この規則により個別の種目が中止される場合、事務局は影響を受ける連盟に対し、

-30-

予備登録締め切りの14日以内に通知しなければならず、該当する場合には最終登録締め切り直後に通知しなければならない。

6. ICSDは締め切り後14日以内に影響を受ける連盟及び組織委員会に通知しなければならない。

DG8. 競技の追加と削除

1. 新競技は、まず公開競技としてデフリンピックに導入することができる。ICSD執行委員会は、新競技を次回のデフリンピックの正式競技としてICSD評議員会に提案することができる。この提案を行うには、その競技が以下の条件を満たしていなければならない。
 1. 新競技の世界ろう者選手権が1度以上開催されていなければならない。
 2. 新競技が世界ろう者選手権で実施されたことがない場合、過去3年間に国際競技大会で実施され、男女共最低8か国が出場していなければならない。
 3. 導入される新競技の申請書は、評議員会に提出する4か月前に事務局に提出されなければならない。技術委員会は新競技申請書を評価し、推薦状を提出するものとする。
2. 競技がデフリンピックのプログラムで3回連続して開催されない場合、その競技はデフリンピックの夏季又は冬季競技プログラムから削除される。
3. プログラムに含める競技は、2以上の地域連合の12以上の連盟（夏季デフリンピックの場合）又は6以上の連盟（冬季デフリンピックの場合）で実施されているものとする。

DG9. 参加規約

1. デフリンピックは、すべてのろうのスポーツ選手を公正無私な試合に結集させるものである。
2. 人種、宗教、性別又は政治を理由として、連盟又は個人に対するいかなる差別も認められない。
3. 以前はある国の代表であった選手は、2年間の待機期間の後で一度だけ他の国の代表となることができる。この間、元の国又は新しい国を代表して対戦することはならない。
4. 関係する国際競技連盟の規約に記載のある場合を除き、競技者に対する年齢制限はない。
5. 登録用紙には参加資格規定並びに競技連盟の会長及び事務局長の署名入り

-31-

の下記の宣言を含まなければならない。「我々署名者はデフリンピックの参加資格条件を読み、その条件に従うことを誓います。我々はICSDによって認可された目的のために、デフリンピックの期間中、映像撮影及び写真撮影に同意します。」

6. 上記規則が守られていない限り、いかなる登録も無効とする。
7. ICSDの正会員のみがデフリンピックの競技者として登録できる。
8. 国内ろう者競技連盟を設立する力が見受けられない小国の選手は、その国の国内オリンピック委員会又はスポーツ局からの認可を待たずとも、夏季及び冬季デフリンピックに出場できる。これらの選手はデフリンピック旗の下で行進する。
9. 国内連盟は選手3人につき選手団役員1名を、加えて国の選手団の各競技につき1名のリーダーを任命できる。これらの役員には評議員会に出席する3名の代表を含まない。選手団は以下の役員を含むことができる。
 - 団長、監督、選手団リーダー
 - 副団長、監督補助、副選手団リーダー
 - コーチ
 - 副コーチ
 - マッサージ師・トレーナー
 - 医療スタッフ・医師・救急士
 - 理学療法士・看護師
 - 行政補佐官・行政官
 - 通訳者選手団に認められた人数以上の役員がいる場合は、その超過分の役員には執行委員会が決定する超過料金が課される。
10. デフリンピックの登録用紙はICSDが提供する。

DG10. IDカード

1. デフリンピックの組織委員会は各参加者及び役員に身分証明カードを提供しなければならない。
2. 組織委員会は、適切な文書（旅券又は政府発行の身分証明カード）を調べて選手の市民権を確認し、以下のすべてが身分証明カードを発行する前の選手のプロフィールと合致することを確かめる。
 - 姓名
 - 生年月日

-32-

- 国籍
3. 身分証明カードは個人の以下の項目を含むものとする。
 - デフリンピックの名称、日程、開催地
 - 姓
 - 名
 - 国籍（ICSD執行役員、ICSD技術委員を除く）
 - 生年月日（競技者のみ）
 - 競技（競技者及び特定の役員のみ）
 - 役割（役員のみ。例：団長、トレーナー、通訳その他個人）
 4. 国内連盟は、身分証明カードに記載される組織委員会に提出された情報が正確なものであることを確認するものとする。
 5. 組織委員会は、身元証明の目的で身分証明カードにアルファベット・コード又はカラー・コードを使用することができる。組織委員会の許可なしに、身分証明カードに記載の項目を変更してはならない。
 6. 身分証明カードは、選手が競技者として競技する試合会場への出入りの権限を与える。身分証明カードを持たない競技者は、登録した競技種目へ参加することは許されない。

DG11. 管理と罰則

1. 本人のオーディオグラムがICSDに承認されていない選手又はICSDのオーディオロジストによる検査を受けたことのない選手は、夏季/冬季デフリンピックの前3か月以内に、1年以内に測定したオーディオグラムをICSDに提出しなければならない。これは、予選又はデフリンピックに参加する前に行わなければならない。もし提出されていない場合には、出身国の連盟の経費負担において、デフリンピック会場で、聴力検査が行われる。
2. このためのオーディオグラム用紙は、ICSDの公式ホームページで提供される。
3. ICSDは世界アンチドーピング規則を開発する世界アンチドーピング機構(WADA)の業務を支持し、規則の最新版に従う。
4. ICSDはこの規則に基づき、デフリンピックその他関連する国際競技会に適用されるICSDアンチドーピング規則を策定した。
5. デフリンピックに参加しているすべての選手は、デフリンピック期間中いつでもドーピング管理に従うよう求められることがある。
6. アンチドーピング規則の違反があった場合は、ICSDはICSDアンチドーピング規則ののっとりて制裁を課すことができる。
7. 組織委員会は実施されるドーピング管理の費用をすべて負担する責任があ

-33-

8. 組織委員会は、デフリンピックでドーピング管理プログラムが実施できるよう、インフラを整える（訓練を受けた検査者、サンプル収集のための適切な設備、WADA認定の分析機関へのアクセスを含む）責任を有する。
9. 組織委員会はすべての会員国にサンプル収集の技術的なプロセスを説明したドーピング管理ガイドを配らなくてはならない。
10. すべての会員国は、その国の選手に対し、ICSDアンチドーピング規則及びその要件を確実に知らせる責任を有する。
11. 検査を拒否した競技者はデフリンピックから除外される。
12. これらの試験のいずれかに不合格となった選手は執行委員会の決定により、定められた期間、あるいは永久的にICSDの競技大会から追放されるものとする。追放選手の氏名はすべての文書から除かれ、デフリンピックで授与されたいかなるメダルも没収されるものとする。
13. 該当選手が団体競技のチームの一員であった場合、チーム全体が失格となり、その名前がすべての公式文書から除かれ、デフリンピックで授与されたいかなるメダルも没収されるものとする。
14. 競技者又はチームに不正行為があった場合、会員たる連盟は執行委員会によって課せられるすべての実費と罰金を支払わなければならない。
15. デフリンピック期間中に行われた試験のすべての費用は組織委員会が負担するものとする。

DG12. 団体競技

1. 団体競技の予備登録は、夏季大会前の2年半前、冬季大会の1年半前に行わなければならない。
2. 1つの国内連盟からは1チームのみの参加が認められる。
3. 決勝ラウンドのチーム数は原則として、各競技男女それぞれにつき最大16チームまでとする。その数は技術委員の勧告とその競技の性質に基づき、執行委員会が決定する。
4. DG12.3に従い登録するチーム数が16チームに満たなかった場合、デフリンピック開会日の6か月前まで、認められる最大チーム数になるまで追加登録が認められる。ICSD事務局で申請を受領した日付が、団体競技登録の日となる。同じ日にICSD事務局が2チーム以上の申請を受領した場合、登録順序を決めるためにくじ引きが行われる。
5. デフリンピックへの出場資格は、地域連合が予選の実施を選択する場合を除き、地域連合の選手権の結果に自動的に従う。

-34-

6. 該競技の直近の世界選手権で優勝したチームは、DG12.1の要件を満たせば、自動的に参加資格を与えられ、1位にシードされる。世界選手権優勝チームが参加しない場合であっても、世界選手権2位のチームがシードされることはない。関連する国際競技連盟の規則に従い、公正なくじ引きが適用される。最後のデフリンピック以来該競技で世界選手権が開催されなかった場合、前回のデフリンピック優勝チームが自動的に1位にシードされる。
7. 予選同様、決勝ラウンドを出場辞退したチームには罰金が科される。罰金の額はデフリンピックの4年前に開かれる評議員会で決定される。
8. 登録したチームが最終登録締切り日より前に予選への参加を必要としない場合、そのチームはICSDの罰金なしで出場辞退できる。

DG13. 個人競技

1. 個人選手が参加できる種目数に制限は設けない。
2. 選手はデフリンピックに出場不可という医師の診断書を提出した場合を除き、出場辞退選手には罰金が科される。

DG14. 予備登録と最終登録

1. 各競技種目の出場選手数を記入した予備登録は、デフリンピックの1年以上前に事務局宛てに提出されなければならない。
2. 各選手名と各選手の出場競技種目を記入した最終登録リストは、デフリンピック開幕の2週間以上前に事務局又は組織委員会に提出されなければならない。ファックス又は電子メールで提出することも可能である。ただし、正式登録用紙の確認は速達便で送られなくてはならない。
3. 予備登録及び最終登録の締め切り日は、事務局長が執行委員会と協議の上決定し、決定後は直ちに組織委員会に連絡される。
4. 締切後に最終登録が受領されることがあっても、受理されないものとする。

DG15. 広告

デフリンピックの参加者は、商用宣伝広告のついた物の所持と着用に関し、ICSD執行委員会のすべての指示に従わなければならない。

1. ICSDはデフリンピックの期間中、宣伝広告のついた物の所持と着用を認めることができる。メーカーやスポンサーを特定できるものは、衣服又は用具1点につき1つまでとする。

-35-

2. 参加者はメーカー又はスポンサーの正統かつ特有のデザインの競技用衣服及び靴を着用することが認められる。メーカー又はスポンサーの名前・ロゴは、正統かつ特有のデザインであり、正統なデザインとは異なる模様であり、前面及び背面で合計400cm²以下の大ききとする。

DG16. 報道規制及び賭項目

1. 組織委員会による契約はすべて、ICSD執行委員会の指示とデフリンピック規約に従うものとする。これは、時間計測機器、スコアボード及び放送に関する契約を含むが、それらに限定されるものではない。
2. デフリンピックの報道を最大にし、可能な限り最大の観客数を実現するために、すべての地域媒体及び国際媒体の部署に対し、デフリンピックの試合、開会式及び閉会式の報道許可を求めるよう勧奨する。
3. 許可を求める報道陣は、デフリンピックの3か月以上前に公式申請書をICSDに提出しなければならない。報道陣はその申請書において、報道陣はICSD、組織委員会又は任命された者のすべての指図に従うという合意を示すものとする。取材陣は、関係するすべての経費（車のや備品の手配など）を支払う責任及びICSDに取材結果の原本のコピーを提出する責任を認める。取材結果には印刷物の記事、録画したビデオ/フィルムなどが含まれる。
4. 地元の報道陣がデフリンピックの報道の許可を得た場合、ICSD、組織委員会及び任命された者は、その報道陣にデフリンピックへのアクセスを与えるよう努めるものとする。許可された報道陣は、取材に含まれるすべての経費を支払う約束を含め、ICSD、組織委員会及び任命された者のすべての指示に従う。
5. ICSD執行委員会は（組織委員会と協議の後）、あらゆる報道陣の申請について許可を付与若しくは却下する権利、又は報道陣に既に認められた許可を撤回する権利を保有する。ICSDは組織委員会との協議の上、各報道陣の人員制限数を決定するものとする。
6. 取材許可証を持つ報道陣のみが、写真及びフィルム撮影のために会場内の競技施設への入場を許可される。観客は写真撮影の目的で、これらの競技施設に入ることは許されないものとする。観客は、常に観客席にとどまらなくてはならない。これは表彰式の場合でも同様である。
7. 各種目の結果報告は都合がつく限り早く組織委員会の事務局に伝えられ、事務局は毎日の結果報告に掲載しなければならず、同様に様々な主要場所で掲示しなければならない。
8. 組織委員会の情報責任者は全ての結果の情報を集め、毎日の結果報告の印刷

-36-

について責任を持つものとする。情報責任者は、ICSD理事、各技術委員、組織委員会役員及び参加競技チームのリーダーに配布するために、その日の結果報告書を1セットずつ確保するものとする。これらの報告書は、主要場所に置かれる保管ボックスを利用して配布する。

9. 情報責任者は競技結果やその他競技に関する情報について、印刷物や電子情報手段を通してできるだけ広範囲に、確実に広めるものとする。
10. 宣伝広告及び後援
デフリンピックの法人後援契約はすべてICSDが当事者となる。組織委員会はICSDによりなされた契約に従うものとする。
11. ICSD旗・ロゴ・標語等
公式ICSD旗、ロゴ、標語、「デフリンピック」の名称及び関連するICSDの商標はICSDの占有財産である。ICSDはICSDの財産の使用に関し、ライセンス権を与えることができる。
12. 宣伝及び広告
1. デフリンピック期間中は、いかなる政治的、宗教的、民族的な宣伝活動も許されない。
2. 競技場内での宣伝看板及び広告の掲示についてはICSDの許可を得ることを条件として認められる。
3. ICSD執行委員会は、どのような形態の広告を認めるかについての条件を決定する。
13. マスコット
1. デフリンピックのために制作されたマスコットはすべてデフリンピックのエンブレムであり、そのデザインは組織委員会からICSD執行委員会へ提出され、承認されなければならない。ICSD執行委員会から事前の文書による承認がなければ、マスコットを営利目的に使用してはならない。
2. 組織委員会はICSDの利益のために、デフリンピックのマスコット及び関係するデフリンピックの商標を確実に保護するものとする。デフリンピック開催年の終了と同時に、デフリンピックのマスコット及び関係する商標の使用も終了する。組織委員会及び/又は開催国のある者スポーツ組織は、場合によって、また必要な範囲で、ICSDの単独利益を守るために受託者の資格でデフリンピックのマスコット及び関係する商標の使用に関して、受託者の役割を果たすものとする。
3. 各国のろう者スポーツ組織は大会開催国外において、事前にICSDの文書による承認なしに、マスコットを営利目的で使用してはならない。この承認に先立ってICSDは組織委員会と協議する。

-37-

DG17. 財政規約

1. 組織委員会（又は代理店）はデフリンピックに出場するすべての参加国連盟に対して、宿泊施設、食事、地元の交通（公共交通機関、各競技場間の交通等）、その他交通に関する支援）を適切な価格で提供しなければならない。
2. 各選手団は旅費、宿泊費、及び支援にかかる費用を負担する。
3. 組織委員会は代理店を指定し、デフリンピック参加者のために交通、宿泊その他支援の手配をすることができる。
4. 組織委員会は下記を負担しなければならない。
1. DG3. 8に記載の内容
2. デフリンピック開催の約1年前に行われる、会長又は指名を受けた者及び技術委員によるデフリンピック会場視察
3. デフリンピック開催期間に4日（大会前及び/又は後）を加えた期間におけるICSD会長、執行役員、通訳者1名、オーディオロジスト1名のすべての旅費及び宿泊費。執行委員、技術委員全員（夏季大会、冬季大会それぞれについて）、追加のオーディオロジスト1～2名、ICSD名誉会員全員、その他ICSDが招待した来賓についての宿泊費（2011年及び2013年のデフリンピックに適用される）
4. デフリンピック開催期間に4日（大会前及び/又は後）を加えた期間におけるICSD会長、執行役員、通訳者1名、オーディオロジスト1名、技術委員及び助手全員（夏季大会、冬季大会それぞれについて）のすべての旅費及び宿泊費。執行委員、追加のオーディオロジスト1～2名、ICSD名誉会員全員、その他ICSDが招待した来賓についての宿泊費（2015年冬季のデフリンピックに有効）
5. デフリンピック開催により発生した収益はろう者スポーツ発展のため、以下のように分配される。
・ICSDに対して50%
・開催国連盟に対して50%
6. デフリンピックにかかる費用が収益を越える場合は、開催国連盟（又はその組織委員会）が損失補填の全責任を負うものとする。

DG18. メダル・賞状

1. メダル及び賞状のデザインは、デフリンピック開催の12か月以上前に、承認を得るためにICSD執行委員会へ提出しなければならない。
2. 全競技種目について、優勝者には金メダル及び賞状、準優勝には銀メダル及

-38-

- び賞状、第3位には銅メダル及び賞状を授与する。全メダルに該当する競技及び種目名を彫るものとする。同位優勝はないものとし、同点決勝システムを採用する。
- 個人競技については、4位～8位入賞者に賞状が授与される。
 - 特殊な性質を持つもの（例えば、各競技で競技者の位置によって順位が決定してしまうもの）を除き、団体競技種目の優勝チームの選手がデフリンピック中に開催された試合又は競技に少なくとも一度は参加していれば、各選手に優勝が与えられる。準優勝チームの各選手には2位が、3位のチームの各選手には3位が与えられる。上記チームの他の選手にも賞状が授与されるが、メダルは授与されない。4位～8位入賞チームが存在する場合、その選手には賞状のみ授与される。
 - 特殊な場合の団体種目では、チームに対し1つのメダルが授与され、選手には賞状のみ授与される。
 - メダルの裏にICSDのロゴを入れるものとする。
 - 賞状にはICSD及び組織委員会両方のロゴを入れ、ICSD会長及び組織委員長がサインをする。競技者名は印刷ししなければならない。
 - 組織委員会は各参加国の団長に銀メダルを提供する。
 - デフリンピックでは上記以外の賞は与えられず、組織委員会はデフリンピック終了時に残ったメダルと賞状をICSDに提出する。
 - デフリンピック競技者が失格となった場合、メダル及び賞状をICSDに返却しなければならない。返却されない場合、該当する参加国連盟を活動停止に処するものとする。
 - 組織委員会は各メダルの見本を2つずつICSDに提出する。
 - 組織委員会は全てのメダルの鋳型を、デフリンピック後にICSDに提出しなければならない。

DG19. ポスター

- ポスターのデザインは、組織委員会が任命されてから1年以内にICSD執行委員会へ提出されなければならない。
- ポスターには、目立つ位置にICSDのロゴが入っていなければならない。
- ポスターを配布できるのは、前回の夏季/冬季デフリンピックの閉会式時又はその後である。

DG20. 出版物

6. 報告書

- デフリンピック後1年以内に、デフリンピック開催国の公用語で印刷された完全な最終報告書をICSD用に作成しなければならない。この報告書には正式な英語の翻訳を含めなければならない。ICSDに15部提出するものとする。
- この報告書は各国ろう者スポーツ組織及びICSD執行委員会に無料配布される。
- 組織委員会がデフリンピックの組織として発行した全ての出版物を3部ずつ、報告書の一部としてICSDに無料配布する。
- デフリンピック開催立候補中及びその後組織委員会として作成した、デフリンピックに直接関係する物品（メダル、ポスター、おみやげ品など）を2つずつ、報告書の一部としてICSDに提出する。

7. 公式フィルム

- 組織委員会は、40分以上のフィルム“、ビデオ又はDVDのようなよく普及したメディアを制作し、それをデフリンピック終了後6ヶ月以内にICSDに提出することが強く求められる。作成にあたっては、以下の指示に従うこと：
 - この制作物はプロフェッショナルなドキュメンタリーであり、英語字幕をつける。
 - この制作物には著作権者としてICSDのロゴと文字を、始めと終わりに入れなければならない。
 - 制作物は全競技施設の全競技種目を幅広く網羅していなければならない。
 - 制作物は、国際色を打ち出し、各国の金メダル獲得数に比例して、その国の選手をとりあげなければならない。
 - 制作物は競技ごとに主要な種目を特集するものとする。
 - 制作物のコピー2部（PAL1部、NTSC1部）は、後であらゆる言語で字幕がつけられる「国際音声効果オーディオトラック」として、組織委員会からICSDに提出する。
 - 英語で記録された解説字幕が入ったコンピュータ記録メディア2部を、提出制作物の一部として提供する。
 - 選手、ICSD職員又は役員インタビューの箇所は、英語にするか、文字又は音声の同時通訳を付けなければならない。

ICSDは、上記について契約上厳しく遵守されていない場合は、いかなる制作者候

- 開催国連盟（又はその組織委員会）は2か月以内に、デフリンピックの全競技及び種目の結果の完全な写しを、ICSDに送るものとする。写しはその後、公開される。

2. ロゴ

- デフリンピックに関するすべての出版物、ビデオ、フィルム、公文書及び報告書、又はデフリンピックに関連する便箋等のレターヘッド、アートワーク、メダル、その他デフリンピックの宣伝用販促物若しくは一般に販売するための商品を含むすべての財産について、ICSDのロゴを目立つ位置に載せなければならない。
- ICSD会長のメッセージは、全出版物、公文書及び選手村ガイドを含むパンフレット、最終報告書、公式フィルム及びその他すべてのコミュニケーション手段に載せるものとする。

3. パンフレット

大会詳細パンフレットは、プログラム全般と大会期間中利用できる施設及び設備、サービスについて記載し、英語とデフリンピック主催国の言語で作成する。組織委員会はデフリンピック開会の2年前に、ICSD及び全ての全国ろう者スポーツ組織へパンフレットを配布することとする。

4. 情報提供

デフリンピック開催期間中、組織委員会は選手村滞在者、来賓、組織委員会の人員及び一般向けに日刊情報紙を発行する。情報紙は以下を掲載しなければならない。

- 組織委員会の公用語による選手、競技状況の記事とその英訳文。
- ICSDスポンサーのための宣伝、広告及びPR記事。
- 前日競技結果ハイライト。

5. 競技結果

- デフリンピックの完全版結果報告書は、デフリンピック終了後1ヶ月以内に発行される。結果報告書は、デフリンピックの記録リストにあわせて競技種目と分類レベルに整理した全予選及び決勝の結果を含むものとする。
- この出版物は、発行後すぐ、ICSD本部に15部が無料配布される。
- この出版物は各国ろう者スポーツ組織、ICSD、執行委員会、及び技術委員に無料配布される。

補との協議も開始しない。

- 公式フィルム（PALとNTSC1部ずつ）の試写版サブマスターフィルム2部を、最終版の前に承認を受けるために、ICSDに提出しなければならない。どんなことがあってもICSDの書面での承認なしに制作物のマスター版を作成してはならない。
- 開催放送局として活動する制作会社が制作物を制作することができる。開催都市・組織委員会・ICSDの契約のもと、制作物の所有権はICSDが有するため、制作物の使用、配布及び放映の調整（後の合意に従う）についてはデフリンピックの12か月以上前までにICSDと交渉しなければならない。
- ICSDの書面での具体的な許可が与えられるまで、また与えられなければ、制作者はどこの国であれ、制作物のいかなるテレビ放映の交渉を開始してはならない。
- 制作者はICSDと開催国組織委員会との契約に従い、制作物の所有権がICSDにあることを理解しなければならない。

DG21. 競技式典

- 組織委員会は開会式及び閉会式について本規則に従わなければならない。
- 夏季デフリンピック及び冬季デフリンピックにおいて、象徴となるICSD旗の引継ぎは必ず行われなければならない。
- 執行委員会はメダル授与のための公式式典の全責任を負う。技術委員がメダル授与式を執り行うこともできる。

DG22. 技術会議

- ICSD執行役員、技術委員、組織委員会の役員といった主な人員の役割と責任を明確にするため、デフリンピックの前夜に上記すべての役員による会議を行うものとする。
- 各競技の技術会議は、遅くとも第1試合の1日前に行う。
- 技術委員会、抗議委員会及び各参加国から最大2名の代表者が、技術会議に出席する。代表者のうち少なくとも1名はろう者とする。
- トーナメント戦（テニス競技などの）抽選は、会議中に実施することができる。

DG23. 権限と判定権（審判員）

1. 執行委員会は、担当競技の監督責任をもつ技術委員（TD）とアシスタントを指名するものとする。技術委員は担当競技の技術委員会と抗議委員会の兼任委員となる。
2. 技術委員会は5名の委員から成り立つ。1名は技術委員である。組織委員会は他の4名を指名するものとする。
3. 各競技の競技規則は国際連盟規則とし、規則の聴覚的な合図を視覚的な合図に修正をする。
4. 各審判員、スタート係及びその他競技役員は、国内で最も適した者の中から組織委員会が選出する。
5. 組織委員会は、全審判員の資格証明書を最初の技術会議の14日以上前に技術委員に提出するものとする。
6. デフリンピック期間中の審判員の責任は、審判員の持つ他の専門的責任と矛盾しないものとする。
7. 可能な限り、審判員の国籍は、競技に出場しているいずれかのチームと同じ国籍ではないように計らう。
8. 各国連盟は、デフリンピックでの職務に国際的な資格を有する審判員を推薦することができる。その連盟は当該審判員にかかるすべての費用を負担しなければならないが、組織委員会と合意がある場合を除く。
9. 各審判員の名前及びその担当スポーツは、デフリンピックの6か月以上前に組織委員会に通知されなければならない。
10. 組織委員会は、各審判員の任命に全決定権を有する。
11. 組織委員会は、準会員が組織した審判員認証コースに合格したろうの審判員を承認し、職務にあたらせる。

DG24. 異議（第一審）と控訴（第二審）（紛争）

1. ICSD 会長又は会長により指名された者は、開催国連盟（又は組織委員会）又は大会参加国連盟により提出されたデフリンピック関係の紛争を判定する権限を有する。
2. 競技中に試合についてだされた異議は、担当の審判員によって判定が下される。これらの審判員の判断の対象となるのは、試合結果が決定してから2時間以内に英語の書面で異議申立てがなされた場合に限られる。紛争に関して、さらに明確にする必要があれば、該当する国際競技連盟規則を参考にしなければならない。
3. 役員決定に対する控訴は、抗議委員会に対して行うことができる。執行委

-43-

員会で決められた額の預託金を同時に提出しなければならない。

4. 抗議委員会の決定に対する控訴は、第一審における抗議委員会の決定後4時間以内に、申立てを行う選手団の役員が、デフリンピックの控訴陪審員団に対して行うことができる。
5. 抗議委員会は5名からなり、1名は技術委員とする。他の4名は組織委員会が指名する。
6. 控訴陪審員団は5名で構成され、うち3名は ICSD 執行委員会が指名し、残りの2名は組織委員会が指名する。
7. 申立てが受け入れられた場合、預託金は申立てを申請した側に返却される。
8. 聴力検査及び選手のドーピングに関する申立ては、(医療委員会、選手委員会などの主要代表者と協議の上)、執行委員会が判定権をもつ。

DG25. 技術規約

1. 執行委員会と技術委員は、各競技の技術規約を作成し、必要であればデフリンピックのプログラム上の各種目についても技術規約を作成する。
2. これらの技術規約は、オリンピック大会規則又はデフリンピックの少なくとも6か月前に有効な現行の国際連盟規則に合わせるものとする。
3. これらの技術規約は電子的に公開され、デフリンピックの6か月前に関係する全国連盟に送られるものとする。
4. デフリンピックのプログラムに含まれる全ての競技に対し、競技施設及び設備を提供する。全ての施設は、ろう者にとってアクセスしやすいものでなければならない。またメインスタジアムや選手の滞在先から便利などにならない。

DG26. 場所

夏季デフリンピック施設：

- メインスタジアムは400mトラック、最低8レーン、及びフィールド競技用に十分な面積を人工地面で備えるものとする。国際基準の電子記録装置は全トラック種目のゴール地点で利用できなければならない。できれば、メインスタジアムで開会式及び閉会式を行い、これらの前イベントとしてサッカー競技の試合を行う。

下記の競技施設は次の通りであること。

-44-

- 陸上—人口地面に400m/8レーンのトラック、国際基準の電子記録装置、フィールド競技に適切な施設を備え、すべてのランニング競技及びフィールド競技の地面は、国際競技用に認められていること。
- バドミントン—国際競技用に認められたコートは4面以上備える会場。
- バスケットボール—国際競技用に認められたバスケットボールコートは2面以上とさらに練習用コートを用意する。(必要ならば、コート2面以上の会場2箇所を利用して、男女別にトーナメントを行う)
- ビーチバレー—国際競技用に認められた2面以上の砂場。
- ボウリング—会場は国際競技用に認められた24レーン以上を備えなければならない。
- サイクリング—サイクリング・ロードは5,000m以上の1本の直線コース及び国際競技用に認められた複数の長距離コースを備える。
- サッカー—(メインスタジアムに加えて、)国際競技用に認められた正確な寸法と質の良い芝生の表面を備える6以上のサッカーフィールド。
- 柔道—後日発表。
- 空手—後日発表。
- オリエンテーリング—認められた国際認定コース。
- 射撃—国際競技用に認められた射撃場（空気銃の設備も備えていること）。
- 水泳—2~3の室内及び/又は屋外スイミング・プール（50mプール及び/又は水球競技場に加えて練習用プール）を備える。プールのゴール地点に国際競技用に認められた電子記録装置、プール及び時間測定装置を備え付けなければならない。
- 卓球—国際競技用に認められた卓球台が24台まで入るスペースを備える会場。
- テコンドー—後日発表。
- テニス—国際競技用に認められた8面以上のコート。
- バレーボール—コート2面を備える1会場又はそれぞれコート1面を備える2会場。すべてのコートは国際競技用に認められたものであること。
- レスリング—国際競技用に認められたマットを2面以上備えることのできる会場。

すべての競技会場に電光得点掲示板(スコアボード)を備える。スコアボードは競技場に固定されているものであっても、取り外し可能なものであってもよい。

-45-

冬季デフリンピック施設：

- アルペンスキー—回転、スーパー大回転、大回転、複合、滑降用のFIS(国際スキー連盟)適合ピステ、加えて適切な維持管理を要する。
- クロスカントリスキー—FIS規則及び規約に適合した5km、10km、15km、及び30kmのコース。
- カーリング—国際競技用に認められた4枚以上のシートを備える屋内スケートリンク。
- アイスホッケー—国際競技用に認められた室内スケートリンク(国際アイスホッケー連盟(IHF)の要件に従う)。
- スノーボード—国際スキー連盟規約に適合したハーフパイプ。大回転とパラレルスラロームにはFISピステが必要。

すべての競技会場に電光得点掲示板(スコアボード)を備える。スコアボードは競技場に固定されているものであっても、取り外し可能なものであってもよい。

デフリンピックパーク

夏季及び冬季デフリンピックでは、表彰式、情報センター、集会の場所などに使用されるデフリンピックパークを設けることを検討するものとする。このデフリンピックパークはシティ・スクエア(町の中心)又はデフリンピック選手村から近い場所に設けられるべきである。

DG27. 交通機関

1. 現地交通機関

1. 組織委員会は ICSD 全職員、役員及び競技者のために、宿泊先から競技場までの交通を確保するものとする。役員に対しては職務を行う施設、競技者に対しては競技を行う施設への往復の交通のみを提供する。競技チームの役員、ICSD 役員、組織委員会役員のみが交通サービスを利用できる。できれば全競技の技術委員用に、すぐ移動したい時に使用できる個人用車を用意する。
2. 登録していない競技種目を観戦するために交通サービスの利用を希望する選手及び役員は、組織委員会の判断で、交通費を自費負担することがある。
3. 交通サービスは開会式の2日前から閉会式後まで利用できるものとする。組織委員会が希望する場合は、空港と選手団の宿泊施設との間の交通手段を提供することができる。

-46-

2. ICSD 執行委員会

1. 会長及び執行役員には常に個人専用乗用車を用意しなければならないが、執行委員会委員のために移動用乗用車（バン）1台が提供されるものとする。
2. 組織委員会は、デフリンピック開会式及び閉会式に公式出席する ICSD 関係者に交通手段を提供しなければならない。
3. 輸送計画
1. 組織委員会は ICSD 執行委員会への定期報告書に、選手及び役員が競技会場、宿泊先、及びあらゆる関連施設間を移動できるすべての輸送手段の概要を載せた、輸送計画に関しての情報を含まなければならない。
2. ICSD 執行委員会は輸送計画に関する進捗状況の報告書作成のために、いつでも組織委員会と連絡をとることができる。

DC28. 医療と救急措置

1. 組織委員会はデフリンピック会期間中、適切な医療支援（医師、看護師、歯科医その他あらゆる医療職員）を提供する責任を持つものとする。
2. 各チームの医師、看護師及び選手団団長は、開催地に到着後可能な限り早くすべての医療サービスのリソース、連絡先について情報提供を受けるものとする。
3. 救急処置本部は全競技場で利用できるものとする。緊急事態に備えて医療スタッフ、救急処置スタッフ及び救急車が適切に配備されていなければならない。
4. 看護サービスは 24 時間体制とする。また、控えの医師が待機しており常に呼び出せる体制とする。
5. 病院施設は救急病室と重症患者のための病床を備え、24 時間無休で利用できるものとする。
6. 理学療法士が競技者を治療するのに必要な設備を整えるものとする。この設備は訪問療法士が自国選手団の治療するために提供される。
7. 自国選手団の競技負傷・医療診療所の設置を希望する国のために、当事国の宿泊施設に適切な場所を確保しなければならない。

DC29. 宿泊施設及び詳細

1. デフリンピック選手村
1. 組織委員会はできる限り、全競技者及び選手団役員が適切な価格で寝食ともできるように、適切で便利な立地の宿泊施設を提供するものとする。こ

-47-

- れと異なる対応をする場合には ICSD の承認を必要とする。
2. デフリンピック選手村はデフリンピック開会式の少なくとも 1 週間（7 日）前から閉会式の 3 日後まで開放されるものとする。
3. 選手村はメインスタジアム、練習場その他の施設にできる限り近くに配置し、ろう者が利用しやすいようにするものとする。
4. 技術委員、役員、審判員、タイム・キーパー及び ICSD と組織委員会が任命したその他役員の宿泊手配も行うものとする。

2. 選手村居住者

競技者及び公式職務担当者は選手村に滞在する。技術委員、役員、審判員、陪審員はデフリンピック選手村に滞在するものとする。

3. 住居

1. 組織委員会は ICSD と協議の上、ろう選手に適したアクセシブルな居住環境を提供する。ハウスキーパーは部屋が適切に利用できるよう維持管理し、住居に関する諸問題の対応にあたる。
2. 浴場及びトイレは毎日清掃する。寝室及び事務所は定期的（1 日おき）に清掃する。

4. 食事

組織委員会は大会参加国に対し、宗教上その他の理由により特別な食事が必要か情報を求め、特定の競技者にそのような食事を提供できるようにする。

5. 郵便物取り扱いセンター

郵便物取り扱いセンターを選手村に設置する。このセンターは、選手村の居住者宛てに届いた郵便物を仕分けし、配達する。センターは、競技会場、その日に開催される会議、及びその日の結果に関する情報の普及並びに日刊紙の配布に責任を負うものとする。

6. 娯楽施設

組織委員会は、選手その他参加者がレクリエーションプログラムを利用できるようにする。このプログラムには、開催都市のための社会的・文化的プログラムに関する情報を含む。

7. 洗濯

組織委員会はデフリンピック参加者全員のために、洗濯施設を提供するものとする。

8. 執行委員会の宿泊施設

1. ICSD 執行委員会及び技術委員会の全委員は、執行委員会の経費負担により、ICSD 本部の置かれるホテルに宿泊する。執行委員会は ICSD 本部に宿泊する者のために食事とクリーニング・サービスを提供する。ICSD 本部となる施設は、ICSD により承認されたホテルとする。

-48-

2. 客室は ICSD 執行委員会、ICSD スタッフ（オーディオロジスト、通訳者、その他の ICSD スタッフなど）、ICSD の来賓にも上記と同様に全食事付きで提供する。
3. 組織委員会は無料で最大 25 人の会議を開催できる会議室とラウンジ・スペースを提供する。これらの部屋には毎日、軽食、果物、特定の飲み物を備えておく。
4. 組織委員会は 8 名を収容できる事務局スペースを提供する。事務局スペースには以下のものを備える。
 - 事務机 6 つ
 - 作業机 2 つ
 - コピー機 1 台と白紙のコピー用紙 5000 枚
 - レーザープリンター 2 台と接続した Microsoft Office インストール済みのノートパソコン 4 台
 - 直接海外と通信できるファクシミリ機 1 台
 - 電話 2 台及び執行委員と技術委員の全員に e メールが出来る携帯電話 1 台

9. 宿泊施設（デフリンピック選手村がない場合）

1. 組織委員会は全競技者及び役員が手頃な価格で宿泊・食事できる様に、全参加国が同一施設を利用できない時はできる限り近くに、適切かつ便利な宿泊施設を提供する。
2. 宿泊施設は開会式の少なくとも 6 日前から閉会式の翌日まで、全競技チームが利用できるものとする。
3. 宿泊施設はメインスタジアム、練習場及び競技場のできる限り近くに設置する。
4. 組織委員会が任命した審判員、タイム・キーパー、その他役員の宿泊手配も行うものとする。
5. 組織委員会は ICSD 執行委員、技術委員、審判員及び ICSD が組織委員会と協議の上決定したその他の人員の宿泊費を負担する。これらの人員は主要競技会場に近い五つ星、又は四つ星の宿泊施設に滞在するものとする。
6. 選手の宿泊施設は、競技者、役員並びに組織委員会の委員及びスタッフに限り利用できる。応援団及び観客は、大会参加者とは別の宿泊施設に滞在するものとする。
7. 参加国選手団は、団員の特別食の手配に責任を持つ。

DC30. 大会の人員及び支援

-49-

1. 情報担当チーム

組織委員会は情報担当チームに研修を行う。情報担当チームは本部ホテルや主要競技場内の情報事務所を使用し、役員、競技者、観客に対してデフリンピック競技プログラムに関する情報を発信し、開催都市の文化施設及び歴史的施設に関する詳細なソーシャルプログラムを担当する。

2. 随行員

1. ICSD の主賓及び公式の来賓のために、随行員グループが待機する。随行員は、開会式・閉会式の補佐も務める。
2. 組織委員会は随行員グループが選手団も支援できるよう研修を行う。随行員の人数は、選手団の人数に比例して決定され、全員国際手話が堪能なものとする。随行員は選手団長と共に会議に出席し、選手団やスタッフを支援する。

3. 各選手団会議の開催

1. 組織委員会は適切な設備が整った部屋で毎日会議を開催し、会議では執行委員会、技術委員、組織委員会が共にその日の活動について話し合い、翌日のプログラムについて計画を立てるものとする。会議室は、夏季デフリンピックは最大 30 人、冬季デフリンピックは最大 20 人収容可能な部屋とする。
2. 会議室には、ノートパソコン、LCD プロジェクター、オーバーヘッドプロジェクター及びスクリーンを設置する。組織委員会にあらかじめ予約すれば、各国選手団もこの設備を利用できるものとする。

4. 通訳者

組織委員会は有資格通訳者が利用できるよう組織する。組織委員会は、各国選手団が国際手話に堪能な通訳者を 1 名利用できるよう手配する。

5. 警備

1. 組織委員会は大会参加者及びすべての設備の安全に責任を持つ。組織委員会は警備員と契約し、大使館及び警察と連携して特別警備体制を整えるものとする。
2. 組織委員会は、デフリンピック期間中についてのみ大会参加者とすべての設備の安全に責任を負い(DG2.を参照)、デフリンピック直前又は直後に発生した出来事・任務への責任はないものとする。

-50-

6. ボランティア
組織委員会は、現地の全会場及び競技プログラムに精通したボランティアを組織するものとする。ボランティアは主要会場への行き方と案内についてすべての参加者を支援する。

DC31. 違反

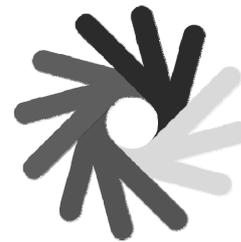
本規約の前述の条項に記載のない罰則手続が必要となった場合は、執行委員会が該当するあらゆる人又は組織に罰金を科すこととなる。その際は ICSD 執行委員会が最終決定する。

DC32. その他

本規約の条項に記載していない事柄については、ICSD 憲章及び付則を参照するものとし、場合により国際競技連盟規約及びオリンピック憲章に従うものとする。

第 42 回 ICSD 会議で承認—2009 年 9 月、中華台北・台北

オーディオグラムに関する規則



国際ろう者スポーツ委員会

第 5 版

改訂版 — 2018 年 3 月 14 日

コピーライト: © 2018 International Committee of Sports for the Deaf

この文書は ICSD によって作成され、同機関が所有権を有する。

目次

1. 前文	2
2. 参加資格に関する規則	2
3. 定義とろうであることの証明	3
4. オーディオグラム承認の提出手順	4
5. デフリンピックおよびその他 ICSD 認定競技大会において	5
6. 選手の自己責任	6
7. 発覚	6
8. 違反と罰則	7
9. 機密事項	7
10. オーディオグラム・データベースで使用されている重要な記号	8

1. 前文

スポーツ精神とは、人間の精神・肉体・心を祝い、以下の価値観によって特徴づけられるものである：

- 倫理感、フェアプレイ、正直さ
- 健康
- すぐれたパフォーマンス
- 人格と教育
- 楽しみと喜び
- チームワーク
- 専心と献身
- 規則や規約の遵守
- 自身および他の参加者の尊重
- 勇気
- コミュニティと連帯

ICSD は、*PER LUDOS Aequalitas* 「スポーツによる平等」というオリジナルのモットーを掲げ、オリンピック精神の本質をろう者とわかちあう。

夏季・冬季デフリンピックおよび世界選手権、地域選手権、その他 ICSD 認定競技大会には、ろうおよび難聴の選手だけが参加することができます。

正会員、準会員、地域連盟および賛助会員は、地域別および国際スポーツイベントにおいて、以下のオーディオグラム規則を遵守する。

2. 参加資格に関する規則

夏季・冬季デフリンピック、世界選手権、地域選手権、その他 ICSD 認定競技大会は、加盟団体である全国ろう者スポーツ協会のろうの選手が集結する場である。

デフリンピックおよびその他の ICSD 認定競技大会の参加者は、以下のとおりでなければならない：

- 良耳の平均聴力レベル (PTA) が 65dB 以上の聴覚障害を有する (500, 1000, 2000 ヘルツの三つの純音平均聴力レベル、気導、ISO1969 基準) ろう者であること。
- 加盟団体である全国ろう者スポーツ協会の会員であり、その国の国民であること。

選手は、禁止エリア内でのウォームアップおよび試合中には、いかなる補聴機器、増幅器および人工内耳体外装置の装着も厳しく禁止されている。スポーツ競技において、音の増幅器の使用が、使用していない者よりも有利に作用することは明白である。そのため、ウォームアップならびに試合中は使用が禁止されている。「禁止エリア」は、各々の競技において定義されている。詳細は、各競技の技術規則を参照のこと。

3. 定義とろうであることの証明

- 3.1. 「ろう」とは、良耳の平均聴力レベルが 55dB 以上の聴覚障害を有することと定義される (500, 1000, 2000 ヘルツの三つの音の周波数平均、ISO1969 基準) が、55-65dB の境界域の聴力については、慎重に審査すること。
- 3.2. 選手が片耳に人工内耳を装着している場合には、その耳については検査をする必要はないが、オーディオロジストは人工内耳が装着された耳がどちらであるかを明確にオーディオグラムシートに記載しなければならない。
選手は人工内耳を装着していない耳については検査を受ける必要がある。
- 3.3. 各選手の聴力検査の確認とその個々のオーディオグラムについての正確さと誠実性については、各国ろう者スポーツ協会が全責任を負う。
- 3.4. 初参加の選手は、ICSD 公式オーディオグラムの書式を用いなければならない。書式はインターネットからダウンロードできる。<http://www.deaflympics.com/audiogramform.php>

- 3.5 オージオグラム検査は、以下の4項目の全てがそれぞれの耳について完全に記載されなくてはならない。

1. 気導

250Hz - 8kHz

2. 骨導

500Hz, 1kHz, 2kHz, 4kHz

3. ティンパノグラム (ティンパノメトリー)

音量

圧

コンプライアンス

4. 耳小骨筋反射(リフレクソメトリー)

同側

反対側

適切な検査が行われない場合には、承認が遅れることになる。

- 3.6. 全てのオージオグラムは、正当と認められ、検査を受けた選手自身のものである。その有効性については、各国ろう者スポーツ協会が保障しなければならない。

4. オージオグラム承認の提出手順

4.1. 競技前:

- 4.1.1 新しいオージオグラムを提出する前に ICSD 事務局 (office@ciss.org) に連絡し、当該選手がすでに ICSD のオージオグラムデータベースの中に登録されているかどうか、自国の最新リストを確認する。もしリストに選手名がない場合、ICSD 事務局はその選手のオージオグラムデータを保有していないことを意味する。
- 4.1.2 いくつもの ICSD 認可の競技大会 (夏季/冬季デフリンピック、世界選手権、地域選手権を含む) においても、全ての新しいオージオグラムは大会の 3ヶ月前 までに提出されなければならない。かつ 1年以内 のデータでなければならない。
- 4.1.3 新規参加選手のオージオグラム提出遅滞の罰金は、書式受領日を基準に1書式・選手あたり40米ドル (競技前3ヶ月未満)、また 1書式・選手あたり100米ドル (競技前1ヶ月未満) となる。

- 4.1.4 新規参加選手の競技初日にオージオグラムが未提出の場合には、試合参加は認められない。

- 4.1.5 すべての新しいオージオグラムは、各国のろう者スポーツ協会によってのみ、直接 ICSD 事務局に送付されなくてはならない。

- 4.1.6 受領されたオージオグラムは ICSD のデータベースに入力され、「自国検査済み」であることを示す「N」(国内)と入力される。

- 4.1.7 3.5に規定されたとおり完全に全ての記入がされていない場合、完全な情報を記載して再提出されるまで、そのオージオグラムは「INC」(不完全)と入力される。提出が3ヶ月未満となった場合には、提出遅滞料金を 40または100米ドル を支払うものとする。

- 4.1.8 次に、オージオグラムは更新の確認のため ICSD オージオロジストへ送付される。

- 4.1.9 ICSD オージオロジストは承認するものと危険/境界線上にあるものとを示す。

- 4.1.10 承認されたオージオグラムは、ICSD オージオロジストによってのみ「N」から「C」(CISS) に変更される。

- 4.1.11 「X」記号の「危険」な選手、または「N」記号の自国検査のみの選手は、ICSD オージオロジストによって夏季・冬季デフリンピック、世界選手権、地域選手権、その他 ICSD 認定競技大会期間中に再検査される。

- 4.1.12 平均聴力レベル 55dB 以上という資格要件に当てはまらない選手は「DQ」記号で参加資格なしと判定され、書式受領日から最低2年間はオージオグラムを再提出できない。

4.2. 最終登録用紙:

- 4.2.1 最終登録用紙には「選手の ID 番号」欄がある。

- 4.2.2 オージオグラムが ICSD のデータベースに既に登録されている選手は、全国ろう者スポーツ協会が該当箇所に選手の ID 番号を入力する。これらの選手は、改めてオージオグラムを提出する必要はない。以下の例参照。

姓	名	生年月日	選手の ID 番号
DOE	John	31 Jan 1975	12345
SMITH	David	5 May 1978	
SHARP	Alfred	10 Dec 1977	22678

上の例では、DOE, John と SHARP, Alfred は ICSD のデータベースにオージオグラムが登録されているが、SMITH David は登録されていないことを示している。

- 4.2.3 オージオグラムのデータベース上、不十分であることを示す「INC」あるいは資格がないことを示す「DQ」が記載されている場合には、参加は許可されない。
- 4.2.4 オージオグラムを提出していない者には参加資格が与えられない。

5. デフリンピックおよびその他 ICSD 認定競技大会において

- 5.1. オージオグラム・データベース上、その選手が各国のオージオロジストによって検査されたことを示す「N」である場合、当該選手は夏季・冬季デフリンピック、世界選手権、地域選手権、その他 ICSD 認定競技大会期間中に、ICSD のオージオロジストによって再検査される場合がある。
- 5.2. 新規登録選手 (「N」ステータス) の予備的聴力検査が、ICSD 認定の全ての大会と予選、地域大会および世界大会を問わずに行われる。ICSD は全ての大会に対し、ICSD 公認オージオロジストを派遣できる。予備的聴力検査は選手が試合に来る前に行われなければならない。ICSD は1人または2人の公認オージオロジストをデフリンピックおよびいくつかの地域・世界選手権のために選任する。
- 5.3. 非公認のオージオロジストが ICSD 認定の大会にいた場合、その検査は ICSD オージオグラム検査規則に則って行う。そのオージオロジストは選手のオージオグラムステータスを「N」から「C」に変更することはできない。その選手も検査機関に行き、最新の聴覚検査技術 (携帯検査機器) を使用した検査対象となる。ICSD 執理事代表は、聴力レベルの詐称の有無を検査するためにその場で新規登録選手 (「N」ステータス) を選ぶことができる。万一、不正や疑惑が検査中に見つかった場合には、当該選手は病院の聴覚センターで更新検査を受け、その費用は選手が所属する全国ろう者スポーツ協会が負担する。
- 5.4. 現場で検査を受けて「境界線上」と判定され、参加資格基準に適合しない選手は、PTA (純音平均) が参加資格要件から5デシベル以内であることが明らかになれば、再度検査を受けることができる。一度だけ ICSD オージオロジストにより資格認定以前の別の日程で検査を受ける。

- 5.5. ICSD の公認オージオロジストによって検査・認証を受けた選手は「V」と表示される。

- 5.6. ICSD は、以前に承認を受けている選手であっても、いつでも検査、再検査を行う権利を有する。

- 5.7. 選手の聴力の資格基準に疑義が持たれる場合、ICSD はまず選手のオージオグラム・データベースを、下記の要領に従って調べる。

- 5.7.1 当該選手が「V」で示されている場合は既に ICSD によって検査されているため、その場のオージオロジストがこれ以上の検査を行う必要はない。

- 5.7.2 当該選手が「C」「N」もしくは「X」で示されている場合は、過去に ICSD による検査がなされていないため、オージオロジストは必ずこの選手の検査を行う必要がある。

- 5.8. オージオグラム検査は、試合のスケジュールを邪魔したり、変更させたりしてはならない。

- 5.9. 選手管理の下、検査時間の確保はチームリーダーの責任である。

- 5.10. 当該選手のチームリーダーは、検査を受ける選手とともに決められた時間に ICSD オージオロジストと会う。その選手と同行者は各自のパスポートを持参しなければならない。

- 5.11. 予約を守らなかった場合、料金が課せられる。

- 5.12. オージオグラム規則にしたがって検査を受けずに大会終了時に去った選手は、参加資格を失う。

6. 選手の自己責任

- 6.1. ウォームアップ中ならびに試合中にいかなる補聴器/増幅器ないしは人工内耳体外装置も禁止エリア内で着用しないようにすることは、各選手の 完全なる自己責任である。

- 6.2. 試合会場に入る際、全ての選手はいかなる補聴器/増幅器ないしは人工内耳体外装置の装着を認められない。全ての選手は、試合前の最終練習の間に、補聴器/増幅器ないしは人工内耳体外装置をはずさなければならない。

7. 発覚

7.1. 聴力機器類の使用

ウォームアップ中ならびに試合中に、禁止エリア内で選手が補聴器/増幅器ないしは人工内耳体外装置を装着していることが発覚した場合、ただちに、当該競技の技術委員と異議申し立て委員会にその旨を報告しなければならない。

当該試合において承認を受けているリーダーおよびトレーナーだけが、補聴器/増幅器ないしは人工内耳体外装置の装着について、公式な異議申し立て文書を提出することができる。

異議申し立て文書と共に、日時が刻印されたビデオによる、追加の証拠を作成しなければならない。伝聞による証拠は作成できない。

7.2. 参加資格認定期間中の聴力検査

選手が 55dB 以上の平均聴力レベルに適合しないことが、デフリンピックまたは地域・世界選手権において ICSD オージオロジストによって判明した場合、またはその大会のために任命されたオージオロジストにより判明した場合、当該選手は参加資格を得ることができない。選手が役割を「役員」等に変更しても、いかなる形の参加資格をも与えられない。

7.3. 異議申し立てもしくは ICSD 役員への選出による聴力検査

競技者が 55dB 以上の聴力障害を有していないことが、ICSD のオージオロジストによって判明した場合、当該選手は参加資格を剥奪される。また、当該選手の出場したすべての競技において、失格とされる。当該選手が団体競技に出場していた場合、それまで出場していた試合は没収試合とされ、そのスコアは国際スポーツ連盟 (ISF) の規則に従って没収される。

8. 違反と罰則

8.1. 違反

8.1.1 個人競技の選手が補聴器/増幅器ないしは人工内耳体外装置を装着している場合は、当該選手は即時に競技から除外されなければならない。当該選手が同じ競技で他の種目や、別の競技にも出場している場合には、違反が行われた種目についての失格となる。

例 A：陸上競技：選手が 100m、200m、400m に登録している。その選手は 200m のレース中に補聴器/増幅器の装着が発覚した。この選手は 200m は失格となるが、100m と 400m レースには影響はない。リレーで違反が行われた場合には、チーム全員がそのレースを失格となる。

例 B：バドミントン：選手がシングル、ダブルス、ミックスダブルスに登録している。その選手は、ダブルスでの補聴器/増幅器の装着が発覚した。当該選手はダブルスのみ失格となる。

-59-

り、シングルスとミックスダブルスには影響しない。もし違反がチーム競技で行われた場合には、チーム全員がその種別は失格となる。

8.1.2 チーム競技の選手が競技中に補聴器/増幅器ないしは人工内耳体外装置を装着していた場合、各競技の試合没収に関する規則に従い試合が没収され、チームは負けとなる。選手は、次の試合には自由に出場することができる。しかし、試合の得点状況によっては、負けることがかえってそのチームにとって有利になる場合がある。このことも考慮され、チームが没収試合の敗戦によって逆に有利になることが決まらなければならない。

8.1.3 同じ選手が違反を繰り返した場合、当該選手とチームは、即座に試合から除外されると同時に ICSD 事務総長に報告され、執行委員会が定める一定期間出場停止になる。

8.2. 罰則:

8.2.1 これらの規則に違反した場合、技術委員と ICSD 役員はすべての違反を ICSD 事務総長に報告する。失格した選手と（あるいは）そのチームに授与されたすべての賞品、賞、メダル、証書が取り消され返還される。更に ICSD 執行委員の決議に基づき、1000米ドルの罰金が課される。

8.2.2 いずれかの全国ろう者スポーツ協会が、2度以上、本規則 3.1、3.2、3.6 の規定違反をした場合、ICSD 執行理事会は、当該全国ろう者スポーツ協会に対し認定競技大会への2年間の出場停止を言い渡す場合がある。

8.2.3 出場資格を失っている期間中は、その全国ろう者スポーツ協会とその国のチームは、ICSD 認定の競技大会に出場することはできない。

9. 機密事項

データや選手個人情報は機密扱いにしなければならない。管理スタッフも同時に選手のデータの機密性の維持において誠実に細心の注意を払うことを確実にするために注意深い管理が必要となる。参加者の機密性を保護し、尊重するために適切な予防措置というのは：

- ・ 個人情報を公にすることのない漏洩発見リサーチ
- ・ リサーチ記録の確実な保存と権限保持者のみの限られたアクセス
- ・ 個人情報の削除、隠蔽、コード化

ICSD 理事会、ICSD 事務局スタッフ、地域ろう者スポーツ連盟、各国ろう者スポーツ協会、国際ろう者スポーツ連盟を含む ICSD 関係者全てが、選手の医学的記録の機密性を保持することを求められる。各国ろう者スポーツ協会が受領している全ての選手の記録は機密扱いとされ、情報が

-60-

非特定化され統計や概要データとしての目的以外では、受領者の書面での同意なしに開示されない。

10. オージオグラム・データベースで使用されている重要な記号

PTA - 平均聴力レベル、純音平均

dB - デシベル

V - ICSD のオージオロジストによって検査され、有効とされた選手

C - ICSD のオージオロジストによって確認され、承認されている申請書

R - 地域のオージオロジストによって承認されている「地域検査済み」

N - 自国のオージオロジストによって審査、承認されている

X - 危険/境界線上

DQ - 平均聴力 55 dB の基準を満たしておらず失格

INC - オージオグラムが不完全。詳細は 3.5 参照

TD - 技術役員

ICSD - 国際ろう者スポーツ委員会

-61-



Japan Deaf Sports Federation

第19回冬季デフリンピック競技大会

ソーシャルメディアガイドライン



一般財団法人全日本ろうあ連盟

ソーシャルメディアとは

ソーシャルメディアとはユーザーにより作成された内容を創出、交換することのできるインターネット・ベースのアプリケーション。

ブログ

一般的に誰もがアクセスできるウェブサイトの一つで、ジャーナルや日記の形で投稿、構成され、通常新しい順に表示されるもの。

ソーシャルネットワークサービス (Facebook, Twitter, Instagramなど)

利用者各人を表現する(通常個人プロフィール)、または利用者所有のリンク先など多種多様な追加サービスを含むオンラインサービス、コンピューターシステムおよびサイトのことである。

LINEのタイムライン

LINEにはトークでメッセージを送るだけでなく、Twitterのように自分のタイムラインに投稿をすることもできる。LINEのタイムラインは自分に起きた出来事を友だちに報告したり、友人の投稿にコメントしたりすることができる機能である。

YouTube、TikTok他…

資産の例

! 許可無く、営利目的で使用することは固く禁じられています。



デフリンピックロゴ



日本選手団ロゴ



大会ロゴ



静止画



動画・音声

デフリンピック資産の例

標記大会を広く知っていただくためにも、規制はいたしません。ただし、誤解を招くような使い方は控えて下さい。

(例：「イタリアデフリンピック大会」という名前だけの単独ブログを立ち上げる、など)

冬季デフリンピックを特定する単語

Winter Deaflympics

冬季デフリンピック競技大会

第19回冬季デフリンピックを想起させる単語

VALTELINA-VALCHIAVENNA2019

ヴァルテッリーナ2019

イタリア2019

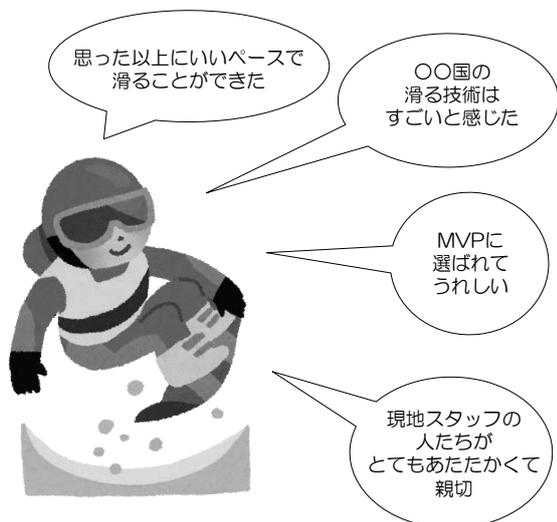
19th Winter Deaflympics

冬季デフリンピック競技大会派遣期間中
2019/12/8 ~ 2019/12/23

ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿していい内容■

この競技大会で自分自身が経験したことについて個人的な感想を書くこと



- 4 -

冬季デフリンピック競技大会派遣期間中
2019/12/8 ~ 2019/12/23

ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿していい内容■

文章の一部に「冬季デフリンピック競技大会」という言葉を使うこと



- 5 -

冬季デフリンピック競技大会派遣期間中
2019/12/8 ~ 2019/12/23

ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿してはいけない内容■

- ・企業・団体や商品のPRにつながる記載
- ・日本選手団オフィシャルパートナーやオフィシャルサプライヤ、オフィシャルメイトの中傷また批判につながる記載



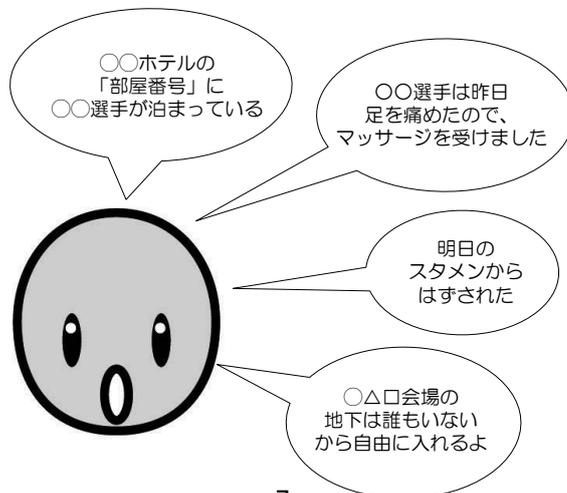
- 6 -

冬季デフリンピック競技大会派遣期間中
2019/12/8 ~ 2019/12/23

ソーシャルメディアへの文字投稿

■投稿してはいけない内容■

- ・他の参加者や組織の個人情報、秘密事項
- ・施設のセキュリティー



- 7 -

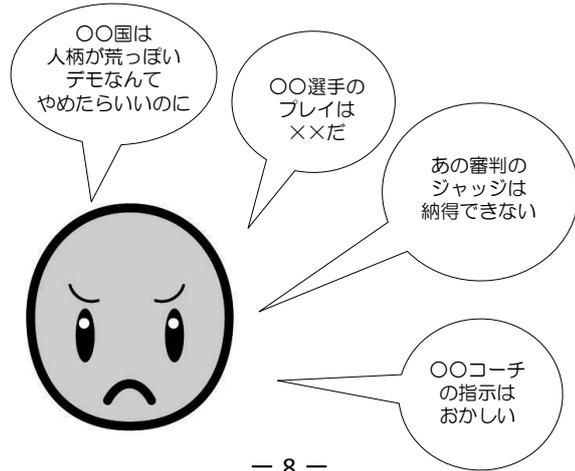
冬季デフリンピック競技大会派遣期間中
2019/12/8 ~ 2019/12/23

ソーシャルメディアへの文字投稿



■投稿してはいけない内容■

- ・大会にふさわしくないもの（他者や他の組織の批判・誹謗・中傷）
- ・他者を不快にさせるもの（ヘイトスピーチ、開催国への政治的批判）



- 8 -

冬季デフリンピック競技大会派遣期間中
2019/12/8 ~ 2019/12/23



個人で撮影した動画を、本人の許可無くあらゆる媒体で公表することは禁止



<例外>

会場で自分自身を撮影したもの

会場・宿泊場所以外で撮影したもの

- 9 -

冬季デフリンピック競技大会派遣期間中
2019/12/8 ~ 2019/12/23

メディア行為は禁止

大会期間中、メディアとして資格認定を受けた人以外は、会場や宿泊場所などで、記者・レポーター・カメラマンの他、いかなるメディアとしての活動をしてはいけません。



他者へのインタビュー



ネット番組などのパーソナリティやレポーターとして大会や選手の様子をレポートすること



マスコミや企業・団体の広報媒体への記事や写真、動画・音声の投稿

大会や競技の様子を生、録画を問わず放送すること

- 10 -

冬季デフリンピック競技大会派遣期間中
2019/12/8 ~ 2019/12/23

～撮影できる場所～



■競技会場■

スタンドからの撮影(競技、表彰)

■練習会場■

スタンドからの撮影(日本選手を撮影)

※被写体が気分を害するような動画や写真は絶対に撮影しないこと

- 11 -

冬季デフリンピック競技大会派遣期間中
2019/12/8～2019/12/23

～撮影禁止の場所～



■競技会場■

競技区域 (field of play) からの撮影

ウォームアップ区域 (出入口、屋内)

更衣室 (出入口、屋内)

招集所 (出入口、屋内)

■宿泊場所■

他国選手団の居住区

食堂 (出入口、屋内)

本部 (出入口、屋内)

アスレチックトレーナー室 (設備など)

— 12 —

冬季デフリンピック競技大会派遣期間中
2019/12/8～2019/12/23

競技結果の情報発信について

各自の競技に限り、リアルタイムでの
結果情報発信はしても構いません。

※ただし、公式結果と相違が出る場合がありますので、
各競技団体で責任を持ち、発信の際は十分にご注意く
ださい。

※自分の競技以外の結果情報発信はしてはいけません。

※ネットマナーは必ず守って下さい。

【投稿してはいけない内容】

- 他の参加者や組織の個人情報や秘密事項
- 他者や他の組織の批判・誹謗・中傷

全競技の結果は、大会組織委員会の公式結果報
告を受けたあと、「日本代表選手団公式サイト」
に毎回掲載します。

競技団体サイトやブログなどにも、
「日本代表選手団公式サイト」のリンクを貼って
下さるようお願いいたします。

— 13 —

大会後の写真の取り扱い

(日本選手団公式サイトに掲載した写真や動画)

ケースにより
取り扱いが異なります



まずは全日本ろうあ連盟に
お問い合わせください

一般財団法人全日本ろうあ連盟 スポーツ委員会

FAX: 03-3267-3445 TEL: 03-3268-8847

E-Mail: jfd-sc@jfd.or.jp (受信専用)

— 14 —

⑫デフリンピック開催地一覧

夏季デフリンピック開催地一覧

回数	開催国	開催都市	開催期間	大会規模		日本代表団派遣			日本代表団成績			
				参加国・地域数	選手数	選手	役員	計	金	銀	銅	
1	フランス	パリ	1924年8月10日～8月17日	9	148							
2	オランダ	アムステルダム	1928年8月18日～8月26日	10	212							
3	西ドイツ	ニュルンベルグ	1931年8月19日～8月23日	14	316							
4	イギリス	ロンドン	1935年8月17日～8月24日	12	221							
5	スウェーデン	ストックホルム	1939年8月24日～8月27日	13	250							
6	デンマーク	コペンハーゲン	1949年8月12日～8月16日	14	391							
7	ベルギー	ブリュッセル	1953年8月15日～8月19日	16	473							
8	イタリア	ミラノ	1957年8月25日～8月30日	25	635							
9	フィンランド	ヘルシンキ	1961年8月6日～8月10日	24	613							
10	アメリカ	ワシントン	1965年6月27日～7月3日	27	687	7	4	11	0	1	1	1
11	ユーゴスラビア	バオグラード	1969年8月9日～8月16日	33	1189	9	4	13	0	4	0	0
12	スウェーデン	マルメ	1973年7月21日～7月28日	31	1116	9	4	13	4	2	0	0
13	ルーマニア	ブカレスト	1977年7月17日～7月27日	32	1150	17	8	25	5	2	0	0
14	西ドイツ	ケルン	1981年7月23日～8月1日	32	1198	33	11	45	7	4	2	2
15	アメリカ	ロサンゼルス	1985年7月10日～7月20日	29	995	52	15	77	8	5	2	2
16	ニュージーランド	クライストチャーチ	1989年1月7日～1月17日	30	955	40	16	56	7	3	4	4
17	ブルガリア	ソフィア	1993年7月24日～8月2日	52	1679	41	13	54	4	7	5	5
18	デンマーク	コペンハーゲン	1997年7月13日～7月26日	65	2028	44	14	58	6	1	1	1
19	イタリア	ローマ	2001年7月22日～8月1日	67	2208	60	26	86	10	5	5	5
20	オーストラリア	メルボルン	2005年1月5日～16日	63	2038	102	33	135	3	7	1	1
21	台湾	台北	2009年9月5日～15日	77	2493	154	90	244	5	6	9	9
22	ブルガリア	ソフィア	2013年7月26日～8月4日	83	2711	149	70	219	2	10	9	9
23	トルコ	サムスン	2017年7月18日～7月30日	86	2855	108	69	177	6	9	12	12
24	ブラジル	カシアス・ド・スル	2021年12月5日～12月21日									

冬季デフリンピック開催地一覧

回数	開催国	開催都市	開催期間	大会規模		日本選手団派遣			日本選手団成績			
				参加国・地域数	選手数	選手	役員	計	金	銀	銅	
1	オーストリア	ゼーフェクト	1949年1月26日～1月30日	5	33							
2	ノルウェー	オスロ	1953年2月20日～2月24日	6	44							
3	西ドイツ	オーベルアムメルガウ	1955年2月10日～2月13日	8	59							
4	スイス	モンタナヴェルマラ	1959年1月27日～1月31日	9	53							
5	スウェーデン	オーレ	1963年3月12日～3月16日	9	60							
6	西ドイツ	ベルヒスガーデン	1967年2月20日～2月25日	12	77	2	3	5	0	0	0	0
7	スイス	アーデルボーデン	1971年1月25日～1月29日	13	92		(不参加)					
8	アメリカ	レイクプラシッド	1975年2月2日～2月8日	13	139	10	3	13	0	0	0	0
9	フランス	メリベル	1979年1月21日～1月27日	14	113	8	5	13	0	0	0	0
10	イタリア	マドンナ	1983年1月16日～1月23日	15	147	9	6	15	0	0	0	0
11	ノルウェー	オスロ	1987年2月7日～2月14日	15	129	10	4	14	0	0	0	0
12	カナダ	バンフ	1991年3月2日～3月9日	16	181	9	6	15	0	0	0	0
13	フィンランド	ユウラス	1995年3月13日～3月19日	18	258	9	5	14	0	0	0	0
14	スイス	ダボス	1999年3月8日～3月14日	18	265	10	5	15	0	1	1	1
15	スウェーデン	スツツハル	2003年2月28日～3月8日	21	247	14	15	29	2	0	0	0
16	アメリカ	ソルトレークシティ	2007年2月3日～2月10日	23	298	17	22	39	3	0	1	1
17	スロバキア	ハイタトラス	2011年2月10日～2月20日	中止	中止							
18	ロシア	ハンティマンシースク	2015年3月28日～4月5日	27	336	22	26	48	3	1	1	1
19	イタリア	ヴァルチェッリーナ、ヴァルケヴァエーナ	2019年12月12日～12月21日	34	493	15	32	47	0	0	0	0

第 19 回冬季デフリンピック競技大会 日本選手団参加報告書

発行日：2020年3月31日

発行：一般財団法人全日本ろうあ連盟

〒162-0801 東京都新宿区山吹町130 SKビル8F

TEL 03-3268-8847・FAX 03-3267-3445

ホームページ <https://www.jfd.or.jp/sc/>

Eメール jfd-sc@jfd.or.jp

編集：一般財団法人全日本ろうあ連盟 デフリンピック派遣委員会

編集協力：一般社団法人日本ろう者スキー協会

印刷：日本印刷株式会社



第19回冬季デフリンピック競技大会日本選手団ロゴマーク